
ブラックレイン

紙村弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックレイン

【Nコード】

N8352J

【作者名】

紙村弘

【あらすじ】

荒野の吹き溜まり、フロンティアゼクス。

クソツタレだらけ、6番目の開拓地、この地に魔術の使えない魔術師ジーンはいた。

ある日、調子に乗ってギャンブルに大枚をはたき借金まみれになる。借金を返済するために、大金を稼ぐ仕事を探すジーン。

見つけた仕事は、

「少女を一週間保護せよ」

目指せ、マカロニウエスタンとバトルファンタジーの融合。(無理)
燃え要素があるかどうか不明。萌え要素はあるのかはもっと不明。
キャラが多すぎるぜ馬鹿野郎!

五年前（前書き）

当然のことながら、フィクション。
あともともと同名でモバゲーで掲載していたのもあって、こっちは
PCで読むことをお勧めします。

2008年執筆

五年前

その日は雨だった。

空からは、ほとんど豪雨といっても良いほどの雨が降り注ぐ。

三月一五日、国立オルフェリア魔法学院の卒業式は、いつも雪が降る。

今年の予報も例外なく雪を予測していた。だが、予測に反しての雨。

だがそうは言っても別段悪いジンクスは無く、誰もが疑うことなく、式は滞りなく進んでいく。

例年通りの学長のクソ長い演説。

教頭の、恐ろしく的を得たシンプルな演説。

校歌斉唱。涙ながらの卒業証書授与。エトセトラ、エトセトラ。

超名門校、魔法系連合国の中でも随一の研究機関であり、また教育機関でもある国立オルフェリア魔法学院の教えはとてつもなく厳しく、時に逃げ出すものさえいた。

だが、その生活も今日で終り、共に支えあつた友人たちとも別れ、それぞれが連合国の礎としてそれぞれの場所へと進んでいく。

例年通りに進んでいく卒業式。

例年通り、学生だった頃の辛かった思い出、友との離別を悲しみそれぞれに感情を表す。

あるものは泣き、あるものは感慨にふけり、あるものはこの先にあるものを期待しながら、別れの儀式を続けていく。

毎年行われてきた、毎年すべての生徒が必ず出席する全校行事。

だが、それにもかかわらず今年は例外的に欠席者が二人だけいた。学院創設以来の神童、ソルフエリア・アージユ。

そして学院創設以来の悪童、ジーン・シュヴァイツァー。

学院内での羨望と、憧れを一心に集めたソルフエリアと、学院内の見下しと、恐れを一心に集めたジーン。

二人の欠席は周囲を驚かせるものだったが、それ以外に特に異常は無く卒業式は粛々と続いていくのだった。

「全く、ソルフェリア君には生徒代表の挨拶を頼みたかったのだがね。残念でならないよ」

学長は舞台の袖で毒づく。

「突然の欠席でしたからね。別にこの式も強制している訳では無いのですから、何も問題は無いのですが」

長身瘦躯の教頭はぼんやりした様子で学長に答える。

「あの二人、一体なんのために休んだんだろう？」

「さあな、知らんよ」

学長はやれやれと肩をすくめた。

「ただ単に、サボタージユしてどこかに遊びに行ったに違いあるまい」

「そうだと良いのだが……」

教頭は心配そうに、黒い雨の降りしきる窓の外に視線を向けた。

「嫌な日だ」

黒い雨が森の木々を揺らす。

雨によって地面はすっかりぬかるみ、黒い水溜りがそこかしこに出来上がっている。

暗い森の中を二人の男が走っていた。

共に同じ黒いローブを身に纏い、それぞれの手には形状こそ違えど、ドルイドの杖が握られている。

後ろを走る男の杖は真っ直ぐで、武芸者が使う棍棒のような形状。前を走る男の杖は、まさに魔術師然とした、歪んだ形状。

不意に前を走る男が立ち止まり振り返る。

そのまま、歪んだ形状の杖を後ろを走る男に向ける。

「穿て」

刹那。

ショートワードと共に杖の周りに三つの火球が発生。後ろを走る男に襲い掛かる。

「無駄だぜソルファ」

走っていた男が立ち止まり、棍棒のような杖を高速で回転させる。三つの火球は、高速回転させた棍棒、それに刻み込まれた術式によつて生まれた障壁に弾かれ、全て消えた。

「ジーン！」

ソルファと呼ばれた男、ソルフェリア・アージュはジーン・シユヴァイツァーをにらみつけた。

「来いよ、俺たちの卒業式をそんなチンケな形で終わらせるのか？

お前は」

「言われなくたって！」

ソルファが駆け出す。

杖の先端を振りかぶつて、凄まじい速度で振りぬく。

スウェーバックでジーンはその一撃をかわす。

体が後ろに倒れる勢いを利用して、ジーンはソルファのこめかみを殴りつける。

よろけたところにジーンが畳み掛けるように連撃を放つ。

大腿、わき腹へと攻撃を受けてしまったものの、ソルファは、連撃を受け止めてジーンへと切り返す。

攻防一体。傍から見れば二人の技量は同等に見える。

だが、ソルファの攻撃は命中することはなく、一方でジーンの攻撃は強烈な打撃こそ無いものの、有効打を積み重ねていく。

杖と杖を重ねることにソルファが傷ついていく。それが現実だった。

ソルファの肉体には既に、肉体強化形魔術バベルズ・アトラスが掛かっている。

魔術の概念とは、仮面の外側の世界の現象をこちらの世界に呼び出すということである。

今のソルファは仮面の外の世界から、自らの体に別の体呼び出

した状態であり、その体は間違いなく人外と呼ばれるものと同格であった。

「生憎な、お前と違って、年季が違っただよ！ 年季が！」

ソルファの攻撃をかわし、ジーンはカウンターでソルファのボディーに突きを見舞う。

だが一方のジーン。自らに一切の魔術的な処置を行わない。いや、行えない。

強力な肉体を別次元から呼び出したソルファに追隨できる理由。

それは、ひとえにジーンが魔術師であることを諦め、武芸の鍛錬のみで強くなるうと、何年間にも及ぶ過酷な鍛錬の賜物だった。

振り下ろしたソルファの杖が、ジーンの前で受け止められる。「狙ってるところが違っただよ！ 穿て！」

ソルファの杖の先、五つの火球が一斉に現れる。それと共に、ソルファは強化した筋力にものを言わせて後ろへ飛び退いた。

避ける間も無く爆発。

凄まじい、衝撃と爆風がジーンを襲った。

「流石にほとんど零距离で撃てば、杖のディスプレイも使えないだろう」

ソルファは再び構え直す。

目の前にあつた、煙が晴れ、そこからジーンが現れた。

最低限の防御は行ったものの、杖をつきながら立っているのが精一杯だった。さらに肋骨が数本、それに左手は使い物にならなくなっていた。

「つたく、どんな手が来るかなんて常に予測がつきやしねえ」

苦しい状況にも関わらず、ジーンはいつもの様に悪態をついた。

「だからこそ、この勝負にこだわる。僕とジーンどっちの方が強いのか」

「それが俺たちの卒業式だとな！」

在学中常に互いに思っていたことだった。

成績では圧倒的な優等生ソルファ。魔法戦においては学内で最強。

一方で魔法が使えないまでも、何でもありな喧嘩においては最強のジーン。

この二人はかつて親友だった。つい、この前まで。お互い、実のところどちらが上か確かめたかった。そして今日の卒業式。

絶好の機会だった。だからこうして、試合う。

どちらが強いか、自分の技と心と肉体を全てかけて試合う。彼らがどんな境遇にしようとも、この結末は避けることが出来なかったのだ。

既に戦いは終盤に差し掛かっていた。

度重なる接近戦で、何度もダメージを負ったソルファ。

杖のディスプレイ効果を縫って、一発だけで重傷に追いやられたジーン。

ダメージの総量はほとんど互角、お互いにそろそろ勝負を決めた。い。

先に動いたのはソルファだった。

「ああ、分かっているさ。切り札はもう一枚ある」

パチンとソルファが指を弾くと、ジーンの周囲その一帯が爆発した。

ソルファが戦いの前にあらかじめ仕掛けておいたであろう魔術式の爆弾が爆発したのだ。

その狙いは一瞬だけジーンを足止めすることにあつた。

「一気に決めさせてもらう」

爆発と共に、ソルファは自らの杖を突き立てると、懐から何十枚ものカードを取り出し、それを空中にばら撒く。

「一斉起動、出力方式、コード 赤い雨！」
空中に踊ったカードが赤い光を放つ。

カードにはソルファの魔術の術式と、魔力が込められており、使いきりの魔術弾丸となっていた。

赤い光が、光線と成り、何十もの光線が一斉にジーンへと襲い掛

かる。

「数だけあつたつとところで！」

広域に放出された魔術弾丸の赤い雨。

ジーンは持った杖を高速で回転させ、自分に当たる分だけの光線を確実に防御していく。

防御し切ることが出来る攻撃。だが、ジーンには疑問があった。

ソルファはこの攻撃にしても自分が持っているこの杖ならば防ぎ切ることが出来ることぐらいわかりきったことなのではないのか？と。

杖を高速回転させ、障壁を作り出しながらソルファを見やる。

ソルファは再び杖を取り、祈るように言葉をつむいでいく。

「汝、鍵を開くならば上等な扉を与えてやろう。汝、契約に即し我に力を見せたまえ！」

光線の後ろ、ソルファの頭上に黒い渦状の歪みが出る。

ジーンは直感で理解した。

契約獣の召還。

現存する魔術の中で最も強力な魔術の行使の一つ。個人言語のオリジナルを象徴する魔獣の一時的な召還。

受けてたところで間違いなく死ぬ。

ならば、この雨のように降りかかる攻撃、そして、自らの炎剣を捨てたのは、すべてこの攻撃のために積み上げてきたということ。

この日のため、最後まで隠し通していた切り札の行使。

ソルファは、最初からこの形で締めくくるつもりだったのだ。

「まずい！」

「出でよ！ 紅蓮乱流！」

渦状の歪みから、竜の頭が飛び出す。

炎を纏った竜が光線の後ろから怒涛の勢いでジーンに押し寄せる。避けようにも、あの赤い雨が退路を阻んでいる。

ジーンは気が付いた。赤い雨、それにあの紅蓮乱流という炎の竜は、横に広く攻撃しているものの、高いところまでは覆ってはいな

かった。

空中。

賭けのようだが、唯一の退路。

ジーンは杖を回転させて光線を防ぎながら助走をつけ、杖を地面に突き刺すと、それにを足場にして高く飛び上がる。

飛んだ瞬間に光線が直撃しなかったのは幸運以外の何物でもない。眼下を紅蓮乱流と光線が赤い濁流のとして流れすぎていく。

高く、高く昇って行く。

頂上まで昇ったとき、眼下の赤い濁流は消えてなくなる。

「いない……だと？」

ソルファが驚愕する。燃やし尽くしたジーンの焼死体がそこにあると疑わなかったのだろう。

「こつちだぜ！ ソルファ！」

落下。

その勢いを拳に乗せて、振り下ろした。

ぶん殴られたソルファは、二歩、三歩と後ろに下がり何とか堪えようとするが、それは叶わず、倒れた。

「どうして……」

ソルファが、うめくように言う。

「大した野郎だ。魔術弾丸をおとりに、契約獣の召還。到底並みの魔術師に出来る芸当じゃねえ。だが、俺には運悪く通じなかった。

それだけのことだ」

自分がかわせたのはソルファにとって運が悪かった。明暗を分けたのは本当にそれだけのことだった。

「……あばよ。それじゃあ、俺は行くぜ」

ジーンは地面に突き刺さっている術式が崩壊した杖を取ると、荷物を持ったところへ歩き始めた。

後ろからは親友だった男の慟哭が聞こえてくる。

やがて雨がすべての音を支配したとき、ジーンは親友を無くした。

貧乏暇なし

「うあああああ、な、なにやってるんだ俺！ あーもう、どうしよう。どうしたら良いんだ！」

長身痩躯、野生の狼を思わせる鋭い切れ長の目に、短くざんばらに切った茶色の髪、はたからみればそこそこに良い男にカテゴライズされるこの男。

しかし、今やあまりにも余裕の無さに地面をのたうち回っている。「つたく、ウルサーっつの」

その女は男の股間をフルスイングで蹴り飛ばす。

「ぐっつ、がはっ！」

男は一瞬、痺れたように停止すると、そのまま地面に崩れ落ちた。ショートカットの赤髪に、吊りあがった大きな瞳。全身からあふれるしなやかさや、獰猛さから、狩りをするメスのライオンを連想させる。また、男の股間を容赦なく蹴り倒す「そんなこと」をされるのが大好きな連中には最高の臭いが漂ってくる容貌だった。

「ジーン。あたしはせっかく気分良く、事後の一副を愉しんでいたってのにさ、何？ アンタのその余裕の無さは」

「黙れ、腐れビッチが」

「ああ！ なんだとこら、その腐れビッチと何十回も回数こなしてる分際でよく言えるなこのヘタレ」

「カンケーねーよ！ そいつあただ単にテメエ以外に手ごろなモンがねーからそうなってんだろ？ 勘違いしてんじゃなぞビッチ」

ジーンに、ビッチと呼ばれた女リナは突然黙り込むと、拳を鳴らした。

ジーンはそれが自分を殴り飛ばすポーズと気付かずに続ける。

「お前の良さは安さだ。だが、安さ意外には何も無い粗悪品なんだよ。締まりはそこそこなんだがな、肉が固くついていけねえ」

めきゃこん。とジーンのほお骨は陥没した。

そのまま壁へと叩きつけられるジーン。

「すまねえ俺が悪かった」

「分かれればよろしい」

リナは自分の右拳をハンカチで軽く拭うとそれを、ポケットの中
にしまった。

「で、何があつたつてのさ？」

「リナ、お前の方こそ何があつた？ やけに優しい辺り気持ちが悪いぞ」

「優しい？ いいや違うね。単純に人の不幸を肴に笑いたいだけよ」
そう言つてリナは持ち前のサディスティックなスマイルをジーン
に向ける。

「はあ、分かつたよ。俺も誰かに聞いて欲しいつて気持ちは否定し
ないがな。確か昨日の夕方のことだった」

丁度ジーンは大口の仕事をいくつも立て続けに片付けて、久々の
休日だった。

大量の現金を財布に詰めて、さてこれからいつちよ飲みに行くか
とウキウキでいたときのことだった。

「お兄さん。そんなにお金があるんだつたら、ちよつと遊んでいか
ない？」

「何して遊ぶつてんだ？」

「ギャンブルよ」

その誘いをかけた女の妙に扇情的な姿に惹かれたのもあつたのか
もしれない。だってバニーさんだぜ？

人を見たら悪魔と思え、そんな最も基本的な町のルールを忘れて
ほいほいついていってしまった。

勝負は最初から最後までポーカ！。

最初のほうは調子が良かったのか、勘がさえたのか連勝に連勝を
重ねた。

そこで気持ちよく帰ればよかったのだ。

「ここで帰っちゃうのかい？ もったいないなくお客さん今日はツイてるのに」

この言葉にまんまと乗せられた。

以降は連敗に連敗を重ね、あっという間に財布はすっからかん。

「お客さん。まだやりますかい？ ツキにはすっかり見放されたようですが」

「まだだ！ まだ終わらん！」

その瞬間、爽やかなディーラーの顔に嗜虐的なものを確かに見たような気がした。

だがそんなことは気にせず、勝つまでひたすら負け続ける。

実際のところほとんど勝ち拾えず、十回に一回程度勝ちを拾える程度。

勝負は無残だった。

意地になつて、ひたすら掛け金を積んでいく。だが、そのすべてカジノに持っていかれる。

どれくらい負けたか、突然肩を叩かれた。

「なんだ？ うるせえな」

振り返ると、黒スーツに身を包んだ大柄な男が後ろに立っていた。

「ちよつと裏まで来ていただけませんか？」

「俺はこの勝負に勝つまで動けねえってんだろ！」

「だから、てめえはもう負けが確定してんだよ！」

首を引つ掴まれると、その空中に持ち上げられる。

「わ、分かった。分かったから下してくれ」

首を掴む手を叩くと地面に下してもらう。

「では、裏まで来ていただきましょうか」

妙に柔らかい笑顔の男たちが気味悪かった。

そしてそいつらの裏についていくと、そいつらの態度は急変。

恫喝。半端じゃない恫喝。

しかも悪いことにそいつらは、そこそこの能力者でジーンが杖なしで対抗できるような相手じゃなかった。

おとなしく言う事をきくことにする。

負け越した金額は全部で千万ガルド。持っていた有り金と、家の金庫の金を差っ引いて残りは七百万ガルド。

曰く、十日以内に返済できないならば、保険かけて埋めるとのことだった。

「んでまあ、やけになって酒を飲んでいたらお前が来て、いつも通りのことをしたってわけよ」

「ぶわっはっはっは！ あんたちよーバカじゃねーの」

すべてを聞き終えると、リナはソファアをバンバン叩きながら笑う。

「そりゃ、典型的な力モのパターンだよ。勝たせて、調子に乗らせて、そこから一気に搾り取る。それがあいつらの基本的なパターンさ。ご愁傷様」

「本当、笑っただけなんだな。まあ期待はしてなかったが」

「当たり前でしょう？」

リナは手に持ったタバコをもみ消すと、上着を手にとって立ち上がる。

「人を見たら悪魔と思え。それがこの町の鉄則。悪魔に施して何の得があるってのよ。大体アンタいっつも、ケツに火がつくような事ばかりやって学習能力無いの？」

「あーあーあー！ 期待はしてねえよ。良いからとっとと帰れ」

ジーンは新しいタバコを取り出すと、それに火をつける。送る気なんてさらさら無い。

「せいぜいあがくのね。もっとも、あたし好みの可愛い男の子紹介してくれるなら話は別だけど」

ニコリと仕事の時に見せる笑顔を見て、ジーンは肩をすくめた。

「ビッチな上に、シヨタコンか、ますます救いようがねーな」

「アンタに言われたかないよ」

ドアが閉じられて、ジーンは改めて自分が切羽詰った状況に居る

ことを自覚した。

あのカジノを運営しているのはこの土地で結構幅を利かせているマフィアだ。

借金を返さないことに、奴らはどこまでも追っってくるだろう。

逃げようなどということは最初から選択肢に入れないほうが懸命だ。

「どうすっかな」

ジーンはぼんやりと、タバコの紫煙を眺める。

妙にクリアになった思考が憎たらしかった。

「くそつたれが」

呪いの言葉を口にすれば少し気分がよくなるような気がした。

砂嵐が吹きすさぶ町を歩く。

もうこの町に越してきて、三年以上経つが未だにこの砂嵐と、照りつける太陽は苦手だった。

ほどなくして、目的地である店の前にたどり着くジーン。

看板にはシンプルに《事件屋》の文字がある。

ジーンはため息を一つつくど、扉を押して店の中へと入っていく。

「いらっしやい」

店はこじんまりとっていて、妙にヤニ臭い。

壁一面には、引き取り手の必要な仕事の募集。事件屋はこの町以外にも存在するが、どの町でも似たようなものだ。

この店の店主であるマルロは新聞から顔を上げて、気さくな調子でジーンに応える。

そんなマルロを意に介さず、ジーンはずか店の奥へと進んでいく。

「仕事くれ」

「今日はどういった用向きで」

「とにかく金だ、金が要るんだ」

ジーンはとりあえずこの町にある事件屋を当たって、片っ端から仕事を引き受けることによって何とかこの状況を打破しようと考えていた。

「へえ。じゃあ今急ぎの仕事が一つあるが」

「報酬は？」

「三十万ガルド」

「足りねええ！」

バン！ バン！ バン！ と、思いきり番台の机を叩くとマルロは体をすくめた。

「ど、どうしたよ。いつものお前らしくも無い。何が有ったか話してみる」

マルロの言うとおりジーンは通常の状態と比べて明らかにおかしかった。

目は血走っており、息は荒く、肩を怒らせていかにも切羽詰ってる感じだった。

ジーンが事の次第を昨日リナに話したように話すと、マルロはため息をついた。

「おめえ、マジで地獄への道まっさかさまで驀進中だな」

「うるせえ。俺がお前に聞いているのは、これをチャラにすることが出来る手段が仕事にあるかどうかだけだ」

「おーけーそれなら応えよう。求めよされば与えられんだ」

「っは、いつから聖職者気取るようになったんだか」

「地獄で仏。その言葉を何人が思ったことか」

「だがほとんどが、新しい地獄の一丁目へのチケットだ」

「ゼクスって町にいるってことは、そういうことだろうに」

まっつけ、と一言ジーンに告げるとマルロはその丸い体を屈めて引き出しを漁る。

「あ、あった、あった。コイツだ」

マルロは体を起こすと、引き出しから探し出した依頼書を一枚、机の上に置いた。

「内容は一週間ある少女を保護して欲しいと言うものだ」

ジーンはチラリと報酬金額の欄を見て、思わず目を見張った。

「な、ななな七百万ガルドだと！」

一瞬、めまいを覚えた。

たった一週間少女を保護するだけで、命が助かるというのか！

「ああ、仕事の内容は確かにこれだけだ」

マルロが体を前に乗り出し、その太い腕を組む。

「だが、あまりにも楽すぎて逆に怪しい。俺も一応この事件を仕入れるだけ仕入れちまったが、正直やば過ぎるから適当に期限までこの中に隠しておこうと思っただんだがね」

「なるほどね」

確かに、しっかりと仔細を見れば見るほどにきな臭いのは分かってくる。

依頼主は不明（身分を明かせないため）

少女の詳細、不明（これも身分を明かせないため）

目標となるものの正体を明かせない理由、まあ理解できる。機密をどうしても守りたい時には稀に有りうることだ。

だが、依頼主の詳細が不明というのは、まずありえない。

依頼を請け負う側が明らかに信用出来なくなるため、依頼主は必ず自らの正体を明かすということは暗黙のルールだ。

そして依頼文にはシンプルに「こちらが預ける少女を一週間預かって欲しい」とだけ書いてある。

何かとんでもない組織に狙われているだとか、その少女自身が人質だとか、そんなバックストーリーを容易く想像できた。

「受けるぜ。その仕事」

「なんと！」

マルロは目を丸くした。だが、ジーンはあきれた調子で依頼書を指差した。

「ここ見る、ここ見る」

「ん？ ああ、前払いとして報酬の半額を支払う」

「そつだそつだ」

ジーンは得意げに鼻をならす。

「まさかお前、最初からやる気なんてさらさら無いな。持ち逃げが狙いか？」

「まあ待て。それはやばくなつてからの話さ。いざとなつたらガキぶつ殺すなり、追つてきてる連中に差し出せば良い。どうせ一週間の猶予はある。その間に残りを稼ぎ出せば何とかなるだろう」

「確かにお前を追つてきてる連中の金への執着を考えれば、ある意味では賢明かもしれないな」

ふむ、と丸い顎に手を当てて考え込むマルロ。

「けどその甘い見積もりはあぶねえと思うんだがな」

「どつちにしろ、俺の命は風前の灯火も同然だ。チャンスが目の前に転がつてるつてんなら、掴み取る。んで、意地でも生き残る。そつやつて生きてきたんだ、俺は」

「そついや、そつだつたな。何年か前にこの町にやつてきたときからお前はそつとそつだつた。いつも危ない橋ばつか渡つてな」

すつと、マルロの穏やかだつた視線がカミソリのごとき鋭さを持つ。

「お前、死にたいのか？」

「まさか」

ジーンはその問いを鼻で笑う。

「俺はその日暮しを適当に愉しんでるだけの、魔術師くずれさ。まあ、実際魔術師じゃないんだけどな。ゼクスや他のフロンティアにいる連中つてのはどいつも俺と大して変わりはないと思つたがな」

ポケットからタバコを取り出して言う。

「どいつもこいつも死に損ない。そつだろ、マルロ」

タバコに火をつけて、煙を吐き出す。ジーンは自分の同類を見るようにマルロを見た。

「違くない」

死に損ない。

その言葉の中に自分も含まれていることをマルロは苦笑することしか出来なかった。

「それじゃあ、早速依頼者に連絡を入れておく」

「おーけー世話になるぜマルロ。また来るぜ」

ジーンはマルロに背を向けて、つかつか出口に向かっていく。心なしか、来た時より足取りは軽い。

「またのご来店お待ちしております」

やる気の無い口調でマルロが言うと、ジーンは背中越しに手をあげ事件屋を後にした。

一言で言えば、そこは最低の酒場だった。

喫煙者が多すぎるせいで常に煙が充満している店内。薄汚れ、所々ぶつ壊れてる壁。妙に油っぽい床。

馬鹿笑い、ハイになり過ぎた連中の言い争い。殴り合いの喧嘩、時々乱闘。

店主は、いつものこととグラスを淡々と磨いている。たった一人いるウエイトレスはそんな客の合間を駆け回る。

客の少ない昼ならいざ知らず、夜のいつもの光景。

その日暮らしを生業にする連中が一日を締めくくるためにやってくる場所。

「ハルドはマルロのところに入ってたやばい仕事知ってる？」

「誰も受けないって分かったから、マルロも丸投げした仕事だろ」

ハルドは、そうぶっきらぼうに答えるとスコッチを煽った。

「それがね、受けたバカが居たんだった」

「ほっ」

隣でラム酒を呑んでいるリナの言ったことにハルドは低く声を鳴らす。

「そいつは、天国への片道切符を手に入れたも同然だな」

「違くないわね。この町の勝手を知らない連中かしら？　ねえ最近来た連中って誰かいた？」

「知らんよ」

ハルドはさも興味なさ気に答える。リナはこの男に何かを聞こうとしたことを後悔した。

鍛えられた大きな体、刈り上げられた黒い髪、表情は固く、巖のようだと形容できる容姿。

リナの経験上ハルドに質問して回答を得られた回数など指で数えられる程度だった。

「よっ」

「あらジーンじゃない」

後ろを振り返ると、ジーンがドルイドと鋼で作られた短槍を持って立っていた。

ハルドは軽く目を合わせてグラスを掲げて挨拶の代わりにする。

「ハルドも一緒とは珍しいな」

ジーンはリナの隣に座ると、店主にマティーニを注文した。

「仕事の帰り？」

「今日は簡単な警備の仕事。適当に片付けてきた」

「妙に上機嫌だけど何かあったの」

「まあな」

ジーンは愉快そうに薄ら笑いを浮かべると、出てきたマティーニを早速飲んだ。

「借金を返すアテが出来たのさ」

「ふうん。あらそう」

リナは興味無さそうに答えると、タバコに日火をつける。

大方借金を一時的に肩代わりしてくれるやつがいたんだろうとリナは何となく想像した。

もつともリナはそんな気前の良い奴を知らないが、別段興味がなかったので適当に結論付けた。

ハルドは最初から興味がなかったようにスコッチを煽る。

「ところで、お前ら何の話してたの」

「ん？ ああ、マル口のところに入っていたヤバそうな仕事の話」
「それをどっかのバカが受けたって話」

「なあ、その話って一週間ガキを保護するだけでバカみたいな金も
らえるやつか？」

「そうなのか？」

「分らなかったハルドはリナに質問を振る。」

「そうよ」

「あ、その仕事受けたの俺」

沈黙。

二人は一瞬何かの聞き間違いかと、目を見合わせたがどうも違うらしい。

「バカナ」

「灯台下暗しってこついうことなのかしら」

「そんなに驚くことなのか？」

「驚くわよ。一瞬頭痛を覚えたわ」

「俺はめまいがした」

それぞれ、頭を押さえ、目頭を押さえつつなだれている。

「まあ、聞けよ。俺にプランは有るし、どっちにしる借金返さなき
や俺は地面の底だ。生きるチャンスって奴は掴み取るもんだろ」

「理解に苦しむ。リナから先ほど聞いたが、まずリスクコントロ
ール出来ていない時点でお前はもう死んでいる」

ハルドは盛大にため息をつくど、追加の酒を頼んだ。

「アンタだってバカじゃないでしょ？ ああいう出どこ不明の依頼
を受けて生きて終わらせた奴はいないって事ぐらい。せいぜいが依
頼者の人間の盾ね。命との引き換えで考えるなら安すぎる価格よ」

リナはタバコをもみ消すと、新しいタバコに火をつける。

「受けちまったモンはもうしょうがねえ。それに、仕事は明日から
だ」

「バカさ加減もそこまで行くと尊敬にあたいするかもね」

「惚れたかい？」

「はっ、誰が。マスター私にもスコッチ頂戴」

「はいよ」

無愛想な返事の後、バーでスコッチの用意をする店主。

「最初に言っておくけど、どんなことになっても一切手伝わないからね」

「俺もだ」

「ああ、それぐらい分かっているさ」

予想していたためジーンは全く驚かなかった。

ジーンと、ハルドとリナ。この三人の付き合いはこの町の中では長いほうだ。

たまたまお互いが敵になる機会が少なく、組むことが多かった。

馬が合うのか、腐れ縁なのか、何故だか一緒に行動する回数が多い。

だが、そうは言っても明日には敵になるかも知れない相手を信頼している訳では無い。

それが、ある意味で三人にとって心地よい距離感だった。

ジーンはマティーニを一気に飲み干し、タバコに火をつける。

「第一目標は、借金の返済。運が良ければ余計に金が入るもよし。まあ、やばくなったらさっさと逃げるさ。どうせ依頼の半分の報酬は明日手に入るんだ」

リナとハルドは、目を見合わせると曖昧に笑った。それは呆れたというよりかは、またいつものジーンの癖なんだと。そう笑った。

出会いⅡ災いのもと

うなるような風はずっと吹きっぱなしで、風が常に纏ったローブを体に密着させる。

日差しは町の中と変わることは無いが、飛んでくる砂の量がひどく、細かい石が衣服の上からひょうのように打ち付ける。

朝一番にマル口の事件屋に行き、依頼者から指定のあった待ち合わせ場所を聞き出す。

フロンティアゼクスの門を抜け、歩くこと二時間。目的地に到着した。目的地は荒野の街道の一点。看板が一つ、一〇km先フロンティアゼクスの文字が彫られていた。下には誰かさんのお茶目心か「天国に一番近い場所」とか書いてある。

「つか、来るのかな」

一人ごち呟くとジーンはその場に座り込んだ。

時計に目をやると、時刻は待ち合わせ時間五分前。それにもかかわらず、依頼者の姿はおるか気配すら感じ取れない。

いつもの癖で、タバコを取り出すとそのまま火をつけ紫煙をくゆらす。照りつける太陽と、叩きつける砂を覚悟しないためにタバコの先端に注意を向けて、短くなつていく様子をひたすら眺めていく。やがて口元近くまで火が迫ってきたので、口から外して火を消す。突然、背後で地響きを感じて振り返って立ち上がると、地面から黒い門が出現した。

「めずらしいな」

空間転移系の魔術だということは門の形状からジーンにはすぐに分かった。

仮面の外側にアクセスする魔術には二種類ある。

一つは魔術師と類する人種ならば誰でも使うことができる共通言語。

基礎的な大気中の元素式の改変や、肉体強化形のバベルズ・アト

ラス等がこれに該当し、努力すれば誰でも発現することが出来る。

もう一つは、その魔術師のみが使うことが出来る個人言語。

これは共通言語のさらに深部に、魔術師個人のペルソナリテを鍵にしてアクセスできる世界の事。

空間転移は、個人言語一つの形態なのであるが。この能力を有している魔術師は知られている限りでは二人か、三人程度しか存在しないとすることは、学院時代に何度か聞いた話だった。

門が開く。そこから三人の黒装束の連中、そして後ろから白装束の九人が現れた。

黒装束の三人はフードを被っておらず、残りの白装束は全員がフードを被っていて顔が見えないようになっていた。

一人は、同じぐらいの年の男。頭の後ろで結わえた黒い髪、黒い瞳、無精ひげ、ローブの下に大小二本の見たことも無い剣を差している、ローブの下に着ているゆったりした感じの衣装も見ることが無い。自分の知らない国の剣士なのだろうと推測した。

動作はゆったりとしているのだが、一切隙が無く、研ぎ澄まされたカミソリのような鋭さを持っていて、ある意味で道具的な雰囲気があった。

もう一人は、若い女。透き通るような銀髪に、異様に整った無表情は人形を連想させる。

年は少女とするには年をとりすぎているが、女とするにはもう少し若かった。装備品は千年物のオークを使ったワンド、一級品の魔術礼装が数点、空間転移魔術を使ったのは恐らくこいつだろう。

そして最後の一人は一三か一四ぐらいの少女だった。

後ろで切りそろえた長い金髪に、くりっとしたとび色の瞳、ゼクスにやってきてからは滅多にお目にかかれない無垢な雰囲気をもっていた。

「さあて、じゃあ時間もあまり無いんでサクサク進めちゃいましょうかね」

異国の剣士風の男が人懐っこい笑顔を浮かべながら言った。

「自己紹介を簡単におきましよう。あたしは高杉小次郎と申します。もともと東の群島諸国のしがねえ一剣士だったんですが、今は故あってこちらのアゲハの護衛を務めておりますー」

「ジーン、魔術師だ。といっても魔術師くずれだがな」

小次郎が、軽く手を差し出したので仕方なく握手を行う。一瞬だけぎゅっと握られ、握り返す。

「相当鍛えこんでますね。魔術師くずれでもこれなら安心してアゲハを預けられるというものです」

「……握手一つでこっちの実力を読むとわな何考えてやがる」

手を払って小次郎の手を払いのける。飄々としているが、やはり目の前の男は只者ではないと認識する。

「いえいえ、これはあたしの癖みたいなものですからおきなさらずに。では仕事の話に戻りましょう」

パン、パンと手を叩くと小次郎の目の前に箱が1つ出現した。

土煙を上げながら地面に落ちると、箱が開く。その中には1万ガルド札の束があった。

「一束あたり百万ガルドで構成されています。手付金としてまずは三五〇万ガルドお受け取りください」

「分かった」

ジーンは箱を取り、その中から札束を取り出すとバラバラとめくる。そして、二、三枚ランダムに抜き出すと慣れた調子で鑑定を行い、箱を閉じると自分の荷物に突っ込んだ。

「三五〇万ガルド確かに受け取った」

「任務をもう一度確認しておきましようかね。あなたに与えられた仕事は、こちらの少女アゲハを一週間あらゆる手から守り抜くこと。そして一週間後のこの時刻にあたし達がアゲハを回収に参りますので、その際に残りの金額をお支払いしましょう」

「分かっている」

「アゲハ、こちらの御仁にご挨拶なさい」

「はい」

小次郎の後ろにいた金髪の少女、アゲ八がおずおずとジーンの前に出てくるとしつかりとジーンの目を見た。

「はじめまして、アゲ八です。これからお世話になります」

アゲ八は頭を下げると、視線をジーンに戻す。その瞳にはこれから起こることに対しての恐れは無く、むしろ意思の強さを感じた。

「ああ、よろしく」

適当な調子でジーンが答えると、アゲ八から視線をそらした。

「あと、これは彼女の生活用品一式です」

小次郎は、ジーンに布包に包まれた小さめの荷物を手渡す。

「それではあたし達は行きます。どうしても手をつけなければならぬ問題は山積してしまっていますね。アンネ、後を頼みます。指定どおりのポイントに座標を変更よろしく」

飄々とした様子で、小次郎は指示を出す。

「はい」

銀髪の魔術師が目を閉じ、呪文を詠唱していく。そして詠唱が終わったのか魔術師はツ目をゆっくりと開く。

「準備終わりました」

「よし。では戻ります」

「分かった」

相手が去るにあたり、全くあちらの事情を明かさなかったこと、アゲ八のことをこの期に及んでも一切聞けなかったが全く気にしていなかった。

結局のところ、自分が生き残ればそれでいい。そのための手段に過ぎず、死なない時は死なない。そんな自負があった。

「小次郎さん！」

「なんだい？ アゲ八」

小次郎は、人懐っこい笑顔をアゲ八に向ける。

「大丈夫……ですよね？」

「アゲ八。君はきつと大丈夫だよ。あたしが言ったようにすりゃあ、君は一週間無事に過ごせるはず」

アゲハはかぶりを振った。

「いいえ。私のことなんかじゃなくて小次郎さんたちのことです」
「大丈夫ですよ。それこそ、アゲハの思い悩みです。必ず迎えにや
つてきますよ。だから、アゲハはアゲハの仕事をなさい。それがあ
たし達を守るということにつながるというものです」

「わかりました」

「よろしい！ それじゃあ、行きます。ジーンさん後を頼みました
よ」

「ああ」

ジーンがぶつきらぼつに答えると、小次郎達一行は門の向こうへ
と消え、門が閉じると再び地面の底に沈んだ。

「それじゃあ、俺たちも行こうか」

「はい」

ジーンがゼクスに向かつて歩き始めると、後ろから数歩送れてア
ゲハが付いて来た。

アゲハを受け取った時から、既に二、三時間が経過していた。

荒野を歩く中でジーンとアゲハ。二人に一切の会話は存在せず、
ジーンの数歩後ろをアゲハは歩いていく。ジーンは自分のペースで
すたすた歩いていくのに対して、アゲハは自分のペースを上げてな
んとか追従してくる。

お嬢様育ちのようだったが、存外、アゲハには体力があるようだ
った。

「さて、ゼクスに入る前にお前にいくつか言っておくことがある」
「なんですか？」

丁度フロンティアゼクスの門が見えて来た辺りで、ジーンが振り
返って言った。

「お前の今の格好はちよいと目立ちすぎる。町に入る前に、お前の
ローブと俺のローブを交換してくれ。俺のボロを身につけてりゃち

ったあ目立たなくなるだろうよ」

アゲハの今の格好は明らかにゼクス等という辺境の地には有り得ない服装だった。

黒いローブは生地からして偉く上等なもので、他にも細かい凝った刺繍やら、装飾が施してある。

もし、アゲハが仮にこの姿で一人、ゼクスを歩こうものなら、数秒で追いはぎにあうだろうものだった。

「わかりました」

アゲハは、特に嫌がる表情も見せずに自分のローブを脱ぐとジーンに手渡した。ジーンも自らのローブを脱いでアゲハに手渡し、交換する。

ジーンは受け取ったローブを適当に畳むと、布包みにしまおうと開いてみたが、入るようには思えず自分のカバンの中に詰め込む。

「いいか、前までしっかり閉めて下に着ているものが見えないようにするんだぞ。あとフードは被っておけ。お前の場合、その顔も目立つ」

「はい」

受け取ったローブを詰め込み終わると後ろを振り返る。その瞬間にジーンはため息をついた。

「合わないよな。そりゃ」

ジーンは男性の中でもそこそこ上背がある方である。そんな男のために仕立てられたローブが、まだ発達途中の少女に合うわけが無い。明らかにぶかぶかで裾を引きずっている。

だが、ジーンの予想通り先ほどよりは目立たなくなった。

「すみません」

「謝る事じゃないさ、別に。さっさといこつ」

「はい」

ジーンは視点をアゲハから道の先に戻すと、再び自分のペースで歩き始めた。

数分ほどで、見えてきた門がみるみる近づいてきて、ついに門の

前に到着した。

門の上の看板には「ようこそ」印字の文字の隣に、「クソ野郎の町へ」と手書きで書いてあった。

「ようこそ、俺たちの町へ」

ジーンは背中越しにアゲハに言った。

ジーンが門をくぐると、アゲハがその後に続いた。

町の中に入ろうとも相変わらず土煙はひどい。

ぶかぶかのローブを羽織ったアゲハはそれなりに注目を浴びた。

だが、この町の住人はあまり他人に関心を持たない人間が多かったためかジーンが予測するほど問題にならなかった。

だが一刻も早く隠しておくことに変わりは無い。どうせ大して効果は無いだろうが、幾分マシなはずだ。

なるべく早く、怪しまれない程度の速度で歩いていく。その後をアゲハが放されまいと、とことこ歩いてくる。

「着いたぞ」

「ここ？」

「ああ、そうだ」

たどり着いたのは町の中心地から少しばかり離れた小屋だった。

「本当にここ？」

「ああ、本当にここだ？」

「住めるの？」

ローブ越し、とび色の澄んだ瞳がジーンの瞳を真っ直ぐ見据える。

「案外、住めば何とかなるもんさ。俺も最初はそう思っていたが、住めば都って奴だ」

ジーンが鍵を開けてアゲハと共に小屋の中へ入る。

ジーンの小屋には一つの部屋とキッチンがあった。家具の数は異様に少なく、小さなベッドと食器棚、冷蔵庫と、空調機のみ、あとは壁にいくつかかけられた数本のドルイドの杖。そして、それに装

着するための数種類の穂先と石突きがあった。

「本当に住んでいるんですね」

どうもアゲハは心底感心したらしく、嘆息をもらして部屋中をきよるきよる見回している。

「そりゃあ、まあな」

学院を出るまで鉄と石で出来た建物にしか住んだことの無いジーンにとつても木造建築は確かに信じがたい技術だったが、住めば意外と普通に暮らしていけるものだ。

「すごいですね！」

先ほどのやや緊張した面持ちとは打って変わって目をキラキラ輝かせてながら、部屋の中を物色する。すると、壁にかけてあるドルイドの杖の前で立ち止まった。

「これは、今ジーンさんが持っているものと同じですね」

「ああ、そいつらはスピアだ」

「へえ。珍しいですね。ジーンさんの槍は本来魔術礼装用なのに、こっちの金属部品の二つはただの鉄だ。それに、これは常にレジストの術式がかかっている。これじゃあ、術式をくみ上げる前にレジストされて……」

「黙れ！」

急に頭に血が上って思わず叫んだ。

「ごめんなさい」

「いや、良い。高杉には言って無いが、俺は残念ながら魔法が使えない」

「そうなんですか？」

アゲハの声に、失望や、絶望といった感情は含まれていなかった。それが逆にジーンの頭に血を上らせていく。だが、それでも冷静に対処しようと、拳を握る程度に留めた。

「それでは、どうやって戦っているのですか？ あなたは能力者なのですか？」

能力者とは、四百年前に現われた突然変異によって現われた新し

い人種だ。現在のこの世界において、人は能力者か魔術師、そのどちらかの人種に必ず分類される。

澄んだ瞳をまっすぐジーンに向ける。ジーンは軽く視線をそらした。

「外れだ。俺は能力者でもない。ただ単に、自分の腕一本とこの槍でやってきたそれだけだ」

ちらりとアゲ八を見るが、相変わらず澄んだ目でこつちを真っ直ぐ見据えている。

「悪い。外に出るから外套を返してくれ」

「はい」

アゲ八は羽織っていたジーンのローブをジーンに手渡す。

「お前の荷物はここにおいていく。あと俺が帰ってくるまで外には出るな。飯は冷蔵庫に適当な食いものがあるから、適当にあさって食え。便所はそのドアの向こう。水道の水は一応は綺麗。おーけー？」

ジーンは一気にまくし立てるように言うと、アゲ八はコクンと頷いた。

「じゃ、ちょっと出てく」

「いつてらっしやいませ」

穏やかな微笑を浮かべて、ジーンを送り出すアゲ八。ジーンはそれに反応せずとっと扉の外に出た。

小屋を出たとたんに、盛大なため息が漏れた。

直後、ざわざわと這い上がってくる感覚。頭が熱くなって、目ぼしいものを探す。

あった。

自宅横にあるステンレス製のゴミ箱（七〇?）。

ジーンはそこまで一瞬にして駆け寄るとおもっくそ蹴り飛ばした。中身はほとんど満タンに近かったが、軽やかに放物線を描き五m先ぐらいに墜落した。

ゴミ箱がひしゃげて、中身がはみ出しているが関係ない。単に八

つ当たりできるものがあれば良かったのだ。

「あー！ やってらんねええ！」

懐からタバコを取り出すと火をつけ、ニコチンを注入する。頭がぼんやりしてくることによって、熱くなりすぎた脳みそにラジエーターを機能させる。

どうも、あのガキと一緒にいると自分はイライラして仕方なくなるらしい。

目をあわせられると、どうしても合わせていたく無くなる。視線をそらしたくなる。

だが、曲がりなりにも、護衛対象だ。いざとなったら殺すつもりだが、みだりに傷つけたくは無い。報酬の減額につながりかねないからだ。

かといって数分でもまともに接することを続ければ、せん妄状態なんてあつという間に引き出せるような気がしてならない。

この仕事の困難性以前にアゲハと一緒に一週間暮らしていくというところが、ジーンの目下最大級の問題のように思えて仕方が無くなつた。

「なるように……なんのか？」

頭を乱暴にバリバリ引つかくとタバコを吐き捨て、タバコに砂をまぶして火を消す。

とりあえず外に出たのはただのアゲハから離れたいという口実だけではない。

そっちの用事を済ませねば。と、まず一番最初の目的地へと、槍一本だけでもって歩き出した。

胃痛の種

ジーンがまず最初に行ったのは女性物の服を専門的に扱っている店だった。

「この店主と何回か合ったことがあったため訪れたのがこの店を選んだ理由。」

「先ほどアゲハの生活用品一式が入った布包みの中に下着と着替えは、確かにあった。」

「下着はまず良しとして、着替えが明らかにゼクスで生活していくには暑苦しく、かつ無駄に高級な仕立物だった。」

「という訳でこの店の中をうろろろしているのだが、目に付くものが、まあひどい。娼婦の仕事着のようなものしかない。」

「おや、ジーンじゃないか。酒場以外で顔をあわせるとは珍しいな。初老の男が店の奥から出てくる。この店のオーナー、ジョアンだ。」「ちよいとな、仕事に必要な道具を一式そろえたいと思っていたのだが……」

「ジーンはあたりの娼婦が仕事時にしか用いないような過激な衣装を見回して、ため息をついた。」

「まあ、いいや。こんなん使えねーよ。もっと普通のがほしいんだ」「見くびってもらっては困る。一応この店には一通りの服の種類は揃っている。二階に案内しよう」

「ジョアンに続いて歩いていくと、店の奥に小さな階段があり、それをのぼって二階に行く。二階にあった服はさっきの毒々しさと打って変わって、普通の女性服が売っていた。」

「この店はな、娼婦のための女性服店だ。もちろん彼女らの仕事着を扱っているが、普段着もそろえてあるのだよ。それで仕事つてのは何かね」

「ふむ。まあこれくらいあるなら問題ないだろう。よし、話そう。俺は最近依頼でガキを預かることになってな。そいつに、この町に

いてもおかしくない服装を与えたい」

「なるほど、そういう訳か。その娘の年令と、体格を教えてくださいか？」

「年は十三から十四ぐらい、割と華奢で身長はこれぐらい」

「髪は長いか？」

「長い」

と、ジーンは胸の高さぐらいに手を置いてアゲハの大まかな身長を表す。

「ちよつとまってる」

ジョアンが店の中をうろつき、かけてある服を数点ハンガーごと取ってジーンの元へと持ってくる。

ジョアンが持ってきた代物は、シャツやジーンズ、地味目の短いスカートや、ワンピース。それに安物の編み上げのブーツと靴下、それに砂漠を歩くための外套。町で見かけるアゲハと同じ位の娘が着ているようなものと大体変わらないものだ。

「あとこれはワシからのプレゼントだ」

ジョアンが何かを放る。それをキャッチし、開くとそこには髪留めのゴムがいくつもあった。

「これは？」

「こんな地形だ。お前はしらんだろうが、長い髪つてのはとにかく邪魔になる。そういうわけで、長い髪の女が客の時は必ずコイツをプレゼントしているのだよ。まあ単純にポニーテールが見たいだけなんだがな」

そう言って笑うジョアン。もう六十近いと聞くこのじいさんだが、まだまだ現役でいる気だろうとジーンは確信した。

「しらねーよ。それで、全部でいくらだ？」

「全部で四万ガルド」

「高くないか？」

ジーンの見積もりではその半分の二万ガルドが良いところだ。

「口止め料込みだ」

「抜かりが無いな。払おう」

生活最低限で何とかやりくりしたいジーンにこの出費は確かに痛い。

だが、仮に自宅に誰かが入った際、あるいはアゲハを今のままの格好で見られた場合のリスクを考えると仕方無い出費だった。

前にもどこぞのぼっちゃんをはした金で預かることがあったが、その際の失敗も昔にあって避けられる失敗は出来る限り避けたかった。

別にアゲハに対して愛着があるわけでは無いし、できれば殺して手持ち金だけ受け取って逃げるのもありかとも思うが、敵が仮に来なかった場合。小次郎達は間違いなく自分の敵になるだろうと推測できる。

とりあえず成功させることは第一に考えなければいけないのだ。

「ありがとうございます」

ジョアンの確信犯的笑容。

「いてえ出費だ」

ジーンため息。

「髪が長いと聞いたが是非ともその娘に一度会ってみたいんだがね」
「知るかジジイ。いつそ去勢してしまえ」

購入した商品が入った紙袋を手にするるとジーンは再び町へと出た。次に向かう場所はマル口の事件屋。

すぐにたどり着き、仕事を探すと「捕り物」系のそこそこ高額な仕事の一つ。見つかり、それを受諾する。

ジーンは当初立てた作戦通りに動くことを決めた。

それは、単純にアゲハを家の中に押し込んでおいて、自分は自分で「もしものこと」があったときのために稼ぎまくる。手付金が手に入った今となつては、残りの金額を労働で返すことは容易い。

「それに……な……」

連想しかけたところで、それを打ち切った。

あまりにもバカバカしくて苦笑しか出てこない。

こんな些末なことで躓いている自分がバカに思えて仕方が無い。いいか。自分はやりきる。

借金を期限内までに全て返して、生き残る。どんな手段を使っても絶対に生き残る。

そのことだけ考えて自分は前を向いていれば良いだけなのだ。アゲハのことで思い煩う必要など一切存在しない。

……なのにな。

「うわあ。可愛いですね。これがこの町の女の子の格好なんですか」「そうだ」

ジーンは面倒くさそうに答えるとため息をついて本日二箱目のタバコに手をつけた。

格好的には明らかにみすばらしくなるのだ。荒野のこんなクソ暑い地域で、生産技術も個性も無いこの町の服なんてどれも貧乏臭いんだ。

最初にこの町で売っているものを見た時の絶望感。

その感覚をジーンは確かに覚えている。どれもこれも形だけを適当に取り繕ったまがい物。

それを着て嬉々としているこの娘は何なんだ。

見ているだけで胃がムカムカする。全く予想通りにならない。それがムカムカする。

付け加えてジーンの部屋の変わりよう。

ジーンの部屋は、もともと物がかなり少なく生活感の無い部屋でわりと綺麗だった。

だが、それはジーンがこの部屋でほとんど生活していないからであって、結構な量の埃が積もっていたりする。

綿埃もそうなのだが、土地柄か扉の隙間から入ってくる砂埃も結構たまっている。

けれども、今やそれがさっぱり綺麗に拭い去られていて、まるで

新しく命を与えられたもののように息づいていた。こんな状態にあるこの部屋など入居した時の綺麗さ以上のしろものだった。

致命的だったのは、部屋中に充満する妙に良いにおいだった。

「それで、そのテーブルの上に置かれたものは何だ？」

「料理……ですけど何か？」

どうしようもなく胃がムカムカしてしよつがなかった。

「小次郎さんに言われたんです。いっどこに行っても、世話をしてくれる人には尽くしなさい。きちんとお礼をしなさいって。だから私は最初にジーンさんが私を預かってくれたことに私はお礼がしたいのです」

相変わらず澄み切った目でジーンを見つめるアゲハ。相変わらずこの目が苦手なジーンは視線をそらしてため息をつくようにタバコの煙を吐く。

「さあ、そのタバコを消して食べましょう。あつたかいうちに食べないと美味しくないものですから」

「あ、ああ」

ジーンは部屋にあった灰皿にタバコを突っ込むと、アゲハと向かい合わせに座る。

料理はドリアと、スープ、それにサラダ。ジーンも自炊をすることは多く料理は作れるのだが、こんなものを作れると記憶していない。

「お前、本当に家の冷蔵庫の中身だけしか使っていないよな」

「何をいつているんですか。外に出ないようにと忠告したのはあなたのはずですよ？」

「そう、だよな」

ドリアを一口、口に含んで咀嚼し飲み込んでみる。

「ば、ばかな……」

腕か、腕の違いなのか。

口の中に広がる料理の味はどう考えても、昔訪れたことのある一級料理店のクオリティだ。もちろん出されている料理自体はチープ

なのだが、何か特殊な、自分も知りえない魔術を使ったとしか考えられなかった。

アゲハの顔に当初あったような戸惑いに似た感情は消えうせていた。

「というか最初から緊張などこの娘はしていたのだろうかという疑問さえ出てきた。」

「ジーンさん。まだ「いただきます」をしてないですよ?」

「そうだったな。っていうか「いただきます」って何だ」

「この食べ物を与えてくれたすべてのものに感謝することです」

「ああ、そういうことが」

ジーンは故郷に居た頃慣例として行っていた食事前の、ちょっとした宗教的儀式を思い出した。

信心なんてものはとうの昔に捨てたジーンには随分懐かしいことだと思った。

「はい、それじゃあいいただきます」

「いただきます」

手を合わせて、祈るように一瞬目を閉じるアゲハ。ジーンもそれと同じようにする。

アゲハは一礼だけすると、すぐに顔を上げ銀器を取った。

「どうも、自分の故郷のもの比べてこの儀式は恐ろしく簡単らしい。」

「食事は数十分で済み、食後の儀式とやらの「ごちそうさま」を終える。そこでジーンはまだ渡していなかったものがあったことを思い出した。」

「あと、これはそれを買った店主からの饞別だ」

受け取った髪留めのゴムをポケットから取り出すと、アゲハに手渡す。

「こんな場所じゃ、長い髪つてのは邪魔で仕方ない。という訳で、長い髪の女が客に来たときは必ずプレゼントするのが奴の慣例らしい」

「その人に、ありがとうございますって伝えていただけますか？確かにこの土地でこの髪型は暑苦しくて邪魔臭いです。では早速つけてみますね」

アゲハが口にゴムを挟んで、後ろの長い髪をまとめめる。口に挟んでいたゴムで髪を束ねる。そこでアゲハは鏡を見て、

「前髪がアンバランスですね」

とくしゃくしゃっと、前髪を適当に乱すと、完全にこの町によくいる形の女の子になった。

それでも、アゲハの長く美しい金髪のポニーテールや、白すぎる肌や、とび色の瞳は目立つ訳だが、全くと言って良いほど問題はなレベルに留まった。

「似合いますか？ ジーンさん」

くるりと一回転してみせるアゲハ。

「さあな」

本日二二本目のタバコに火をつける。

ああ、なんだ。全部の行動に好意で応えようとするアゲハが自分にはひどく気に入らないんだ。とようやく分かった。

憎悪には憎悪で、それが自分なりの流儀であり、だからこそアゲハをキモチワルイと思うのだ。

「お、俺の能力が効かないだと！」
「黙れえええ！」

ジーンは短剣を持った男の前に踊りかかると、石突きで打ち据える。

鈍い音を立てて後頭部に直撃し、短剣の男が地面に倒れ伏す。手に持った短剣が男の手から零れ落ちる。

ジーンは倒れ伏した男を踏みつけると、頭部に執拗なまでにスタンプングを繰り返した。

「こっちはなあ、割に合わない仕事で半端じゃなくいららしてる

んだよおお！ ああ、金は大量に手にはいったよ。借金を返せる目処がたったよ。でもなあ、なんなんだよあのがきゃあ！」

「ちよっ、やめ……………」

頭を踏みつけまくっていると、男が抵抗する動きがどんどん小さくなっていく。そこでジーンはスタンピングを止めた。

「なんだ、もう終りか。能力者の中でもエリートなんじゃねえかよ」

「す、すまない俺の勘違いだった。俺が悪かった」

懇願するようにジーンを見上げる男。

「けっ、くだらねえ。今から事件屋まで連行する。立てるか？」

「ああ」

男が立ち上がるうとする、その瞬間男の目つきが変わった。

「なーんてな！ 俺がこんな共通言語魔術も使えない魔術師に負けるわけがねーんだよ！」

男が、猫科の生物を連想させるすばやい動きで自分短剣を拾い上げると、短剣を二度、三度ショートワードと共に無造作に振り回した。

風きり音と共に、ジーンに見えない風の刃が襲い掛かる。

しかし、ジーンは適当に槍を動かしその刃すべてがジーンの槍に打ち消された。

「効かねえって言うてんだろっが」

「まだだ！」

男が懲りずにナイフで突きにかかる。

「遅ええ！」

ジーンは一瞬にして間合いを詰め、側面に回りこむと、わりと本気で石突を後頭部に打ち下ろした。

「手間かけさせんじゃねーよ」

今度こそ完全に意識を失っており、ジーンは男の手に手錠をはめると肩に担いで事件屋へと向かう。

事件屋には、その男に用があるであろう黒スーツの一団がいた。

「ご苦労様です。その男を渡していただけますか？」

「あいよ」

黒スーツの一団に能力者の男を引き渡すと、五十万ガルドをジーンは受けとり、ジーンがとっ捕まえた男は麻袋にパッキングされた。目を覚ました時が、あの能力者の最期なんだろうなと簡単に推測できる。アーメン。なんてな。

「ご協力感謝します」

依頼者の使いらしき、黒スーツの男が一人ジーンに頭を下げた。

「はいはい」

ジーンが適当に返事をする、黒スーツの一団は麻袋を担いで事件屋を出た。それを見届けると、ジーンはマルロに向き直り、

「寝たらまた来る」

「分かった」

そうマルロに告げると、事件屋を後にする。

扉を出てすぐにリナと遭遇した。

「あれ？ でかい仕事引き受けたんじゃないの？」

「そうなんだがな、それだとリスクが有りすぎるから、保険をかけるために他の仕事も受けているんだ」

「そう。まあ別にどうでも良いけどね。ところでそっちの案件の方はどう？」

「どうって？」

「子供を預かったんでしょ？」

「ある意味ヤベエよ」

ジーンの瞳はもはや闇しかたたえていなかった。

「こんなクソみたいな状況に陥ってもいつも笑顔でいる生粋のマゾヒストさ。この町のボロと自分が着ている場バ力高い衣裳を取り替えられても笑顔。似合いますかジーンさんだつて？ いやいやいやお前、そんなに自分の居たところを否定されるのが大好きなのかつて。俺がこの町に来たときに持ってた絶望的な気分。それを喜んでるんだよあいつはさあー！」

徹底的に、居場所が無いということはこの町に来てからは味わう

ことになる。

今となつては慣れきつて、自分に似合つてるとさえ感じるこの概念だが、来た当初は絶望的な気分させられるのだ。

ジーンの瞳は闇しかたたえていない中で、異様に興奮した口調でまくし立てる。

「家に来るか？ 家に来てあいつを見ていくか？ およそ想像を絶する変態だ」

「い、いいわ遠慮させてもらうわ」

リナ笑顔は明らかに引きつっている。

異様に興奮したジーンの説明に、リナは軽く引いた。

ジーンは舌打ちをした。

「何よ。腹が立つ舌打ちね」

「今から家に帰るんだよ。寝るためにな。もう家に帰るとあいつがいるって思うと頭が痛くなってくるぜ」

「ご愁傷様ね」

さして興味が無いようにリナが言う。

「本当、黙れ。役に立たない慰みは余計に腹が立つ」

ジーンはリナから視点を外すと、その横を通りすぎて家へと向かった。

「あ、お帰りなさいジーンさん」

何故だろうか、この瞬間。胃がきりきり痛むのだ。

ドアを開けて、家の中に入るとアゲ八が明るい声＋笑顔でジーンを迎えた。

今のアゲ八の格好は完全にこの町に適応したスタイルで、長いポニーテールも含めて随分と板についてきている。

もうこの生活を始めて、二日以上が経過していた。

ドアの前でこの状況は予想はしていたが実際に遭遇すると腹が痛くてしょうがない。

腹が痛くなるということは、この状態が自分にとってかなり無茶な状況であり、それが身体状態に表れているのだと解釈する。こいつの自分がやったことに好意で応える態度がとことん蝕むのだ。ついでに、どうも眠りも浅い。

別に彼女が凶悪な殺人犯や、変質凶な訳でもない。

ただ、そこに居るだけで自分の中の何か次々にダメになっていく。殺人犯やら変質凶の方が百倍ほどマシなのだ。あいつらは、憎悪には憎悪で応えてくれる。

ジーンは半ば無意識にタバコを取り出し火をつける。

「ちよつと眠りに帰ってきたのと、後は槍の交換だ」

部屋に入り、自分の槍の部品やらが立ってかけてあるところまで行くと、槍の部品を分解して壁のスタンドに乗つけていく。

持っていた槍の分解と、スタンドに立てかける作業を終える。

すると、ジーンはスタンドからもう一式槍のセットを取り出し、組み立てていく。

「何をしていたらっしゃるのですか？」

「槍の交換だよ。こいつは不便な代物でな。何回も魔法のレジストをすると消耗限界が来て折れちまう。一応未だに折った事は無いが週に一回程度は取り替えることにしてる」

ジーンがそう言うと、言うことが無くなったアゲ八との間に沈黙が起こる。

ジーンにとってそれはほっと一息つける感覚だった。

三分ほどで槍の組み立てを終わらせると、完成した槍の穂先に皮の鞘を取り付けその辺に立てかける。

「それじゃあ、俺は少しばかり眠るから起こすなよ」

「あの……」

「何だ？」

めんどつくさそうに、アゲ八に答えるジーン。

「朝ごはん、食べましたか？」

「いや、まだだけど」

「では、少し食べていったらいかがですか？ 昨日の夜からずっと出ずっぱりだったようですから」

テーブルの上を見ると、蓋がしてある皿が数点。恐らく彼女が作った朝飯なのだろう。

「そういうなら。食べるよ」

別段断る理由も無かったから、アゲ八に従う。実際問題腹は減っていて、何か腹に入れようかとも考えていた所だった。

「じゃあ、こっちに」

「へいへい」

アゲ八に促され、椅子に座ると、アゲ八が皿に乗った蓋を取り外した。

そこにあっただのは、豪華絢爛な朝食フルコース。栄養バランスと味が完全に調和された完璧な料理がそこには並んでいた。

とりあえず食べてみる。やはり美味い。それが気に食わない。けれども、出された以上はとりあえず食べる。食べる。食べる。

ものの数分で平らげると、アゲ八は皿をシンクに入れ食器を洗いかかる。

ジーンには少し疑問があった。食べている間は突っ込まないで置いたが、今は確かめるタイミング。

席から立ち上がり、冷蔵庫まで行くとおもむろに開く。疑問が的中したため息が出た。

「なあ、お前。どうしてあの朝飯が作れたんだ？ どう考えてもおかしいだろ」

「ええと、それは……」

にらみつけると、アゲ八は明らかに狼狽した。

「答える！」

「買いに行っただんです」

ジーンの疑問の発端は、アゲ八の料理に普段ジーンが自炊の際に使わない食材がいくつか入っていたためだった。

大体自分で料理を作る場合、毎日バリエーションに富んだ料理を

作る訳ではなく、ある程度パターンが決まっっていてそのパターンに合った食材を買うのが常だ。

だが、この朝飯にはそのパターンを破るところか、ジーンが一回だっけ買った記憶の無い食材もいくつかあった。

「お前が今どいう状況に置かれてるのかお前はキチンと理解してるのかよ！ ああ？」

「わかってます。わかってます。だけど……」

アゲハは、身を小さくして、怯えたようにジーンを見上げる。

「だけど、それじゃあジーンさんに何もして上げられないし。それに……お金は、小次郎さんに来る前にもらったものですから、迷惑はかけていないでしょう？」

上目遣い、懇願するようにアゲハが見つめる。それから、視線を自分の服飾に移し、こう言った。

「それに、この格好なら私の身分だっけそうバレないと思うし……」
その言葉を聞いた瞬間、ブチンと、血管が切れる音をジーンは確かに聞いた気がした。

「ふざけんじゃねえよ！ お前。お前の首には残り三五〇万の金がかかってんだよ。俺はな、お前に逃げられたり、勝手に殺されたりしたらひでえ不都合を被るんだ。分かるか？ 分かってんのか？ このクソガキ。こっちはなどうしても金が要るからてめえを預かってんだよ。守ってんだよ。それなのになんだ？ 勝手に家の外に出て買い物に出る。挙句その態度はなんだ？ ふざけた顔で笑いやがって。テメエは大人しく、何もしゃベンねーでここでじっとしてりやあ良いんだよ！」

一気にまくし立てるジーン。その剣幕に押されたのか、アゲハはうつむいたまま顔を上げようとしない。ひよっとして泣いているのか？ 考えすぎか。

ジーンは腹にたまった全て吐き出すつもりで一気に言ったがまだ足りない。

いっそのことここで殺してしまおうかと思ったが、それを踏みと

どまるだけの冷静さはなんとか持ち合わせていた。

あくまで勝手な嫌悪だと言うことは理解している。

だが、そんな感情一つで殺すこと程、計画性に欠いた損する殺人などは犯したくは無いのだ。バカすぎて。

タバコをもう一本取り出すと、頭を落ち着けるために吸う。

程よくニコチンが脳みそを麻痺させた辺りでタバコの火を消し、眠ろうとベッドに横たわる。

だが、どうにも眠れるような気配がしないため、数秒で起き上がり、荷物がいくらか入ってるローブとお手製カスタムの槍を手に取ると玄関をあけた。

「いいか、ぜってー外に出るんじゃないぞ。飯は自分の分だけ勝手に作って食え。食材は無くなったら俺が買う。けどな、俺の分の飯は二度と作るんじゃないぞ。わかったな？」

「……はい」

アゲハがうつむいたままそう答えると、ジーンは乱暴に扉を閉めて自室を後にした。

かけた破片を集めるように

「もどつたぜ」

「つていうか、戻るの早いな。オイ。お前寝てないだろう」

「当たり前だ。あんな部屋で休めるはずが無い」

アゲハと別れてすぐに、ジーンは再びマルロの事件屋を訪れた。

ジーンの色は明らかに不健康そのもので血色は薄く、目は明らかに血走っており、数日間まともに眠っていないのは明らかだ。

しかし、ジーンにとっては不健康よりか、現在の不機嫌の極みの方が深刻だ。

「家に帰ってもう一度よく休め。そんな状態でまともに仕事ができるのか？」

「とにかく仕事をよこせ。お前の仕事は俺の健康管理じゃねーだろう」

「ワーカーホリックにも程があるぞ。残り三五〇万ガルドを返済するにしても、今のペースは急ぎすぎている」

「黙れって」

ジーンは面倒くさそうに手を振る。

「とにかく家の外にいたいんだ」

マルロはそれを聞くと、苦笑し、ため息をついた。

「人それも、ワーカーホリックと言う。まさかこんな辺境の地でこの症状に出会うとはな……」

「いいからとつと仕事紹介しろって。短時間で結構稼げるやつ」

「おーけー。お前がそういう時は譲らないことぐらいは分かっているさ」

マルロが机の引き出しを開けると、適当な依頼書をいくつか机の上並べた。

基本的に事件屋内に掲示してある仕事は、難易度が低く、その日暮しをやっていくに問題ない程度の普通の仕事。

だが、ジーンが要求しているような、短時間で高額な金額を得ることが出来るような仕事になると直接マルロに言うほか無い。

マルロ自身にも面子があり、受諾した依頼を失敗したとなれば、ゼクスにおけるマルロの信頼にも関わってくる。

事件屋とは、大きな会社である。

そして、マルロはその支部の一つを任されているに過ぎない雇われ店主であり、サラリーマンなのだ。

だから、あまりにも失態を重ねれば異動させられたりする。

最悪の場合、会社に殺されるなんて事態もあつたりするのだ。

けれども、目の前の男ジーンは態度の悪さは有るにしても任務の成功率の高さからかなり信頼の置ける存在であるため、マルロは多少の無茶も聞けるのだ。

「一応、一番高額なのはこれだ」

と、マルロが五つ並べた依頼書のうち真ん中のものを指先で軽く叩く。

依頼内容は、麻薬の受け渡しの襲撃。

昼頃に行われる企業間の麻薬の受け渡し現場を襲撃。しかる後目標物を奪取し、依頼者に直接渡す。報酬金額は七〇万ガルド。

「おーけーそれを受けよう」

明らかに危険を伴うものだったがジーンにとって危険度はそれほど気にならなかった。

「資料はこの中に一式まとめてある。襲撃地点、受け渡し場所、受け渡す人物の顔、もろもろ入っているから後で確認しておけよ」

「了解」

マルロがジーンに封筒を手渡す。中を確認すると、確かに資料らしきものが数点入っていた。

「お前は生きたいのか、死にたいのか、未だに分からんな」

「この任務以上に、あのガキと接している方がキツイのは事実だ。いわゆる死んだほうがマシって奴だ」

「ははっ、そいつは滑稽だ」

ジーンの余裕の無い顔をマルロは笑う。

「黙れって、本当」

憎悪たっぷりにジーンは言う。

アゲハのことを思い返すだけで、頭痛がするジーンには、笑うマルロの顔でさえ憎たらしくて仕方なかった。

「もう嫌だ。あのガキぶつ殺してえ」

空になったビールのジョッキを叩きつけ、ジーンは本日何度とも繰り返したセリフをリピートする。

「リナ。これは一体何が起こっているって言うのだ」

ハルドは、ジーンの尋常じゃない様子を見て、リナに説明を求めた。

「どうもこうも無いわよ、さっきからずっとこんな調子」

「酒を、もつとおれに酒をよこすんだ！」

やれやれと、リナはため息をつくとうエイトレスを呼びつけ、新しい酒の注文をする。

もはや水際をあやまり、いつリバーズしても可笑しくないような症状を発症しつつある。

リナが夜、情報収集も兼ねて酒場に足を運んだときにジーンは既にこうなっていた。

ジーンに説明を求めようにも、「あのガキぶつ殺してえ」しか繰り返しはしない。

つまり、なんとというか非常に面倒くさい状態になっていたのだ。

それにしても奇妙だとリナは思う。

ジーンは、大概においてヘタレだと思うのだが、このフロンティア・ゼクスにおける仕事人としてのジーンは優秀だとリナは認識している。

魔術師でありながら魔術が使えないと言った欠点はあるものの、徹底的に鍛え上げた肉体と、かなりの練度を誇る体術。

それに加えてジーンにしか使えない魔術と能力をレジストする槍を使いこなし、強者が多いとされるゼクスでも一目置かれている強さを誇る。

荒事に対しての対処能力はトップクラスで、昨日も難度の高い危険な仕事をあつさり片付けている。

加えて、この何年かでいくつもの修羅場もくぐっていて腹も据わっているはず。

それなのにだ。

ジーンが今恐れているのは、依頼で預かった子供の背後に関わる組織以上にその子供そのもののではないだろうか。

そこまで考えると、その子供に対しての興味がふつと沸いて出たような気がした。

もちろん、ジーンのコメントから畏怖すべき対象として捕らえるべきなのだろうが、いわゆる怖いもの見たさと言っのだろうか。

まあどうせ他人事だし、やばくなったらジーンに全部おつかぶせて逃げれば良いなんて計算もあるんだが、リナはその子供がどんな子供なのか気になっていた。

(可愛い男の子なら、なお良し)

リナは、危うく垂れかかっていたよだれを拭う。

「ほら、それ飲んだらさっさと家に帰るわよ。送っていくから」

さりげなく、目標を果たさそうとするリナ。

「嫌だ。今日もどつか適当なところで寝るよ」

「良いから、私が送っていつてあげるから」

「頼むよ、家に帰りたくないんだ」

リナがジーンの手を取ると駄々っ子のように、手を振り払いリナを見つめるジーン。

この一連の動作を行ったのが仮に、もっと可愛らしくて、もっと守ってあげたい感じがするならば良い。

だが、目の前のこの男が言うつとひどく腹が立つのは何故だろう。

「……リナ。ここでほとんど本気を出すのはマズイ」

「おっと、失礼したわね」

無意識に握った拳に、無意識に掴んだ胸ぐら、そして無意識に拳に術式を完成させていたことに気が付いて慌てて解除した。

リナはジーンを放すと、ジーンはテーブルの上に落ち、「うーん」とかうなっている。

「どうするよ？」

「どうするって、私に聞かないでよ」

リナにそういわれると、ハルドはこめかみを押さえればらく静止した後こう言う。

「……飲み直すか」

「そうね、それが妥当ね」

リナはうんざりしたように答えると、メンソールのタバコを一本取り出し、それに火を付ける。ハルドがようやく席に座り、バーボンを注文する。

そういうわけで、なんやかんや飲みなおすことになった。

というか、思い返すに二人ともこの酒場についてから一杯も酒を口にしていなかった。飲みなおしも何も、まだ始まってすらいない。

ジーンが適当に気を失い、ハルドとの情報交換を始める。

飛び交う情報はいつもの様に、町の勢力図やら外部勢力の介入やら火の車になりつつある人の情報。

組織に依存せず、単独行動を基本としている二人だけに、しばしばこうした情報交換は必要になってくる。この酒場の半分ぐらいの目的はそうして使われることにある。

もっとも今のジーンのように現実逃避のためにやってくる客もいるのだが、フリーの仕事人はこの酒場も仕事場の一つだったりするのだ。ジーンも普段はそう使っている。

「うーん。俺はどれぐらい眠っていた？」

ゆったりとした動作でジーンがようやく起き上がる。

「大体、二時間と言ったところか」

「そうかい」

ジーンはそう答えると、眠たそうに血走った目をこすり、一際盛大なあくびをすると懐からタバコを取り出し火をつけた。

「酔いは醒めたの？」

「まあな。けど、家に帰ることが億劫なのは変わりやしねえ」

苦笑すると、煙を吐いた。ジーンは杯を手に、随分前に注文したカクテルを飲もうとする和不意に硬直したように動作が止まった。

「どうしたの？」

と、リナとハルドは、ジーンが向いている方向を見ると、そこは入り口で一人の少女が立っていた。

なんというか、リナの的に同性ながらよだれを禁じえない娘だった。年の頃は十三から十四ぐらいで、背はその年令程度ならば普通なのだが、華奢で繊細な印象。ポニーテールにした綺麗な長い金髪に、大きなとび色の瞳。

鼻も口もすべてが調和されており、ある意味で人形のようなのだが、人形独特の無機質さは無く、代わりに無垢な赤ん坊のような愛らしさがあつた。

今はその少女は、この町特製のボロを纏ってるわけだが、それでも光るものはありその美しさはこの町では、というかどこの町でも異質な存在だと思う。

「思わず家に持ち帰りたくなるわね、これは」

「リナ、お前は自重という言葉覚えてるべきだ」

リナの独り言に、ハルドが無表情のまま答える。

金髪の少女は、辺りをきよるきよる見渡しこちらを見るとまっすぐとこつちの方へと歩いてくる。

「ちよつ、ちよつと、こつちに来るわよ」

「落ち着け。お前落ち着けよ」

リナの無駄に興奮したテンションに、ハルドはややいらだたしげに答える。

少女は、まっすぐこっちのテーブルの前までやってくる。

「ジーンさん……」

ジーンを見据え、少女ははっきりと言った。

その瞬間、リナは頭をハンマーでぶん殴られたかのような衝撃を受けた。要するに、ジーンがあれほどまでに恐れていた子供が、こんな少女だったということなのだ。

「ジーン……ひょっとして、この娘が例の件の」

リナが恐る恐る上ずった声でジーンを横目に見ながら言う。

「そうだ」

にべも無く答えるジーン。

すると、ジーンは持ち上げていたグラスをテーブルの上に置き、ポケットからタバコを取り出し口にくわえた。

「ところでアゲハ。何でお前がここにいるんだ」

「ジーンさんが昨日の昼に出てったきりずっと帰ってこなくて、心配で……」

「それはお前の飯の心配なのか？ 食材は充分あったし、なんなら一週間生活していくことだって不可能じゃないと思うんだがな」

ジーンがそう言うと、アゲハは黙り込み、ジーンもそのまま黙った。

アゲハを前にして、ジーンは静かに怒っている。その声には、さっきまでの抑揚が無くなり低く沈んだ声でゆっくりと喋る。アゲハがジーンを見るのに対してジーンも真っ直ぐ見返す。

この町において誰かに敵意を向ける時の態度そのもので、静かさの中に威圧と殺気を込めてジーンはアゲハに接する。

アゲハは、肩を抱いて小さくなったように見えるがそれでもジーンから目をそらすことは無かった。

それを見てリナと、ハルドはちよつと感心した。というのも、慣れていない相手の場合なら、すぐに逆上するか、怯えるかその二つに一つしかない。

ジーンの殺気に当てられてそんな反応しか出来ないのだ。武術に

おける気当りというものである。

それに対して、このアゲハという少女は全くといって良いほど効いていないようだったのだ。

「ジーンさんが……」

「俺が、何だ」

「心配だったんです」

その瞬間すべてのものが凍りついたようだった。

一瞬の後、ジーンが全身を震わせながらもタバコを口から外し、ゆっくりともみ消す。

「ふざけんな！ 誰が俺の心配をお前がしろと頼んだ！ 家にいる。俺がお前に頼んだのはたつたそれだけだ！」

「でも、本当に心配だったんです」

「お前は！」

激昂したジーンがアゲハに殴りかかると、振り上げた手をリナに止められた。

「ダメよ。それだけはさせないわ。その娘がアンタに殴られる道理なんて無いもの」

「放せよ」

「やるってんなら構わないけどね。アンタに私が倒せるのかしら」

「おもしれえ」

ジーンが唇を吊り上げるように笑う。

瞬間

ジーンがリナの腕を払い槍を取る。

一瞬でリナとの間に距離を作ると、槍を構える。

リナも同様に、ファイティングポーズを決めると、ショートワードで仮面の内側の世界に呼びかけ、拳から肘にかけての能力術式を簡易展開する。

魔術に個人言語があるように、能力にもその能力者個人だけが使

いこなせる術式。イドがある。

「止めろってんだボケが」

一瞬の内に二人の間に入ったハルドが、二人の眉間にそれぞれ拳銃を突きつける。

あまりの早業に二人は息を飲んでそのまま静止し、ハルドは舌打ちした。

「とりあえず座れ」

もう争うことは無いだろうと、ハルドがホルスターに二丁拳銃を収めるとハルドは自分が座っていた椅子を直し勝手に座る。

しぶしぶといった感じで、ジーンとリナは構えを解き椅子に座った。

「お前も座れ」

「はい、ありがとうございます」

ハルドが隣のテーブルから椅子を一つ拝借するとその椅子にアゲ八が座り、ハルドとリナに挟まれる形になった。

あたりは、静まり返り皆がそれぞれの会話を止めてこっちに注目していた。しかし、事が収まったと見るや元の状態へと戻って行くが、ちらちらとこちらの様子をうかがうものも何人かいる。

ジーンと、その間の見知らぬ子供。

ここがフロンティアであることから、その二人が家族や親類であると言うことはまず考えられないと判断するのが常識。

ならば何かしらの依頼によって、彼らは一緒に居るのだろうと簡単に推察出来る。

どうもそういうことに気が付いているような風だった。

「ジーン。お前はその娘を家に隠し続けることを目標にしていたよ
うだがどうも難しいぞ」

「どついつことだ？」

「気付いている」

軽く後ろを指差すハルド。ジーンが目だけでそれを追って、周りを見わたすと、何人かがこちらに注目しているようだった。

くそ、と毒づくくとジーンはいらだたしげに頭をかいた。

「お前が怒鳴ったり、リナとやりあおうとしたあたり原因の8割程度を求められそうだが、その娘自体も目立つのは確かだな」

「そうだ、だから俺はコイツを閉じ込めよう」と

「お前の話は聞いていない」

ジーンの話を手を打ち切り、アゲハの方を向き直る。

「アゲハよ。ここに来る前にお前がどう振舞うべきか。そういう指示は出たか？」

「いいえ。私は何も言われていません。ただ、お前はお前でなさいとだけ言われました」

ふと、ジーンは小次郎の言葉を思い出した。

「じゃあ、お前と別れるときに小次郎が言った、お前はお前の仕事をしなさいって言葉の意味は……」

「待つことが私の仕事なんです。小次郎さん達が大きな仕事をしている間に待っていることが私の仕事なんです」

「つまり、お前のやることってのは、お前がお前らしくここで一週間暮らしていくってことなんだな」

「そうです」

ハルドはそこまで聞くと、考え込むように眉間に手を当て、目を閉じる。

「リナ。お前がジーンのような状況だったらどうする」

「え、わたし？」

「そうだ」

「そうねえ」

ふうむと、うなり天井を仰ぐ。

「私なら、基本的に家に入れておくだろうけど、ジーンほど神経質に外に出さないってことはしないでしょうね」

「バカな。そんなことをしたら、コイツを狙っている連中に狙われちまう」

ジーンが反論する。

「アンタはね、考えすぎなのよ。それにねアンタがいつもより多く飯を買ったり、女物の服を買ったりしたなら耳の早い奴は、何か金の気配がすると感づく。そいつらは、金を手に入れるために敵対する奴らに接触しようとする。そうすれば最悪の状況なんてのは簡単に作られるわね」

そう言つと、リナは視点を元に戻しさらに言う。

「木を隠すなら森の中。逆に姿をさらすことで、あまり価値が無いように見せる。逆に町に出しておけば、何か異変があつたときでもすぐに駆けつけられるでしょう?」

「だが……」

ジーンはそこで言い淀んだ。

「アンタは、負けることを前提にしてやろうとしているの。私がやるなら、勝てる確率が高い方を選ぶわね」

確かにジーンの立てた戦術は、何かが起こつたときに対してアゲハを切り捨てることによつて成り立つ。だが、リナの場合アゲハはその何かがあつたときに生き残る確率を減らしても、何かを起こすことを未然に防ぎ、アゲハを守ることを考えている。そこが2人の差というよりか違いだった。

「木を隠すなら森の中……か」

「そうね。私はそうするけど今はもう意味が無いんじゃない?」

ちらりと辺りを一見する。こちらに視線を向けないまでもやはり、注目を向ける人物はかなりいる。

「それでもないぜ」

ハルドは不敵に笑う。

「ジーン、成功したときにもらえる報酬はいくらだ?」

「三五〇万ガルドだが」

「リナ、ざつとみてバーテン入れてこの店に今何人いるか見当つくか?」

「ざつと三十人ね」

「決まりだな」

ハルドは、確信に至ったようで笑みを浮かべて二度、三度頷く。すっと、笑みが薄れいつもの表情に戻ると、徐に立ち上がった。

密かに注目していた連中の注意が一齐にハルドに向けられる。ハルドは、その視線を受けても一切動じることはない。

「聞け！ ここに居る暇人ども」

突如として上がった低い声に、辺りは一齐に静まりかえり、店の中にいる全員が立ち上がったハルドに注目する。ハルド周りを見わたり、十分に注目を浴びたと分かると続ける。

「アゲハ、立つてもらって良いか」

「はい」

アゲハは、ハルドの要請に応じて立ち上がる。すると、ハルドはアゲハの肩に手を置く。

「こいつはジーンがあと四日間預かるガキだ。そしてお前らに頼みたいことがある。それはコイツをお前ら全員で守ってほしい。いつでも適当にコイツの存在を誤魔化して、お前らはいつも通りにこの酒場を使えば良い」

「なんだと……」

ジーンの呟きなど無視して、場は回る。

「報酬は？」

カウンター席にすわっていた男が、ぶすつと言った。

「一人頭十万ガルドで支払いは四日後。いつもどおりこの酒場を使うだけで十万だ」

ジーンとリナは、先ほどのハルドの質問の意味をようやく理解した。ジーンがもらえる残りの報酬をここにいる三十人にばら撒いてアゲハの存在を秘匿する。というものだ。

ここまでやられてしまうと、ジーンにはもうなにもすることが出来ない。

「どうもキナ臭いんだよ。何が狙いだ」

「そもそもこの依頼はもともとジーンが受けた仕事だ。さっきの成り行きを見ているお前らなら何かあると感じて、ジーンに探りを入

れてジーンとコイツに敵対する連中に協力する可能性がある。ならば先にお前達を抱きこみ、ついでにリスクを分散する」

「裏切りの可能性は？」

「そこは囚人のジレンマだ。協力すれば簡単に十万ガルドを手に入られる。裏切ったとしても身元はすぐに割れ、このコミュニティでの立ち居地は悪くなるはずだ」

「この酒場に集まっているものは、ほとんどフリーランスで活動してる仕事人だ。それに情報交換は毎日行われるため、そいつらはほとんど毎日ここにやってくる常連だ。」

「それによつて、この酒場は半ばフリーの連中のコミュニティとなっている。」

「異論は無いか。無ければ拳手を頼む」

「ハルドがそう言つと、まず始めにハルドに質問した男が手を上げる。それに呼応するかのように次々と手が上がっていく。」

「ほどなくして、バーテンである店主とジーンたち一行を除いた連中の手が上がった。」

「決まりだな。ついでにアンタはどうなんだ？」

「ハルドは、バーテンを向いた。」

「俺か？俺は何も問題ない。ぶつ壊されるときは、ぶつ壊されるときだしな。ただこれでぶつ壊れたなら弁償代はもらうがな」

「アンタにはコイツを昼間ここに置いてもらいたいのだが良いか？」

「構わない。まあ、相応の対価としてそこのお嬢さんには手伝ってもらうが構わないか？」

「はい、私は大丈夫です」

「アゲハは明るく、笑顔で応じる。」

「リナは？」

「私は、別に最初から決まってるわよ」

「よろしくね」と、不気味なほどの微笑でリナはアゲハに手を振る。「じゃあ、決まりだな」

「ハルドはジーンを見やる。ジーンの色は蒼白で、口を無意味に

開いたり閉じたりしていたが、ふつきてれたのか、腹が決まったのか、諦めたようにため息をついてハルドを見上げる。

「おめえ、本当に大した奴だぜ」

「なに、朝飯前だ」

そう言つと、ハルドは珍しく快活に笑った。

家に帰れば、やはりそこには予想通りの有様になっていた。

出てきたときと変わらず、ぴかぴかに磨き上げられた部屋。二日、三日放置すれば外からの砂埃が入り始めるのだが、全くといって良いほどにそれは見受けられなかった。

そして、やはり予想はしていたがテーブルの上には料理が二人分、蓋をかけてテーブルの上にあった。

普通に酒場でのあのやり取りを無しに帰ってきたなら、間違いなく怒っていたと思う。

だが、今は何故かアゲハの行いがほほえましく思えた。

「お前は、俺が帰ってこない間も、甲斐甲斐しく俺に仕えようとしていたんだな」

「ジーンさんはいつ帰ってくるとはつきり言わなかったですから、いつでも帰ってこれるように部屋の手入れをして、料理を作ってたんです」

「それで、いつまでたつても帰ってこないから心配になったと」

「そうです。そうですよ」

心なしかむくれている様子のアゲハ。

「心配になって行って行ってみれば、酒場で飲んだくれて。あげくの果てに殴ろうとする。ひどい仕打ちです」

そう言つと、そっぽを向くアゲハ。

ああ、怒ってますね。怒っているんですねあなた。

「何をにやけてるんですか？」

「いや、お前もそう言う顔するんだなってほっとしてるんだよ」

「どついつことですか！」

顔を赤くして、ぼこぼこ殴りかかるアゲハの拳を適当に払いのける。ある程度のところアゲハの拳を掴んだ。

「飯、まだなんだ。あの酒場はつまみが不味いんだ」

一瞬、虚を突かれたような顔をしたがすぐにいつも通り笑い、

「用意してありますよ」

と答えた。

テーブルへと案内され、皿にのった蓋が外される。

温かかったであろう料理はすっかり冷め切り、もとはおいしそうだったのだが、今はそこまでおいしそうには見えない。

「すぐに温めます」

「いや、良い。本当に腹が減っているんだ」

「わかりました」

アゲハが皿を取ろうとする動きをジーンが制し、苦笑した。それを見るとアゲハも納得したようで、席に座った。

最初にアゲハと食事したときのように「いただきます」をして冷め切った食事を食べ始める。

食事は、やはり美味しくは無かった。でも、それでよかった。

「なあ」

冷めたチキンを飲み込んでからジーンが言う。

「俺はお前に会うちょっと前に、バカみたいな金を借金して、それを返すためにお前を預かったんだ。ちようどお前を預かって返すと、そのバカみたいな量の借金が返せるんだ」

アゲハは食事をする手を止め、ジーンの話に相槌をうつ。

「でもな。大体お前の出自も怪しいし、小次郎達もなんだか信用できねえ。何か後ろにきな臭い組織もあるかもしれねえ。だから、お前を預かったときにだけでもらえる三五〇万ガルドだけ当てにして、都合が悪くなったらお前を殺す。それが最初の俺の目的だった」

そこまで聞くと、アゲハは変わらない顔で答える。

「そうですか」

「そうですかって、気にしないのかお前」

アゲハは、頷いた。ごく普通に。

「別に。気にしませんよ」

ジーンは、それを聞いたきり絶句してしまった。

あわよくば自分を殺そうとする、相手を「気にしない」と。アゲハが驚くだろうと想定していたが逆に自分が驚かされてしまった情けない。

「お前は、一体何者なんだ」

つい、口から漏れた言葉だった。出自に関しても、アゲハという人物についても、それから沸いた疑問だった。

けれども、アゲハはそれを聞くと気まずそうに視線をそらした。

「ごめんなさい。それだけは教えられないんです」

「どうしてもか？」

「はい……」

ジーンはため息を、ついて椅子にもたれかかった。

「ジーンさんは、後三日間だけ私を適当に守ってください。すべて終わったら、私の秘密を少しだけ教えてあげます」

「お前の出自について俺は、もう何も疑問を抱かない。ただ、やばくなったら容赦なくお前を切り捨てる。それに、この数日の振る舞いをまた繰り返し返すかもわからない。そんな男に預かられていることは嫌じゃないのか？」

「先ほども言いましたが、私は別に構いません。それに……」

アゲハはうつむいて、上目で見上げるようにジーンを見つめる。

「それに、なんだ」

「ジーンさんはきっと良い人だと思うのです」

ジーンはそれを聞くと、盛大にため息をつき、頭をいらだたしげに掻きむしると、新しいタバコに火をつける。

「俺、お前のそういうところ嫌い」

「私もジーンさんのそういうところが嫌いです」

そう言うと、アゲハはやはりニコリと笑うのだ。

少しは関係が良くなったと思ったが、やはり苦手なものは苦手なのだ。

アゲハが食事を再開し、ジーンもタバコを灰皿におくと続きを食べ始めた。

日は昇り、酒屋の中は普段のランプの明かりではなく、朝の光が店の中を照らす。

暑苦しい室内にちよつとした冷房装置兼送風機が回転し、空気の循環を行う。

椅子は今だテーブルの上にひっくり返ったまま。開店準備はこれからと言ったところ。

「さて、今日からおやつさんにはコイツを預かってもらうことになるんですが、くれぐれもこき使ってやってください。あ、あと、粗相したら容赦なくお願いします。ぶん殴っちゃってもおつけーす」
「ジーン。お前が粗相がなんたら抜かす時点でそもそもが間違いなんだ」

ジーンが卑屈に笑い、ひたすら手もみするのを店主はほとんど軽蔑するような目で見た。

「たぶんこの娘はお前なんかより百倍ました。ヨロシクな、アゲハ」
「はい、よろしく願います」

店主は今までこの町の住人に一度だって見せた事の無い笑顔のアゲハに向けると、アゲハも笑顔でそれに答えた。

「ケッ」
「ケッって、なんですかケッって」

アゲハがジーンをたしなめるような口調で言う。

「何か聞こえたか？ 幻聴じゃないか？ 頭は大丈夫か？」

ほとんど棒読みで言うつと、ジーンはそっぽをむいた。

「もっつ、ジーンさんったら！」

「頭がおかしいのはコイツのいつもの特徴だ。生憎この町にはオツ

ムのお医者さんが存在しないことが俺には残念でならない」

「何だと！」

ジーンは店主に噛み付くが、店主はそれをあっさりとスルーした。
「おい、エリー出て来い」

「はい」

店の置くから声が響くと、ぱたぱたと若い娘がやってきた。

容姿は十人並み、肌にはそばかすがあり、顔も特にこれと言った特徴を持たない顔。

だが、娼婦ばかりで、蛾のような美しさばかりが目立つこの町の女達の中でこの容姿は特異だ。

エリーはこの店におけるウェイターで有るだけでなく、この店主の娘なのだ。

その昔、この町に流れてきたエリーを売春宿から保護し最終的に買い取ったのだ。

このエピソードには、この店主の武勇伝が様々な形で囁かれるのだが、ジーンは詳しくは知らない。

随分昔に実際に聞いてみたのだが、「さあどうかね」と軽くあしらわれた。

「こいつが君に仕事を教えるエリー。わからないことがあったら何でも聞きなさい」

「ヨロシクね」

「はい」

エリーが屈託の無い笑顔で答えると、アゲハもやはり屈託の無い笑顔で答える。すると、ジーンが両肩を抱いて震えた。

「おお、寒い。なんだか、暖かホームドラマでも見させられているような気分だぜ」

「ジーンさん！ 冷やかさないで下さい」

「良いんだ。コイツがその暖かさに嫌悪感を示すのは、やはり頭がおかしいのだ。なんとも言うようにオツムのお医者さんがいないことが残念でならない」

「て、てめえ」

「やめてください」

にらみ合う店主と、ジーンの間に入ったのはエリーだった。

店主とジーンはお互いに「ケツ」と吐き捨てると、そっぽを向く。

「後二十分もすれば客が入る。それまでにこの椅子全部戻さなきゃいけねえんだ。さあ出てった出てった」

「へいへい」

ジーンは手に持った槍を肩に掛けると、だらだらした足取りで外へと向かう。

「ジーンさん」

「なんだ、アゲハ」

呼び止められて、振り返る。

アゲハは、澄んだ目でジーンを見据える。ジーンもいい加減アゲハのこの所作に慣れたため、目をそらすことはしない。

「今日はちゃんと帰ってきますよね」

それを聞くと、ジーンは苦笑を禁じえなかった。

「帰ってくるさ。今日受けた仕事は割と簡単。夜にここに戻ってくる。精々労働の苦しみでも味わっていれば良いんだ」

苦笑しながら肩をすくめて答えると。アゲハはまた微笑む。

「はい」

「じゃーな、行ってくるぜ」

「いつてらっしゃい」

ジーンは踵を返し、板張りの床を歩き、鐘の音を鳴らしながら外へと出る。

いつもと同じように晴天。雲ひとつありはしない快晴。

だが、いつもと違ったことがあるとすれば、風がまったく吹いていなかった。

アゲハとこの店に来たときはまだふいていたのだが、今では止んでしまった様子。

風は吹かず、砂埃も舞わず、町の情景はやけにクリアになってい

た。

「珍しいこともあるもんだな」

感心したように呟くと、ジーンはタバコに火をつけそのまま軽い足取りで事件屋へと向かった。

その日の仕事は現金の受け渡し。

いわゆる運び屋の仕事。戦闘も予測されていたのだが、別段大したことも無く緩やかに終わる。簡単な手続きで依頼者から報酬を受け取った。

占めて、二十万ガルド。

これedyouやく借金の残りの返済額が百万ガルドを切る。ここ数日のバカみたいなハードワークによって稼いだ金がかなりの助けになっていた。

今日の依頼はジーンにとっては危険度も大したことも無く、報酬もまた同様に大したことはない。けれどもある意味で良い骨休めになった。

仕事が終わったとき、日が沈むにはまだまだ高く、酒屋に行つて飲みに行く気分でもなかったのでジーンはそのまま事件屋へと再び赴く。

カラン、とベルが鳴る音と共に、部屋の中の冷やされた空気がジーンに吹き付けた。

「ご苦労さん」

「うつつす」

マルロの出迎えに軽く右手を上げて答え、つかつか中へと入っていく。

夕暮れ時というのもあつてか人はジーンと、マルロ以外は誰もいない。

「借金が百万を切った」

「ほおそいつは凄い」

感嘆したように言うと、マルロは軽く手を叩いた。

「それでだ。期日は3日後の朝。だから、二日で百万稼げる仕事をくれ」

「相変らずデタラメだよなお前は」

「あと三日体が持てば良いんだよ。それで」

「やれやれ」

そう言いながらも、高額報酬仕事リストを探しにかかるマルロ。フロンティアには腐るほど仕事がある。

それは、フロンティアが魔術系連合国と能力系連合国の境界にあるためであるのだ。

両国を行き来する交易品、密売品、もろもろがフロンティアという関所を通らなければならぬということにこれは起因し、どちらの国の法治区では無いため略奪も当然のように起こる。

そのためにより安心できる運び手や、略奪人が常に必要になってくるためだ。

「これで、どうだ」

マルロが二つの依頼書をジーンに提示する。

二つともが略奪の仕事であり、二つとも報酬額が五十万ガルドを超過していた。

「受ける」

失敗するなんてことも一切考えないのでほとんど即答で答え、手を手前に軽く引く。

マルロが、書類とペンをジーンの前に置くと、ジーンが自分の名前を二つの書類に書き込み、マルロがその二つの書類に判を押した。「これで、お前は晴れて借金を返せるって訳か。まあ死ななければだけだな」

「死なねーよ。俺は。全く確信は無いがな」

苦笑すると、タバコに火をつける。

「ところで、この間のガキあずかるって話、ちょっと聞いたんだが酒場で預かることにしたんだってな？」

ジーンはうつかり、口にくわえたタバコを取り落としそうになった。すぐにくわえなおすと、一度煙を吐いた。

「なんで知っている」

「そりゃあまあ、職業上な。ついでにここに仕事をもらいに来る連中は大抵フリーだ。そいつらほとんどを巻き込んだことを俺が知らないはず有るまい」

「なるほどな」

そう考えてみれば道理だ。

あの夜、十万ガルドをばら撒くと言った連中の頭数はこの町のほとんどのフリーの連中だ。ひよつとしたら、実質的に活動している連中全員かもしれない。

ことの顛末は誰かが、マルロに話しちまったのだろう。

まあ、この男にも守秘義務はあるわけだから問題は無さそうだが。マルロはニヤニヤしながら聞く。

「どういう腹積もりだよ。お前の脳みその中身は金に関すること以外に何も無いってのに、そんなバカみたいな太っ腹。そもそもお前はそのアゲ八って娘をいざとなったら殺すつもりじゃなかったのか？」

「それはな……」

不意に、背後でベルが鳴る音がし熱風と共に一人の巨漢が入ってきた。

砂を避けるための外套に丸いサングラス。短く刈り込んだ髪に、ジーンよりさらに一回り大きい身長。肩にはライフルケースを担いでいた。

「俺のプランだからだ」

「どういうことだ、ハルド」

マルロが事件屋に新たに入ってきた巨漢、ハルドに質問する。ハルドは、サングラスについた砂埃を軽く払うと、外套のポケットにしまう。

「どうもな、ノリだ。ノリ」

無然とした顔でさらりとこんなことを言ってしまうあたり、大物だ。とジーンは思う。

「ノリって何だよ。あからさまにいつも何にも興味が無いくせに、今まで見たこと無いぞ

あんな見栄の切り方」

「ときどきなあ」

ハルドは思い切り自嘲するように顔を歪めた。

「やっちまうんだよ。なんか、周りで変な不調和が起こるとそれを解決して、調和した状態に戻したいってな。だからその不調和を見たくないからなるべく関心を持たないようにしてるんだが、どうも時々発作みたいにあんなのが出る」

「潔癖症か？」

「さあ。何事もノリだ。付け加えると自分でも死ぬほど後悔しているから突っ込まないでくれ」

「あいよ」

ジーンはそれ以上ハルドに言及しないことにした。これ以上言うのと怒りそうだ。頭が良いってのも良い事ばかりではないらしい。

だが、ジーンとしては冷静沈着な射手としての魔術師ハルドしか知らないだけになかなかの収穫だった。

「なんだ、にやけやがって不愉快だな」

「あら、俺、にやけてた？」

「ああ」

ハルドは頷く。

「だがな、あの娘はある意味で特別だ。あの娘でなかったら俺は、ああいう風には振舞わなかっただろうよ。……だからより一層頭を銃でぶち抜きたくなる」

普段の冷静沈着なハルドの姿とは随分違ったすがたがそこにあつた。歯噛みし、顔は紅潮し、利き手がホルスターの辺りをしきりに行ったり来たりしてる。

「そう、自虐的になんなよ。助かったのは事実なんだしな」

「何故だろうな、その言葉では俺の《脳みそぶち抜きたい衝動》は押さえられないぜ」

「おっと、そいつは困るな。これから仕事だろうに？」

マルロが口を挟むと、ハルドは苦笑した。

「そうだったな。危うく目的を忘れるところだったぜ。死にたくなったら仕事する。そうやってここに来たんだ」

「お前、アホだろ」

「湯水の如く金を使うことしか考えないお前よかはるかにマシだと思っがな」

「言っとけ」

ジーンもまた、自嘲するように苦笑すると、槍を肩に担ぎ事件屋を後にした。

一言で言えば、そこは最低の酒場だった。

喫煙者が多すぎるせいで常に煙が充満している店内。薄汚れ、所々ぶつ壊れてる壁。妙に油っぽい床。

馬鹿笑い、ハイになり過ぎた連中の言い争い。殴り合いの喧嘩、時々乱闘。店主はいつものことと、グラスを磨き、ウェイターは客の間を駆け回る。

というのは、どうやら昨日までの光景だったらしい。

内装は何一つとして変わらない。ヤニがこびりついたアイボリーの壁紙、一部破損している壁、妙に油っぽい床。塵や埃はいつもと変わらず見受けられない。

何が変わったかと言えば雰囲気なのかもしれない。

例えば、タバコの煙の充満はそこまでひどくない。ハイになりすぎて態度が悪くなっている客もあまり見受けられず、殴り合いの喧嘩など論外だ。

「うむ、これは」

ジーンが元居た連合国の首都にある良い酒場と全く遜色が無かった。もちろん高級なバーなどではなく、気兼ねなく安酒が飲める店の話なのだ。

ウエイターのエリーと共に駆け回るアゲハ。

彼女は今はエリーと同じ、長いスカートの安いドレスに身を包み、お盆をもって駆け回る。

どうも、この特異現象の中心点はアゲハのようだ。

アゲハが笑顔を向けると、必ずといって良いほどにその相手は笑顔を返す。それを見たほかの客も気分を良くする。その連鎖だ。

一緒に働くエリーや、店主の表情も普段とあまり変わらないように見えるが、やはり微細ながら明るく見える。

「基本的にクソ不機嫌な連中しかいないというのにな」

アゲハは、今はあの娘がしている髪留めを与えた男、ジョーイと話しているようだが、ただ単に自分好みのポニーテールの女の子に絡んでいるだけのようだった。買い物時の礼でも言おうと思ったが、ある意味で、奴の夢を叶えてやったそれで良いか、と声をかけるのをやめておいた。

適当に空席を探しながら店の中をうろつく。三人がけのテーブルに一人見知った背中があった。そいつの視線は店の中を駆け回るアゲハから一切ぶれない。

「相席良いか？」

「ああ、うん」

そいつが、生返事で答えたので向い側に座る。

「ご注文はお決まりですか？」

「ああ、じゃあとりあえずビールでもくれよ」

エリーがやってきて注文を聞く、聞き終わるとジーンの注文を復唱し、メモを取るとカウンターへと戻って行った。

視線を相席した相手に向けると、そいつの目は瞳孔が開きっぱなしで、よだれがたれかかっていた。

「リナさん。よだれ、よだれ」

「え、ああ、うんって、……ジーンいつからいたの」

リナは口の端から溢れかけていたよだれを拭くと、ジーンに向き直った。

「ついさっきさ。てか、いつからずっとそうしてアゲハを見てたんだ？」

「ついさっきよ」

「それは、よかった」

ジーンは軽く苦笑した。

一時間前からあの禁断症状出まくりのリナなんて想像するだけぞつとしない。

「ビールお待たせしました」

「さんきゅー」

カウンターに向かった、エリーが戻ってきて、テーブルの上に乗ったビールの上に乗ったビールのビンとグラスを置いていく。

「では、ごゆっくり」

「あいよ」

エリーは、軽く頭を下げると別のテーブルへと向かった。

「しかしまあ」

「何よ」

「あいつはすげえな」

それと、顎で動き回るアゲハを示すと、リナは頷いた。

「あいつの出自は俺も詳しく知らないが、もともとどっかのお嬢様なんだろうな。そのお嬢様がこの町の中に入ってあつという間にこの連中の中心にいやがる」

「あそこまで行くともう才能に近いわね」

リナはそう言うと、メンソールのタバコを取り出し火をつける。

ジーンもそれにあわせるように自分のタバコに火をつけた。

「愛される才能って奴か？」

「それは、逆かも知れないわね。あの子は愛されていると同時に、

周りを愛しているのよ。多分」

再びアゲ八を見やる。やはり彼女はその顔は疑いの無いような笑顔で笑いかけ、それに応えるように客が笑顔を向ける。小次郎やアンネがアゲ八に向けていた視線も今のこの店にいる連中に近い。

彼女はやはり愛されているのだ。だから、周りを愛することが出来る。それが連鎖するのだ。また、その特異点になれるほど彼女の愛は深く、そして広い。

リナに言われてみればその指摘は確かに正しい。

「なんか俺分かつちまった」

「何が」

「俺があいつを嫌っている理由だよ」

「あらそう」

ジーンの理由を簡単に言ってしまうなら、それはうらやましさだ。リナは無関心そうに煙を口から吐き出す。ジーンとしても別にそれをわかってほしい訳ではないからそれでよかった。

沈黙はしばらく続き、吸っているタバコが徐々に短くなっていく。ただ、まあ。アンタは自分を過小に評価しすぎる癖があるから、アンタが見てるもんがすべてじゃないって事、分かったほうが良いわよ」

「？ なんの話だ？」

「ただの独り言よ」

リナはそう言うと、灰皿にタバコをすて新しいタバコを取り出しそれに火をつけた。

「ジーンさんに、リナさん、来てたんですか？」

いつの間にかすぐ近くに来ていたアゲ八が、声を弾ませて言う。

「はい、アゲ八」

「ああ」

ニコリと、らしくない笑顔で応じるリナ。

相手を笑顔にする才能を持っているアゲ八。だが、いまのリナの笑顔が微妙に性癖が混ざっているのではと思うのは、あえて突っ込

まなかつた。

「休憩？」

「そうですね、ここいいですか？」

「いいわよん」

アゲハは仕事道具である、オーダー表も銀色のトレーも持っていないなかった。リナに促されるような形でアゲハは、椅子に座る。

「ところで、質問なんですが。ジーンさんとリナさんは恋人同士なんですか？」

刹那。

時間が止まった。

硬直したまま、およそ五分間が経過し、長くなったタバコの灰が落ちた。そこでようやくまともな思考力が働くようになった。

「「ばかな！」」

同時に立ち上がり、テーブルを叩き叫んだ。芸術的なまでのシンクロニシティ。

「はて？ ではお二人はお友達なのですか？」

アゲハは首をかしげた。

「いや、それも……違う」

「では、お二人はどういった関係なんですか？」

再び沈黙。

二人の関係は、簡単に言ってしまうえばセックスフレンドだ。肉体的関係のみの、なんとも不純な関係である。

ギブアンドテイクで成立する二人の場合それで問題は無いのだが、この無垢を体現したような少女にそんなことをストレートに言えるか？ 否である。

(どうやって説明するのよ)

(誤魔化せ、誤魔化せ！)

アイコンタクトで会話する。二人、適当にコミュニケーションを取ると再びアゲハに向き直り、「あははは」とアルカイックスマイルを向ける。

「ま、まあ何だ仕事上の相棒といったところだよお」

「そう、……なんですか」

「そうよ、そうよ」

明らかにジーンとリナの笑顔は引きつっていたのだが、アゲハは疑うことは無く更に疑問を深めたようで、「うくん」とうなっている。

「おかしいですねえ。それを言うなら、ジーンさんとリナさんはもっと信頼しあっているように思います。ハルドさんもですけども」「ああ、それは腐れ縁ってやつさ」

リナは肩をすくめる。そっちのことか、と理解できた。

「この町での数年間ってのは、外にくらべてとっても長いのだから、そういうツキアイが続くって事はさ、ある程度信頼みたいなものも出来てくるのよ」

「まあ、腕前ありきだがな」

「そういうものなんですか？」

「そういうもんだ」

ジーンはアゲハに向かって笑いかけると、左手をアゲハの頭の上に置いた。

「お前も帰ったら小次郎辺りにでも聞いてみれば良い。この関係は楽だ。いつでも関係を切れるし、背中に合わせの時は最高に信頼できるんだ」

そう言うつと、リナはタバコをもみ消して、かぶりを振った。

「そうねえ、まあそれは分かるけど。あんたじゃ私の後ろを守るには少し役不足かしらね」

「俺だって、お前みたいな奴の背中をまもりたかあ無いよ」

一瞬だけ沈黙が起こり、至近距離で睨みあう。

「なによ？」

「なんだよ！」

すると、二人やり取りを見ていたアゲハが口を押さえてクスクス笑い始めた。

「何が可笑しい！」

「とつてもお二人らしいなって、思ってた」

突然笑い出したアゲ八を見て、リナとジーンはぼくんとその場に立ち尽くしてしまった。

「……よくわからない娘ね」

「なあ、ちつとは俺の苦しみの一端みたいなの分かった？」

「うん。それは微妙ね」

リナは、怪訝顔でうなるだけだった。

「なんだ、うつつうしいな」

ジーンが空中で軽く手を振り、何かを握りつぶす。握った拳を開くと、そこにはつぶれた蚊の死骸があった。どうも腹が一杯だったらしく、掌に少量血がこびりついていた。

血の量は通常見られる量よりも明らかに多かったのだが、ジーンはそれを大して気にはしなかった。

「お二人ともお食事はまだですか？ まだ食べてなかったらちよつと作ってきて良いですか？」

「食べる。食べる。アゲ八の料理か、たのしみね」

「……、お前さ。料理をすることによって懐柔しようとか考えていない？」

「懐柔……」

アゲ八はうつむきがちに怪訝顔をした。

「ジーン、あんたまた！」

「つてなんですか？」

ずてつと、力が抜けたジーンとリナはテーブルに倒れ付したがすぐに起き上がった。

「行って来いよ。俺もお前の料理は結構楽しみだ」

「はい」

アゲ八は笑顔でそう言うと、パタパタとバーの奥のキッチンへと駆け込んで行った。

「あと、三日か」

「なによ、なんだかんだ言っで、あんたもあの娘のこと好きなんじゃない」

「かもしれねえな。幼女趣味は無いがな」

ジーンは苦笑し、また新しいタバコに火をつけた。

最終日

映し出されている映像に映っているのは三人の男女。

一人は、長身瘦躯のざんばらの茶髪の青年。着ているものから魔術師と見られる。

もう一人は、赤髪の女。両方の手の甲に小さく刻まれている刺青から、仮面の中の世界にアクセスする能力者と分かる。

立ち振る舞いから、相当の強者だと言うことは映像を介してでも強烈に伝わってくる。

ただ、この映像を見ている奴らにとっての目的はこの二人では無く、三人目の金髪の少女だった。

この少女は、今はその店のウエイターとしてのユニフォームに身を包み、二人と楽しげに会話している。

不意に、流れている映像が乱れ、直後に砂嵐だけが画面を支配した。

「ここでファミリ工を叩き潰されました」

黒髪の女が映像を消すと、明かりをつけ、部屋の連中に向き直った。

「そっか報告ご苦労だった」

椅子に座った男は顎に手を当てたまま、少し頷いたきり黙り込んだ。

その部屋は簡素な部屋だった。

部屋の中には作りが簡単な椅子とテーブルが数点あるだけで、他には何も無く、照明代わりの魔術光虫が部屋の中を照らす。電力の概念は既に五十年前に発見されていたが、未だに魔術光虫が用いられている理由は、彼らが電力を軽蔑していることにあった。

部屋の中には三人。

前に立って、映像を見せていた黒い髪の女。顎に手を当てたまま動かない長髪の男そして、机に突っ伏して豪快に睡眠をとっている

男の三人。

「映像を見た限りですと、《彼女》をやつは日中町の中に入れて置くことにしたらしく、襲撃は困難に思われます」

「何日前からそうだった？」

「居場所の特定を大まかにして、ファミリエが《彼女》を発見した時点でそうなっております。っていうか起きなさい！カーリイ」

黒髪の女が眠っている男の前まで行くと思い切り、後頭部に拳を振り下ろした。

「ん？ メシ？」

カーリイと呼ばれた男がねぶた気な目をこすりながら起き上がる。

「作戦会議中よ。寝ないの」

「終わったら起こして。別に俺が参加する意味ないし、報告は後でき……く……」

そう言うつと、カーリイは盛大なあくびをし、再び豪快ないびきをかいて眠り始めた。

「こいつって奴は、なんて尊大な……」

「いや、良い。仕事は必要なときに必要なだけしてもらえば良いさ。それより続きを聞かせてくれ」

男は顎に手をあて考え込むような仕草のまま言い続ける。

「はい。昼間に襲撃をかけようものなら、フロンティアの掟に従って私達が逆に駆逐されてしまいます。仕掛けるなら夜が良いかと思われませんが」

「夜も無理だな。さつき映っていた男が用心棒なのだろう？」

「はい」

「強襲して、一瞬で奪えるならば良い。だが、この男ならばそれを先延ばしにして昼間と同じ状況に持ち込まれる可能性が高い」

「知っている人……なんですか？」

「まさか。知るわけが無い。手練だと思っただけさ。ただ用心するに越したことは無いし、

襲撃するタイミングというものがある」

男は肩をすくめて笑ったが、その目に確かに憎悪があることを黒髪の女は見逃さなかった。

「高杉達に行ったケイネス達はどうしている？」

「依然として交戦中ですが、撃退あるいは、全滅されるのは時間の問題かと」

「分かった」

再び、顎に手をあて考え込むようになると、やがて顔を上げ、

「そっだな……」

作戦の内容を黒髪の女に話し始めた。

「ひい、ふう、みい、やあ、とう……」

必要以上に念入りに、黒スーツの男が金を数えていく。

無駄に贅をつくした部屋の中には金を数える男とは別に黒スーツの面々が何人もいる。

ジーンはその部屋の中、ソファーに座って引きつった笑顔を浮かべながら金を数える声を聞いていた。

槍は部屋の中に入る前の既に取り上げられ、今は部屋の中で三人が銃口をジーンの頭部にロックオン。

恐らく彼らは、魔術や能力は使えるのだろう。

だがまあ、引き金を軽く引くだけで頭が吹っ飛ぶ代物を向けられているほうが精神的にキツイ。実際問題、ここ最近の戦場は魔術や能力に銃が取って代わられる場面も多く見られる。

先刻から、冷や汗が止まらない。

「きっかり七百万ありました」

「よし」

ジーンの目の前に座っていた太った男が軽く手を上げると、ジーンに向けられていたロックオンが解除された。

その太った男の顎は二重、薄くなった黒い髪の毛は後ろに撫でつけ、ごつごつとした太い指すべてにエメラルドの装飾が施された金

のリング。容姿そのものが自分の権威を押し付けるようなそんな印象があった。

男が金歯を剥いて、無駄に大きく笑って見せる。それに大してジーンも、にいと歯を剥いて笑ってみた。

「合格だジーン。涅槃にはまだ早かったようだな。ははは」

「そ、そうですね。周さん。ははは」

とりあえず周が笑うから、ジーンも笑っておく。ここでもし目の前の人間を不愉快にしようものなら、命などあつという間に吹き飛ばぶ。

「帰って良いぞ。それと、うちに借金するときはサービスするぜ」

「え、遠慮しておきます。それじゃあ、俺はここで……」

そろり、そろりとソファから立ち上がり、入り口にいる黒服から短槍を受け取る。

そして、部屋から出ようとドアノブに手を延ばす。

周はフロンティア・ゼクスに進出している能力者系マフィアの支部長である。周の組織と、彼の権力はまとまった勢力がそこまで多くは無いこの町において一、二を争うほど強大だ。

そんな彼を前にして、ジーンはとつとと帰りたかった。

「ジーン」

不意に、太く、大きな声に呼び止められる。

「はい」

「また来いよ」

「は、はいー」

二度と来るものか！ と思いつつも愛想笑いで答え、その部屋を後にした。

部屋を出ると、アゲハがぐもった声で笑っていた。

「おまえなあ」

「だって、ジーンさん格好悪すぎなんですもの」

ジーンはため息をつくつと、頭をかく。

今日でアゲハを預かってから七日目。

ついにジーンにとっては苦行のごときだったアゲ八を保護せよとの任務の最終日。

それと同時にジーンもまた、借金分であった七百万ガルドを今朝方に稼ぎ出し、周に返済したところだ。

アゲ八はこの町にやってきた当初身につけていた格好に戻っている。

といつても、外套にこの町のボロを着せているためそう分かるものではない。髪型も未だにポニーテールだ。

そして、今は町の外へ向かって歩いている。

「ジーンさんにもあんなに怖がるものがあつたんですね」

「無理なものは無理なんだよ。個人ならともかく、集団を相手にするとなつたら一瞬でプチンさ。昔はよくやったもんだが、最近はめつきりさ。利口になつたのかな」

「それは詭弁ですね。いわゆる大人の事情というやつです」
「うっ」

笑顔でサクリとジーンの痛い所を刺し貫く。ジーンはその時、笑顔のもう一つの使い方をアゲ八に教わつたような気がした。

「あーもー、なんとでも言えば良いさ。俺はもう随分と年を取つちまつた。無理が出来なくなつたそんだけのことだ」

「じゃあ、若いときはどうだつたんですか？ と言うかまだ二十七八歳でしょう？」

「お前つて奴は、ああ言えば、こう言うよな！」

「一週間ジーンさんと暮らして、ジーンさんとの接し方が分かつたような気がします。リナさんのアドバイスは大きかったです」

「あいつ、いつか死なす」

苦虫を噛み潰したように顔をしかめ、ジーンは数日前のリナとアゲ八のこんな会話を思い出す。

「こうやって話を適当に切り返せばジーンはすぐに怒ってバカみたいになるよー」

「はい、センサー。分かりましたー」

学校の先生ヨロシク授業をするリナと、生徒ヨロシク授業を受けるアゲハ。

「アイツは、虚勢を張ってるだけのヘタレだから、抉ればすぐにボロが出るよー」

「はい、センサー分かりましたー」

「じゃあ、結局どうすれば良いのかなアゲハちゃん？」

「とりあえず、笑顔で抉ればオツケーって事ですね？」

「よく出来ましたー」

リナがそう言うのと、アゲハの頭をぐりぐり撫で回す。アゲハは機嫌の良い子猫のように

リナに擦り寄っていた。

ジーンはその時、地面に倒れ伏していた。

不都合だからと。授業の途中で口を挟んだジーンを打ちのめしたのだった。

「……若いころなあ。ここ来る前はオルフェリアの学院生だったよ。しばらくの沈黙の後でジーンが苦々しげに言った。

「オルフェリア学院？ 詳しく知りませんが、魔法学校ではかなりの名門だと聞いたことがあります。でも、どうしてジーンさんがそこに？」

「まあ要するに厄介払いしたかったんだよ、あいつらは。もう名乗ってないけど、俺の苗字はシュヴァイツァー。シュヴァイツァー家ってのはかなり上等な魔術師の家系でな、魔術が使えない俺を、金と家柄に明かしてあの学院にぶち込んだって訳だ」

魔術師か、能力者。

生を受けたときから、どちらかの能力は使いこなせるように出来ている。特異な能力や、魔術を持たずとも、魔術師における共通言語、あるいは能力者における法を使うことは可能である。

もともと力を行使することは可能だが、年を経ることや訓練によ

って使える《力》の幅は広がり、最終的にそれぞれの《力》に至る。だが、それはあくまで普通の状態であるのだが、中には全く《力》に目覚めないものもいる。それは即ち異端であることを示す。それを《欠落したもの》と呼ぶ。

「シユヴァイツァー家とは卒業したときに縁を勝手に切った。向こうもせいせいしているだろうな。学院もクソみたいに鼻持ちならない奴しか居なかったな」

「友達はいなかったのですか？」

「……一人、いた」

もう五年前になる。

全力でやり合い、その果てに失った。たった一人だけいた親友。

「そいつも居なくなっちゃったなあ。まあ良いと思うんだよ、今の生活もさ。俺はもう何も、もち得ない。追い出されてこの町に来た。それだけだ」

ジーンはそう言って笑う。

自分は矮小であると、陳腐であると、取るに足らない存在であると、自らを完全に否定しきった笑みだった。

「ジーンさん……」

「俺は居ても居なくてもどうでも良いんだ。守るものも無けりゃ、手に入れたいものも無い。下らない。本当に下らない存在だ」

沈黙は続いた。

だが、それでも黙々と二人は歩いていく。しばらくすると、フロンティアゼクスの門にたどり着いた。

出るときには丁寧に、「君に幸あれ」どこそのバカの看板へのいたずら書き。酔狂で言ったさっきの言葉のせいか余計に腹が立つ。

「魔術と、能力っての言うのはですね……」

アゲハがおもむろに言い始めた。

「たとえば一つの山があつて、それを別々の道から上って行く事なんですよ。だから、魔術にも能力にも、体系が違えど似たような力があったりするのです」

「能力者の道か。俺はこっちの町に来てから、そっちの開発も試してみたがダメだった」

「だから」

アゲハが立ち止まると、ジーンも立ち止まり振りかえる。

「ジーンさんにはひよっとしたらジーンさんの道があるかもしれないんです。他の異端と呼ばれる人たちも多分自分の道を持っている人なんだと思います」

「っは、そういうケースは聞いたこと有るけどな。俺は違う。どこにでもいるゴミクスだ」

「ジーンさん」

アゲハはジーンの手を握り、ジーンの瞳を真っ直ぐと見た。ジーンは手を払いたくなくなったが、アゲハの力は思いのほか強かった。

「自分を信じて、それと、自分を大切にしてください。あなたを大切に思っている人はいます。だから、自分を大切にして」

一笑してやりたかった。

んなもんはバカだ。この町でそんなやり方は通用しない。

そう言ってしまうのは道理だ。だが、それを覆す力がアゲハの瞳には確かにあった。

(こいつは)

誰にでも、与えることが出来るんだ。

その与えられたものをジーンは少しばかりか、信じてみたくなかった。

槍を地面に落とし、開いたもう片方の手でアゲハの頭を撫でた。

「ありがとなあ」

すこしだけでも自分を大切にしようかと、そう思いたくなくなった。

「お前は本当、俺には不似合いだ」

「わかってますよーだ」

べーっ、とアゲハは舌を出した。ジーンはそれを見て苦笑した。

どうにも自分は真っ直ぐ好意を示すなんて芸当が出来ないらしい。

「さて、と」

アゲハから手を放して、槍を拾い上げる。

「最後の仕事だ。酒場で待ってる連中のための金を受け取りに行く」
う

「そうですね」

アゲハはいつも通りの笑顔になる。

ジーンが歩いて門を抜けると、アゲハがその後に続いた。アゲハは一度だけ振り返るとすぐに前を向き直りそのままジーンの後を歩いた。

風は今日も珍しく吹いては居なかった。クリアに荒野の先まで見通せる。塵にまみれた空の色は今青い。

門を出て歩くこと数時間。小次郎達と出会った立って看板の前に到着する。

アゲハのペースにあわせてジーンは歩いたためか、前回よりも時間がかかった。

「さて、ここまでついた事だしこいつを返しておくか」

ジーンが袋の中に入れておいたアゲハのローブを取り出し、手渡す。だが、アゲハはそれを受け取ることを拒んだ。

「良いのか？ そんなボロで帰ったら小次郎達に何か言われませんか？」

「良いんです」

アゲハは、自分が身を包んでいる外套をしげしげと見つめてから、笑った。

「出会いというものは、何においても大切なものだと思うんです。だから、私はここで過ごしたことを忘れたくないから、この髪留めも貰っていきます」

「酔狂な奴だよな。まあ好きにしるよ」

「ありがとうございます」

ジーンはため息をつく、元はアゲハの所有物だったローブを自

分の荷物の中へと押し込んだ。それから、ゼンマイ仕掛けの時計をポケットから取り出し時刻を確認する。

(さて、そろそろ来るはずだが)

そう思った矢先のことだった。

突如として、地面のそこから轟音が鳴り響き、それは徐々に大きくなっていき原因たるものが近づいてくると予感させる。

地面を突き破る音と共に、その黒い門は再び同じ場所に出現した。ジーンとアゲハは、門の方角を向き、開くのを待つ。

徐に、黒い門の扉は開き中から、黒装束のアンネと小次郎。それに白装束の九人が現れた。

「ただいま、アゲハ」

「おかえりなさい。小次郎さん、それに皆さん」

小次郎と、アンネが笑いかけそれにアゲハが笑顔で答える。

この一週間彼女が誰にも向けていた変わらない笑顔。

それが、もう見れないと思えば名残惜しいと思う気持ちはジーンにもあった。

だが、やはり彼女はやはり帰るべきところ帰るのであり、小次郎とアンネはアゲハの帰るべきところそのものなだろう。

だから、これは正しい形なのだ。帰るべきところへとアゲハは帰る。

「一週間どうでしたか？」

「とても楽しかったです。ジーンさんも、町の皆さんも良くしてくださって……」

「町の皆さん？」

「どういうことだ？ と、小次郎は怪訝顔をジーンに向ける。

「すまねえ、途中からどうにも一人で匿うのは無茶になってきてな。報酬の半分を使ってフリーの連中丸め込んだのさ。まあ、結果としては良い方に片付いたと俺は解釈しているがな……」

むしろ逆に、ハルドが提案しなかったほうがジーンが殺害するという意味においてアゲハの生存率は下がっていただろう。

「私としては、この娘が生きているだけで、けちのつけようなんて無いんです。いつそ殺してくれたって……」

小次郎はアゲ八を見やる。その表情にははつきりとした感情は無かった。色んな思いが錯綜するが故の曇り。そんな印象を受ける。

ジーンは、小次郎の様子が気になったが、もうこれ以上アゲ八に関わることも無いので、そのことは口にしないことに決めた。

「さて、世間話はこれぐらいにして、残り三五〇万ガルド渡してもらいますよ」

「そうでしたね」
小次郎は苦笑すると、手を叩き、箱を出現させる。地面に落ちた

その箱を拾い上げ、砂埃を落とすとジーンに手渡す。
「残りの三五〇万ガルドです。どうかご確認ください」

「分かった」
ジーンは箱を受け取ると、それを開き、札束を取り出し前と同じく慣れた手つきで鑑定を行っていく。一連の作業を終えると、箱に

札束を戻し自らの荷物の中に突っ込んだ。
「報酬、確かに受け取った」

「ジーンさん。本当にありがとうございました。正直あのような依頼内容で受けてもらえるとは考えていなかったんです」

小次郎が、手を差し出したのでジーンが握り、振る。
契約終了。そんな意味を内包した握手だった。

「ふん、俺だつてただ単に金が無かったから引き受けたに過ぎない。偶然が重なっただけのことさ」

「あたしは、その縁を信じたいですね」

小次郎は、顎の下の無精ひげを撫でながら言う。ジーンはそれを聞いて苦笑した。

「勝手にしろよ。まあ、そんなもの俺も少しは信じてみたいがな」
ジーンは傍らに置いておいた槍を手にとり、肩に掛ける。

「それじゃあ、俺は行かせてもらうぜ。じゃあな、アゲ八。元気でな」

「はい」

ニコリと、いつもと変わらない愛らしい笑顔。

ジーンは、はにかむ様に片手を上げると踵を返して町へと戻っていく。

しばらくして、地面の底から鳴り響く轟音。

奴らも、元の場所へと戻っていく。ジーンは、振り返らずにフロンティアを目指して歩き続けた。

再会

突如として、耳を劈く轟音が鳴り響く。

これは、地鳴りの音では無く盛大な爆発の音だ。

背部から強烈な突風が吹きつけ、ジーンは思わずつんのめったが踏ん張って受け止める。

明らかな違和感。

アンナという女魔術師が使う魔術に爆発を伴うようなことはありえない。後ろを振り返ると、先ほどジーンが居た場所が巨大な炎に包まれて燃えていた。

「なん……だと？」

ジーンは、自分が持っていた荷物をその場に置き、槍だけを持って燃え盛る場所へと走り出す。

近づくにつれ、徐々に魔術的な術式によって生み出された炎が失われていく。

先ほどの白装束の連中は地面に倒れ伏していた。小次郎もまたその陣営の中に居た。

彼は、剣を抜き立っていたものの、力尽き、他の白装束と同じく倒れ伏した。だが、その中にアンネとアゲハの姿は無い。

最後に炎の中に立っていた人物は全員で三人。

一人は黒く長い髪を持つ女。メガネをかけ、白のローブを身に纏っているのだが、白衣のように羽織り、その下にはごく普通の平服。まさに研究者と言ったいでたち。

一人は赤茶の髪の男、上背は高くは無いのだが完全なまでに鍛え上げられ、引き締まった体。上半身は裸の上に長い外套を羽織ってその顔には不敵な笑みが浮かんでいる。

最後の一人は銀髪の男。ジーンにとってそいつは見知った顔であった。

「ソル……ファ……？」

上背はジーンと同じぐらいに高く、艶めくような長い銀髪に、ア
クセサリーとなつてゐる最高の魔術礼装の数々、その手には先端の
歪んだドリルドの杖が握られている。

アゲハは、ソルファの小脇に抱えられて眠つていた。

「久しぶりだなジーン」

自信に満ちた、見方によつては見下しも取れるソルファの態度。
その立ち振る舞いはまさに五年前、決闘の末に分かれたジーンの
友、その人だつたと一瞬にして確信に至つた。

「久しぶりだと切りかえしたいところだが、お前その娘をどうする
つもりだ？」

「なに、ちよいと僕らの目的に協力してもらつただけだ。悪いように
はしない。お前達にファミリエを監視につけて一部見させてもらつ
た。ジーンお前はお前の仕事をしろよ。あとは金を酒場の連中に手
渡すだけ。そうだろう？」

「いいや違うな」

ジーンはかぶりを振る。そして、ソルファをにらみつけた。

「俺はそのガキをそこに倒れてゐる連中の元に返すことが仕事だ」

小次郎達を指差し、それから槍の穂先に付いた鞘を抜き放つ。

「俺の仕事はまだ終わつてねえ。そいつらが目を覚ますまで、その
ガキ俺が預かる」

ジーンが槍を一回転させた後、ソルファに向かつて構えると、ソ
ルファは苦笑した。

「やれやれ、君は相変わらず融通が利かない。というよりかバカだね。
いいだろう。君の仕事が終わつて、その仕事は僕に引き継がれたと
いうことを教えてやろう」

ソルファは小脇に抱えていたアゲハを、無造作に放ると赤茶の髪
の男がお姫様抱っこをするような形で受け止める。それからソルフ
アもジーンと同じように、杖を構えた。

「始めようじゃないかジーン、五年前とは何もかもが違うというこ
とを、教えてあげるよ」

「へっ、黙れよ」

ジーンがソルファに対して突進を仕掛ける。

「穿て」

ソルファの杖が瞬き、三つの火球が出現し、ジーンへと襲い掛かる。

予測していた攻撃。

ジーンは、急減速すると避けることはせずに、槍を回転させて飛来する火球を受けにかかった。

「くっ！」

だが、受け止めた火球の威力が高く押し込まれてしまう。

明らかに呪文詠唱を破棄した下位の共通言語魔術のはずなのに、予測しているランクよりも上の攻撃が襲う。

断続的に続く攻撃を、ジーンは受け止めるだけで精一杯になってその場から一切動けずにいた。

「ボクシングにおける効いてしまうジャブってのがあるだろう？

僕が今使っている術もただのジャブに過ぎない。君が五年前には簡単に弾く事ができたものと全く同じ術式なのさ」

「くっそ、冗談じゃねえ」

ジーンは、適当に防御の動作に見切りをつけると、いったん後ろに飛びのき、ジグザグに動きながら接近を図る。

だが、ソルファの繰り出す火球の雨はことごとくジーンを追撃し、接近すらままならない。それどころか、逆に押されて距離を離さなければならなかった。

回避を続ける動作の中で、一つの火球がジーンの大腿に直撃した。走る激痛。

崩れ落ちるようにそのまま転倒、そこへも襲い掛かるソルファの火球。

ジーンは転がるように回避し、立ち上がると再びソルファの方へと向き直る。

ソルファは十歩か二十歩程度の距離にいたはずだった。

それが今やついい目の前に居た。
つと杖を上げジーンの腹にそつと押し付ける。

「認めなよ」

憐憫をこめてソルファがそう言ったとたん、杖の先端が瞬き、ジーンの腹で爆発した。

「ガッ……は！……」

腹の底から搾り出されるようにうめき声が漏れ、それとともに喀血する。

乾いた地面に血だまりが出来上がり、ジーンはその上に倒れ伏した。

「今は僕の方が圧倒的に強い」

ソルファは、倒したジーンに残心すると仲間の所へと戻っていく。
「くっそお……」

目の前の男は五年前の神童と謳われた時期とは全くと言っていいほどの実力。ジーンはその差に齒噛みするばかりだった。

自分は衰えたのだ。自分が自墮落にこの街で暮らしているときに、目の前の男は血反吐を吐く努力を一切怠らなかつたのだろう。

ジーンは実のところ、完全に動けないわけでは無かつた。

だからこそ、相手が完全に油断しきつた時の不意打ちにすべてを賭ける。

あるもので勝負するのなら、汚い手などいくらだって使ってみせる。それがジーンが唯一ゼクスで覚えたことだった。

ジーンは音も無く立ち上がると、仲間の所へと戻っていくソルファに向けて突進する。

「そうそう、そういうの無駄だから」

ソルファが振り返るとジーンに杖を向ける。

「なっ」

「おしまい」

一瞬にして光を帯び、いくつも火球を出現させ、そして飛来する。とっさのことに、ジーンは一切反応できなかつた。右に飛ぶこと

も、左に飛ぶことも出来ず火球は近づいてくる。

「どうやら賭けは外れてしまったらしい。」

悲しいかな、構えた槍の位置はソルファにはあまりにも遠く、飛来する火球が拡大した近くによってゆっくりに見える。

「止めて！」

第三の音が響く、するとジーンの目の前まで迫って来ていた火の球は突如として消失した。

「なん……だと？」

一度発動した術が消去された。

あの火球は既にソルファのコントロールを離れ、ソルファがキャンセルすることはまずもって不可能だ。槍を用いずにジーンがディスペルすることも不可能だ。

「……困りますね、こんなところで力を使われては」

「その人は既に私とは関係が無い人です。あなたは私が目的なのでしょう。ならばさっさと私を連れて行きなさい」

声の主はアゲハだった。

アゲハは今は抱きとめられている状態から完全に離れ、一人立っている。普段の笑顔は完全に消失し、凜としたたたずまいと、圧倒的な存在感を感じさせた。

「気丈な娘だこと。しかし、こんなところで力を使われては困ります」

芝居がかった風にソルファが言う。

「さてよ、お前らコイツの正体を知っているって言うのか？」

「ああ、そうだと」

ソルファは、ジーンに嘲笑を向けた。

「こいつはな、すべての魔術と能力をこの世に顕現させるために存在する神の子なのですよ」

「神の子……だと」

「この娘はな、すべての能力と魔術、それらのこの世界への顕現を無意識下に司る門なんだよ。さっきのディスプレイは簡単な話、無意

識にこの世界に対してのアクセスを一方的にキャンセルしたのだよ。もつともこの子本来が力を使えるという話ではなくてね、今のは例外だ」

ジーンにはソルファの話聞いても全く信じられなかった。

「だからこそな、コイツの頭の回路の中には世界のすべてを繋げるための鍵が眠っているんだよ」

当たり前前に思えていたその事実全てが、アゲ八によってつながれていた。お前の立っている世界はこの娘に全て賭けられている。そんなことを喉元に突きつけられているかのような気分だった。

「僕たちはこの娘の回路を完全に解析してな魔術師を完全なものと成す。それが我々《狼牙衆》の目的さ」

「バカな！ そんなこと誰が望むって言うんだ！ てめえの望みのためにコイツを壊すって言うのか！」

「そうさ、分かっているとも。僕は皆が望むまま作り上げるまでだ。その望みに前に娘つ子がどうなるうと知ったことではない」

「ちったあ、見ごたえのある奴だと昔は思っていたんだがな……」
ジーンが体に残っている僅かな力を振り絞る。

もはや立っているのがやっとと言った状況だったが、ジーンはそれでも槍を構えた。

「このバカ野郎が！ 俺がそんなことさせやしねえ！ 全力で叩き潰してやる！」

アゲ八を取り返す。ただそれだけのために。

「やれやれ」

ソルファがジーンの方を向き直ると、再び歪んだ形状の杖を構える。

「おやめなさい！ せつかく私が助けた命をドブにすてるおつもりですか！」

「アゲ八、お前は黙ってる！」

「いいえ黙りません。魔術もロクに使いこなせないあなたがこの私を救ってみせる？ 笑わせないでください。あなたの命が助かった

のは偶然。あなたは、せいぜい大人しく私にもらった命を大切に使うのです」

アゲハが尊大な口調でジーンに言い放つ。ジーンは構えたまま視線だけアゲハに向ける。

その顔はその声の調子とは裏腹に、今にも泣き出しそうだ。

だが、それでも自分を奮い立たせて気を張ってそういう態度を取っている。そんな印象を受けた。

「ふざけんな！ 目の前のコイツを黙って見過ごせるほどのアホじゃないんだ！」

「良いから止めて！」

アゲハがほとんど悲鳴に近い声で叫んだ。

ジーンは舌打ちをすると、槍を下す。

ソルファも同じように杖を下すと、踵を返しアゲハたちの下へと戻っていく。

「では行くうか」

「はい」

ソルファがアゲハに手を延ばし、アゲハがその手を取る。

研究者風の女が赤いカプセルを取り出し、それを割るとそれを飲み下しそして指を弾く。

轟音と共に、アンネが作り出した門とは別の形状の門が出現し、その門が開く。

ソルファたち一行がその中へと消えていく。

もはや、振り返る価値もないと誰もがジーンに注目することなく門の向こうへと消えて行った。

門が地面の中へと消え、後には小次郎達の屍だけが残った。

不意に、体の内側から血が沸騰するような感覚をジーンは覚えた。体はその反応に呼応する。拳を握り締め、歯茎から出血するほどに歯噛みする。

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！」

誰も居ない荒野に、その声だけが轟いた。
あまりの不甲斐なさ、あまりの怒りに涙が出た。

歩く分には全くと言っていいほどに問題は無かった。

だがしかし、それは歩くことに限定したことであり、槍を杖に、息も絶え絶えに荒野を歩いていく。町まで戻ってくるのに、普段の何倍もの時間を要した。

フロンティア・ゼクスの門を潜り、酒場へと戻っていく。

日はついぞ沈み、既に夜となった町。

酒場には一人頭十万ガルドそれを受け取るために奴らは全員居るはずだ。仕事は最後まで遂行するほかあるまい。

カラン、とベルが鳴る音とともにドアが開く。

薄汚れた酒屋の客席には、あの日にお目にかかった連中すべてに加えマルロがいた。

連中はジーンが登場すると一斉にジーンの方に目を向ける。ジーンはその視線を受けながらも前に進み一番近くのテーブルの前に立った。

「アゲハの依頼者達からコイツを受け取ってきた」

ジーンは箱の中から小次郎に受け取った三五〇万ガルドをテーブルの上に積む。

「これからコイツをお前らに配る。当初の契約通り一人十万。名前をよんでそれから順々に配る。だが、その前に聞いてほしい事がある」

ジーンはテーブルの横に立つと、とたんに床に膝を、手を、額を付けた。土下座だ、僅かに床に積もった砂利がはねて口の中に入る。ざらつく舌触りは、血の味がした。

「まだこの仕事は終わっていない。アゲハが連れ去られたんだ。だけど、俺一人であいつらに立ち向かっていくことは無理だ。敵は恐らく大きい。だからアイツを助けるためにお前達の力をどうしても

貸してほしいんだ」

何故ジーンは自分がそうしたのか、自分でも実のところ良く分かっていなかった。

それは自分に対しての弱さに対しての怒りなのかもしれない。だが、実のところアゲハに突き動かされているところが圧倒的だった。あの泣きそうなおアゲハの顔を見た時に、こみ上げてきたどうしようもない怒り。

ただ、守れなかった。その事実への怒り。それがジーンを駆り立てていた。

ジーンの慟哭にも似た叫びを聞き、皆が黙り込む。

「……そんなのゴメンよ」

その沈黙を裂いたのはリナだった。ジーンはそれでも一切床につけた頭を上げようとはしない。

「ここにいる連中は、そりゃあアゲハのことは大好きよ。だけど、たかだが10万ガルド程度で切り立てする道理は無いの。それぐらの賢さは皆持ち合わせているのよ残念ながらね」

抑揚は無く、淡々とリナはジーンに告げる。他には誰も何も言わず酒場はいつもに比べて、とんでもなく静かだった。

「頼む」

「その条件は聞けない。ビジネスとしても最低。だれも聞きはしないわよ」

ジーンはやはり頭を床につけたまま上げようとはしない。

「ジーン一つ仕事があるのよ。ここに集まっている連中はアンタが持ってくるって話もあるけれども、本命はその仕事のために集まった連中なのよ」

なるほどマルロが居たのはそういう訳かと、ジーンは納得した。

だが、納得したからと言ってどうと言うわけでもない。

「どう、ジーンも一緒にやらない?」

「断る」

「あらそう。ならアンタは、とりあえず連中に渡す十万ガルドの仕

分けでもそこでやっていければ良いわ。それじゃあ、マルロ説明を始めちゃって」

「ああ」

「ちっ、お前らに頼もうと思った俺がアホだったよ！」

ジーンは顔を上げると、膝についた砂を払い立ち上がり、踵を返す。

「早速、依頼について話させてもらっ」

マルロが、もったいぶるように咳払いする。

「依頼の概要は、『狼牙衆』への襲撃と、少女アゲハの奪還だ」

「それって……」

ジーンは酒場の連中へと向き直る。どいつもコイツもがにやついた顔で居た。ハルドもリナも、酒場の店主も、マルロも皆がにやついた顔をジーンに対して向けていた。

「ジーン早とちりとは、損を産むものだ」

ハルドがにやつた顔をしながら、低い声で言う。その口調はどうか愉快気だ。

「ソルフェリア・アージュが企んだ事っていうのは、能力者サイドにとっても魔術サイドにとっても不都合極まりないってことだ。故に現場に近い俺たちに白羽の矢が立ったと言っ訳だ」

「お前ら……。ひよっとして全員参加するのか？」

その場に居る全員が一同に笑った。

「何が可笑しい？」

「アンタね、何も分かってないわね。私達は情では動かない。けれど、それがビジネスでならば動く。自分のためにね」

「ビジネス？」

ジーンが怪訝顔をした。

「そうだ。ジーン、お前は知らないだろうがこの事件屋、フロントエリア・ゼクスに託された仕事のうち至上最高の報酬額。一人頭なんとびっくりの三百万ガルド」

マルロが契約書を取り出し、報酬額の欄を手で叩きその場にいる

皆に示す。ジーンはもうここまでくると半ば呆然とする他無かった。「ここに集まったのはどいつもこいつも、三百万ガルド欲しさに集まったバカどもだけよ」

「さて、そこで本題だジーン」

「アンタはこれに参加するのかしないのか？」

マルロがジーンの前まで来ると、テーブルの上に依頼の契約書一枚とペンと置いていく。

「そら、勿論」

ジーンはペンを取ると、契約書にさらさらと名前を書いていき、そして最後にマルロに手渡した。

「参加させてもらうぜ」

おお、と場内が僅かに沸く。

「その話、あたし達にももらえますかね？」

カランとドアに取り付けられたベルが鳴り、新たな客が入ってきた。

どちらも白の高級なローブに身を包んでいる。

一人は異国の剣士風の男、もう一人は人形染みた無表情をした魔術師。

小次郎とアンネの二人だ。小次郎はアンネの肩に支えられて辛うじて立てているという程に損傷は明らかだった。

「お前ら、生きていたのか」

「ええ、おかげさまでね」

青くなった顔で小次郎が答えると、小次郎はアンネが引いた椅子に崩れ落ちるように座りこむ。

「アンネは襲撃の瞬間に、逃げてもらって。その後で伝令を出してもらったんです。だからあいつらが襲撃したあとでこの速度でこの仕事の依頼が入っていると言う事は、その成果なんです」

「本当か？」

アンネが頷く。小次郎の様子ギリギリさ加減で気が付かなかったが、アンネも相当調子が悪そうだった。

「だけれども、この襲撃は所詮奴らが緊急で出しただけの苦肉の策に過ぎない。両国の本隊がソルフェリアたちに襲撃をかけるまでには、あまりに時間がかかりすぎる」

「要するに俺たちに与えられた役割とは何だ」

ハルドが言った。小次郎はハルドの方を向く。

「かませ犬です。連中は基本的に勝てる戦いしかしたがりません。ここに居る皆で襲撃をかせさせた後に、しかるべき戦力を派遣し、撃滅する。それが目的だと思われます」

「なるほど、それでこの伝令の速さか」

「けれども、それでは遅すぎるんです。連中が実行するとしても、それは最低一週間、悪くするとさらに何週間も時間がかかってしまふんです。その頃にはソルフェリア達は目的を確実に果たしていると思われます」

「それで俺たちだけで事を成す必要があるとな」

「はい、その通りです。正直かなり分が悪い勝負ですが、それしか方法は無いんです」

酒場の中はその事実を突きつけられても、驚くほどに静かだった。ジーンは苦笑がてら苦し紛れにポケットからタバコを取り出し、それに火をつける。

ここに居る連中の腹は、もはや完全に決まっているといつてよかった。小次郎も、周りを軽く見回すと、ジーンと同じように苦笑した。

「問題はどうかやって事を成すかね、それだけにかかっている。そうよね、みんな？」

リナが辺りを見回しながら言うと、全員が一齐に「おう」と答えた。

「大した人たちだ。アゲハを守るためだけに組織されたあたしたちですが、感服せずにはいられない。そうだね、アンネ」

「はい」

と小さく答え頷くアンネ。無表情の中にもかすかに、笑みのよう

なものが見て取れた。

「策は有るのか？」

「ええ、まあ。一応はね」

と、小次郎は人懐っこい笑顔で答えると、作戦の概要を話し始めた。

「敵の居場所はこの町から数十キロほど離れた溪谷。ここまでは皆さん知っていることでしょう。そこに作られた敵の拠点にいかにして叩くか？ それが問題なんです」

小次郎は、袋の中からテーブルの上に数点の写真をばら撒いた。

「敵の拠点は、防衛が楽な構造をしているのですよ。もともとある谷の形を利用して、防衛を行う。それによって、守るのを楽にしているのです。ですが、そこでこの谷を逆に利用することによって陣形を切り崩す。第二に、一気に敵施設内部に突入し、施設最深部の装置の破壊、あるいはアゲハを奪還する。たったこれだけです」

「まあ要するに、何とかして敵の拠点まで入ったら後は目的だけ考えれば良い訳ね？」

リナが言う。

「そういうことです。儀式が失敗に終われば敵は目的を失い、我々の勝利となるわけです」

「なるほどね」

「さて、説明も終わりましたし誰が何をやるのかさっさと決めてしましましょう」

小次郎がそう言ったとたんによるけ、小次郎は突然地面に倒れた。腹部から漏れ出た血が白のローブの一部分を赤く染め上げており、その血は酒場の床へと寝食する。

「小次郎さん」

とっさに近くに待機していたアンネが駆け寄り、小次郎を抱き起こす。

「早く医者を呼んで下さい。この人かなり無理をしていたんです」
無表情で押し殺した声であるも、彼女は相当に感情的になってい

るとジーンには見て取れた。

「アンネ、あたしのことは良いです。とにかく、急がなければなりません。さっさと決めてあたしも行きます」

青い顔をしながら、苦しい微笑を浮かべアンネに答える。

「小次郎。お前は休んでいる。ソルファたちとの戦闘は最後の方だけ見ていたが、お前はもう死んだも同然なんだ」

「大丈夫です。これでも結構な修羅場は潜ってきているんですよ。パン、パンと二つの大きな拍手。」

「そこまでだ。作戦の実行は明日の昼間に決行する」

ハルドが三人が争っている所まで来ると、きっぱりと言い切った。三人は呆然となって動きを止めた。

「まず、小次郎と言ったか、致命的では無いにしろあなたは怪我がひどすぎる。相当な腕利きだろうから、傷の治りは早いだろうがそれでも然るべき処置は必要だ。それからお前」

とハルドは、アンネを指差す。

「お前は明らかに魔術を使いきている。規模の大きい魔術を使いきすぎたな。お前にも休養は必要だ。それから最後にジーン」

「俺か？……俺は全然問題無いが」

ハルドは盛大にため息をつく、と、ジーンの肩に手を置く。

「お前も肉体的に相当逝っちゃまっているのもある。だが、それ以上にお前はまず頭を冷やせ。悔しいのは理解できるが、それだけではダメだ、それはアンタ達2人も一緒だ。すでに無理をしすぎている」
悔しいことに三人ともハルドに対して何も反論することは出来なかった。

ハルドはそこでさらに大きな拍手を一つ打った。

「見たところお前ら三人は有用だ。だからこそ、使える時に使えるようになっているように今は休んでくれ。時は一刻を争うのは確かだが、戦力を失うほうが苦しいんだ。俺たちは勝つ。そうだろう？」

苦笑がちにハルドの言う。小次郎は一つ苦笑した。

「ええ、そうですね。それならばあたし達はちよいとばかり休ませ

てもらいます」

「そうしてくれ。今日は十万ガルドをお前らに配って解散だ。明日の午後〇時に再びここに集まってくれ」

酒場に居る皆は、それぞれのいらへを返すとぞろぞろと、ジーンが札束を置いたテーブルの前に列を成し、ハルドが十万ガルドずつにして配っていく。

ジーンはその光景が段々と薄らいでいき、やがて意識が曖昧になって地面に倒れた。

（ちっ、ハルドの言った通りじゃねーか。まあ良い。今は少しばかり眠るとするか）

意識は薄らいでいき、やがて真っ暗となったが、ジーンは恐れはしなかった。

決戦

目が覚めた時にはもう随分と日が高くなっていた。

ジーンは上半身裸にされ、酒場の床の上に横たわっていた。深い眠りで重くなつた体を起こすと、肋骨の部分にギプスと包帯が巻かれていた。酒場に集まつた連中はあれやこれやと準備に急いでいる。「起きましたかジーンさん」

「まだ少し眠いがな」

あくびをしながら起き上がると、横に置いてあつたシャツを羽織る。小次郎は異国風の服に身を包み、椅子に座っている。腰にさしてあつた剣はテーブルの置かれていた。

「幸い、あたし達の怪我は大したことは無かつたようです。ジーンさんは奇跡的に肋骨一本で済んだそうです」

「何故だかな。どうも昔から死神には嫌われてんだ。どう考えたって軽すぎだろ？」

「あたしも似たようなもんです」

小次郎は眉をハの字に困つたように苦笑した。

「アンネとか言つた魔術師はどこ行つた？」

「とつくに起きて、ハルドさんつて方と作戦会議中です。彼らは今回ペアで行動しますからね」

「そうかい」

そう呟くと、ジーンは辺りを見回す。今回の仕事が大きいため、町中にある資源やら物資やらを集める必要があるのか、酒場にいる連中は準備に忙しそうだ。

「別にそんなに焦らなくても良いですよ。あたし達は今は休んでいるのが仕事みたいなですからね」

ジーンが落ち着かずそわそわしているのを分かつたのか、小次郎がたしなめた。

「分かつてるよ」

「ジーンさん、こいつを渡しときます」

小次郎が手を差し出し、ジーンは状況反射的に手を出す。掌の上にひんやりとした感覚。

見ると、ナイフのような形の金属に紐を通しただけのシンプルなネックレスがあった。

「これは何だ？」

「まあいわゆる魔道具です。付けていると少しばかり、魔術や能力の通りが良くなるとかなんとか。お守りみたいなもんですわ。昔、この仕事に就く時にアゲ八から貰ったんですよ」

「何故俺に渡す必要があるんだ？ アンタが持つてるよ、アンタがアイツの守り手だろう？」

受け取ったものを付き返すと、小次郎は手を上げてそれを拒んだ。「まあ、聞いてくださいよ。あたしの能力におけるイドはね、一度接触したものの能力をかなりの精度で鑑定できるんですよ」

能力にも魔術と同様に二種類存在する。誰もが使ええるエゴと、個人だけが使うことが出来る能力のイドの二種類。

ジーンは最初に小次郎に会ったときに、握手一つで小次郎がジーンの力を見やぶったことを思い出した。

「それで、ジーンさんにはもし仮に一对一でソルフェリアと戦うことになったら、戦ってほしいんですよ」

「それとこれと、どう関係があるんだってんだよ」

ジーンはいらだたしげに言うのと、タバコに火をつける。煙を吸い込むときに、わき腹がきしむような感覚がし、むせた。

「言ったでしょう？ 触れただけで相手の力が分かると。これは物質を通して同じでしてね、あたしにはソルフェリアの実力があたしのそれより圧倒的だって分かつちまったんですよ。だからあたしにやあ無理なんですわ」

「げほっ、げほ、だからってなんで俺なんだよ。リナとかハルドが居るだろ？」

煙にむせながらジーンが言う。

「ハルドさんは、アンネと一緒に後ろでの大きな仕事があります。リナさんもかなりの強者ですが、正直分が悪い。ですが、ジーンさんにはまだ使っていない部分が存在しているようなんです」

「よせよ。見えない何かに全部賭けるなんて馬鹿げたことをするなんてな」

「あたしは見えない方が良いことも沢山あると思うんですよ。なまじつかあたしの能力が能力ですしね。縁って言うんですかね、そういうの信じてみたくなるんですよ」

「昨日、アゲ八にも似たようなこと言われたぜ」

ジーンは舌打ちすると、タバコの煙を深く吸い込み吐き出す。紫煙はしばらく空中を漂い、風に流されて外へと消えた。

勝てる勝てない、それ自体はジーンにとっては些末だった。ただ、もう一度、あのいけすかない旧友を殴り飛ばして、アゲ八を取り返す。

言われずとやるつもりだった。

「やるぜ。小次郎さんよ。ソルファの野郎、しばらく会わないうちに随分捻じ曲がっちゃったみたいだしな。一発ぶちのめさないと気がすまねえんだ。それにな、アイツへの恩もある」

アイツとはアゲ八の事だ。小次郎はそれが分かったと、無精ひげをなぞりながらにやけた。

「なんだ、あの子に随分と感化されちゃってるじゃないですか。ここに居る人たちもそうですが」

「言うなよ、それは言うな。ここに居る連中はアゲ八にもらったものを信じられないからここに来たようなもんだ。だから絶対にそれは言うな」

「分かってますよ、あたしもそういう感じでしたからね」

「ふうん、じゃあ話してみるよ。まだ時間はあるだろう？ いい暇つぶしだ」

「構いやしませんよ。それからジーンさんから話しては貰えないですかね？ この一週間のこと」

「良いぜ」

「では、とりあえずタバコを一本貰えますか？ 結構痛い話なんで」
ジーンは小次郎にタバコを一本手渡し、火をつける。小次郎はそれを大きく吸い込んで上に向けて煙を吐き出すと、普段のぼんやりした目を閉じ、それから暇つぶしの長い話を始めた。

空は晴天。

いつもと同じ、澄み渡るような晴天。風は吹き荒び、砂が舞い風とともに吹きつける。

馬車は全てで十台、運搬用の安い作りに、ほんの少しだけ戦闘用に改良した程度の粗末な代物。

馬車はゆっくり進んでいくが、唐突に先頭のリナと、ジーンと、小次郎の三人が搭乗した馬車が止まる。

「うし、野郎ども覚悟は良いか！」

リナが立ち上がった後ろに向かって叫ぶと、後ろに続く馬車から喚声上がる。

「全員突撃！」

そうリナが叫んだ瞬間、小次郎が馬に手綱を打ちつけ馬を走らせる。その後が続くように次々と馬車は走り始め、矢印状の編隊となつて突つ走っていく。

やがて、写真で見た敵の本拠が奥に小さく見え始める。

更に馬に鞭を打ち、速度を上げて敵本拠へと突つ込んでいく。

敵の本拠がいよいよ近づいてくると、真正面から赤、青、黄色の光の球が次々に飛来してきた。

敵の元素変換系の共通言語魔術による砲撃。

「リナ、出番だ」

「分かっているわよ！」

馬車の上で中腰を保っていたリナが完全に立ち上がり、両方の手を広げて前に突き出す。

「でかくて頑丈な、盾」
イメージを一瞬で作り上げ、己のイドを開放し、それを具現化する。

詠唱とは即ち、自己暗示であることは能力者も魔術師も変わらず、その暗示が一瞬で可能なのであれば詠唱の時間は短くなっていく。
リナの術式のサイズは大きいには大きいのだが、構造がシンプルであるためこの一言だけで術式の発動には十分だった。

飛来した元素変換系の魔術が次々と見えない壁にぶつかって、空中で爆発する。

「この分なら楽勝ね」

「次来るぞ」

更に数を増し、次々と襲い掛かる光球達。

だが、しかしそのどれもがリナのイドである巨大な盾に弾かれて爆散する。

飛来する光球の中に倍以上の大きさの光の球が飛来し、盾に弾かれる。

「くっ！」

リナが歯を食いしばって、攻撃に耐える。

他の小さな爆発とは明らかに違う爆発の規模。共通言語の魔術ではなく、元素変換を個人言語とする魔術師による攻撃。

「耐えろよ。ここでお前が一瞬でもこの盾を消せば、その瞬間に何もかもが終りだ」

「んな事は分かってるわよ！」

リナは歯を強く食いしばると、盾の強度をより強く上げていく。
透明だった盾が少しだけエメラルド色を帯びてくる。

それでも共通言語の中にまぎれて飛来する、巨大な赤の光球。

どちらの攻撃もリナの盾の前に弾き飛ばされるのだが、巨大な赤の光球が直撃するたびにリナは苦悶の声を上げた。

リナが張った術式は、もともと範囲の広いものではない。

それを無理やり押し広げて盾とするため、強度はそこまで褒めら

れたものではない。

位の低い共通言語魔術ならまだしも、個人言語を防ぎきることは
厳しい。

（まあ、後は根性って訳ね）

リナはそう腹をくくると、視界にはまだ捕らえることが出来ない
魔術師に勝負を挑むつもりで気合を入れた。

何度と無く飛来する巨大な光球。

リナが形成した盾にぶつかると、リナは盾の出力を瞬間的に
上げてことごとく防いでいく。

（やれるもんなら、やってみろ！ アンタは私が直々にぶつ飛ばし
てやる）

リナは心の中で、巨大な光球をぶつ放している奴を挑発した。

馬車は疾走を続け、敵の拠点である洞窟を中心とした要塞が明ら
かになってくる。

（いた）

一等大きな光球を繰り出していた魔術師が見える。

その瞬間。

雷鳴が轟くが如き轟音が鳴り響き、崖の一部が剥がれ落ちて、
魔術の砲撃を放っていた連中に襲い掛かる。

連中も流石にその事態には気が付き、砲術が止まり逃げ始める。

だが、それでも間に合わずおよそ半分以上の魔術師が巨大な岩の
下敷きになって消えた。

漏れなくリナがぶつ飛ばす気満々でいた、あの魔術師も漏れるこ
となく下敷きになっていた。

「ハルドのド畜生が！」

リナは盾を保ちながら、遠くに居るハルドに向かって叫ぶ。

だが、いらへは無く、リナは盾の形成に再び集中した。

もはや半分近くに減らされた魔術の砲術による攻撃は恐れるに足
らず、馬車は前進を続ける。

ついにその魔術砲術を行っていた魔術師に近づいていく。魔術師

はまだ馬車を墜とせると考えているのか退こうとはしない。

そいつらをリナはまとめて、盾で弾き飛ばした。

魔術師は遠くに吹き飛ばされ、ジーンたちはいよいよ敵の拠点の中に入っけていき、そこでようやく馬を飛び降り、皆がそれぞれの獲物を取ると突撃を仕掛ける。

洞窟の奥から、建物の中から、周囲から一斉に敵がこつちへと向かってくる。

「気合入れて行くぜ！」

ジーンは槍を軽く回転させると、構え、駆け出す。

小次郎と、リナが後に続き、他の連中がさらにその後続く。

次々と魔術師が襲い掛かってくる。

ジーンは、全て倒すとなると時間がかかると判断し、相手の攻撃を受け流してはなぎ払うという戦術をとって前へと進んでいく。

小次郎は、相手が攻撃する前に相手の懐に飛び込み、剣を抜き様、一太刀で切り伏せる。

リナは盾にしていたものを拳サイズに収束して敵を弾き飛ばす。

「後続くぞ！」

「おお！」

ジーンたちの後続く、事件屋の仲間たちも次々戦闘に入っけていく。

ジーンたちが突破口を切り開き、それを後に続く連中が固め、前進していく。

敵が前から後ろからも襲い掛かってくるようになってきたとき、いよいよ乱戦の様相を呈してきた。

だがそれは、ジーンたちにとっては作戦通りでありジーンたちは前進を続けていく。

「ふはははは！ 現れたな！ 俺が倒すべき敵が！」

敵の本拠である洞窟の上に一人、腕組みをする人間がいた。

そこに居たのは赤茶の髪の男。上背は高くは無いのだが完全なまでに鍛え上げられ、引き締まった体。上半身は裸の上に長い外套を

羽織り、腕組みをしていながら哄笑を上げる。

一回転しながら飛び降り、ジーンたちの前に立ちはだかる。

「お前達は悪だ！ ならば悪は俺の手でブガッ！！」

名乗りを上げている最中で赤茶の髪の方が弾け飛んぶ。

リナが飛び蹴りを顔面にお見舞いしたのだった。

「このバカ意外とやりそうだから、私が引き受けるわ。あんた達はさっさと先に行つて」

「分かつた」

小次郎とジーンが頷くと、赤茶の髪の方を飛び越えて洞窟の中へと消えていく。

「クソ逃がすかよ」

赤茶の男が起き上がりジーンたちを追いかけようとする。だが、リナはもう一度その男の頭を蹴り飛ばした。

「アンタの相手は私よ。あいつらを追うなら私を倒してからにしないさい」

「このアマが」

ゆつたりとした動作で赤茶の髪の方が立ち上がり、膝についた砂を払う。

「お前ら全員をよう、このカーリイ様がギタギタにぶつ潰して決めてやるうと思つたのによお、てめえのせいで台無しなんだよ」

「あらそう、私はあんたなんか眼中に無いわ、さっさとアンタを倒してジーンたちに合流したいの」

「舐めんじゃねーぞこらあああああああ！」

その声は叫び声と言うよりも獣の咆哮だった。

カーリイは裸の上に羽織っていた長い外套を脱ぎ捨て、頭を押さえるとうめき声を上げ始める。

「望むべき姿は本来の姿、仮面の中に眠る本来の姿。仮初めの力を捨て、本能のままに」

ほとんど精神疾患の患者の如く、うめきながら呟き続ける。能力者における本気の詠唱だ。

カーリーの筋肉が隆起を始め、ビキリ、ビキリと音を立てるたびに大きくなっていく。

「目覚めろおおおおおおお！」

全身から一斉に灰色の体毛が生え始め、爪が鋭く伸び、歯が犬歯に変化し耳は埋もれ狼の顔へと変貌していく。

現れたカーリーの姿はまさに月光の元に変化する狼男そのものの姿。

肉体強化系の亜種、肉体変形のイド。

肉体強化は人外の概念を仮面の内から肉体に宿す術、肉体変化とは仮面の内から人外の体そのものを体に宿す術である。

人ではない肉体を用いるハンデを負う物の、身体能力では単純な肉体強化を上回る術。

「まったく、獣姦趣味は無いんだけどね」

リナは頭を搔くと、肩を軽くまわしボクシングにおけるスタンダードスタイルで構える。

「求めるものは一等頑丈な拳。決して折れる事は無く、全て粉碎しうる最強の拳」

拳をぐつと握りこみ、ステップを数度踏む。

「目覚めなさい」

能力者がイドを開放する際に用いる定型文を呟く。すると、両方の拳の先端からエメラルド色の粒子があふれ出し、まるでボクシンググローブのように形どられる。

「ぐおおおおおおお！」

「いつくわよおおお！」

それぞれが一瞬のうちに間合いを詰め、拳と爪を交えた。

心拍のリズムは正常。

必要以上の興奮状態でもなく、必要以下の鎮静状態でもない。それがベストだった。

ハルドは、寝そべった状態で銃を構え狙いを決めると、照準を的確に合わせていく。

狙うべきは、岩壁の一点。

狙うべき周囲にはすでに何本かの弾丸で打ち抜いており、準備は万端。

ただ問題は、その一点に上手く当てる事が出来なければ術式の発動が完全にならないことであつた。

狙いを完全に定め、その場所から動かさないようにする。

だが、それでも僅かな手ぶれで右へ左へと、小さいながらも照準はぶれる。

「呪いあれ」

ショートワードを呟くと、ハルドは息を鼻から吸い、口からゆっくりと吐き出す。

狙いを定め、トリガーに徐々に力を込めていく。

息を完全に吐ききった時、スコープ内の狙いが完全に合致。ハルドはゆっくりと引き金を引き絞つた。

火薬が炸裂する音が響き渡り、その振動が木製のフレームを通して伝わってくる。

ハルドはすべての感覚から統合して当たつたと、撃つた瞬間に確信した。

空薬莖を吐き出し、残心。

スコープを覗き続けていると、予想通りに稲妻が落ちたかのように発光し、直後に轟音。

かなり大きな岩壁の一部分が剥がれ落ちて、下に居る魔術師達に襲い掛かる。

「ハルドのド畜生が！」

下からリナがなりたてる様な声が響く。

だが、馬車は依然として前進を続けており、自分の役割を果たしたのだと解釈し、起き上がる。

「成功ですか？」

無機質な声でアンネが言う。ハルドはそれに頷いた。

ハルドの銃そのものにはそれほどの加工はされておらず、精々上質な胡桃の木と、魔術を少しだけ発動できる程度に加工した鉄のその二つ。

問題は銃弾であり、ハルドが打ち出す銃弾にはハルドの個人言語の雷撃の術式が組まれてあった。そして、今の一撃は銃弾に込めた術式を一齐に発動させることによって、岩を落そうという作戦だったのだ。

「次に行くぞ」

「はい」

ハルドとアンネ、この二人は直接襲撃をかける本隊からは離れ狙撃によって岩壁を叩き落とし、後は狙撃によって突撃を仕掛ける味方を支援する役割。

ハルドが単独で狙撃を行い。アンネの個人言語によって狙撃する位置を変更するという役割分担を二人は持っていた。

アンネが切り株から立ち上がると、千年物のオークの杖を構えて目を閉じ、意識を集中させる。

「呼び出したるは、望むべく場所へとつながる扉。次元をことにする通路を通り、繋がる先は私が望む場所。出でよ、そして開け」

アンネの足元から、白い光が湧き、風が吹き上げアンネの長い銀髪を揺らす。そして地の底から轟音が鳴り響き、巨大な門が現れる。黒い門が鰐のようにゆっくりと開かれ、ハルドとアンナはその先に続く光へと駆け出していく。

やがて光が空けた先、新しい出口へとたどり着く。

出た先も先ほどの場所と変わることは無く、荒野の谷の上。空は青く、風が吹けば砂埃も舞い散る。

ハルドはそのまま谷の近くまで寄って下を眺めると、位置が先ほどよりより一層敵が近くなっていると見て取ると、予定通りにライフルの二脚を地面に立て寝そべって構える。

「よし、このままここから何発かぶち込んで援護する」

「わかりました。頃合をみて呼んで下さい。次の転送を行います」
「了解」

ハルドが腰からライフル用の弾丸を取り出すと、ライフルに装填する。

狙いを早めに定め、引き金を引き絞ろうとした瞬間、照準がぶれた。

地面の底から鳴り響く轟音、不意のことに立ち上がり後ろを振り返る。

だが、アンネが何かをした様子は無く、むしろ新しく起こったことに動揺している様子だった。

アンネが召還した門は未だに存在し、地面の底からアンネの門とは別の形状の門が出現した。

門の中から現れたのは黒く長い髪を持つ女。メガネをかけ、白のローブを身に纏っているのだが、白衣のように羽織り、その下にはごく普通の平服。まさに研究者と言ったいでたち。

ハルドはその女を見るなり、舌打ちをした。

「アンネ。お前、バベルズ・アトラスとか肉体強化系の魔術は使えるか？」

「……。あんな術、犬畜生にも劣る野蛮人が使う術です」

淡々とした口調で言っただけのアンネ。ハルドはため息をつく。

「おまえなあ、天才とかもてはやされて覚えなかつた口だろ？ 共通言語はある意味で魔術の基本の基本。全部使えるようになって初めて一人前だ」

「……自分が使っている術だって邪道の癖に」

アンネはハルドをにらみ付けると、ぼそりと呟くように言った。

無表情なのは、ただ単に感情表出が苦手なだけで、ハルドの言葉はどつやら効いている様だった。

ハルドは、頭の中で一緒に戦って目の前の女を打倒するという考えを即座に捨て去った。

「アンネ。お前はこれを持って門の向こうに行け。次の合流ポイント」

トで待っている。俺は後から徒歩で追いかける」

ずいと、ライフルを手渡すとアンネがそれを受け取り、ハルドを見上げる。

「良いんですか？ 魔術礼装と、低俗な銃器の組み合わせの品性の欠片の感じられないものですが、あなたにとっては大切なものなのでしょう？」

「……最初の所は余計だが、それがわかっていれば十分だ。さっさと行け」

「はい」

アンネが礼をすると、右肩にライフルを担ぎ、左肩にオークの杖を担ぐと自分が作った門の方へと消え去った。

研究者風の女は懐から赤い液体の入った試験管を懐から取り出すとその蓋を開ける。

ハルドは、一瞬で狙いをつけると抜き際に一発。

バン！

乾いた銃声。

ライフルと同じようにカスタムした自動拳銃での一撃。

研究者風の女が持っていた試験管が粉々に砕け散り、中に入った液体が白衣に飛び散る。

「何するのよ！ ハルド！」

顔に飛散した血を拭い去ると、女がひどく憤慨した口調で言った。

「お前の手の内は分かっているんだよ。どうせお前の個人言語の血液魔術であいつの後を追おうってんだろう？ イレーヌ」

「ちっ、もう空間転移系の魔術師の血液はストックが無いんでね、それを回収できるチャンスだって思ったんだけどね」

「外道が。どうせ絞り取るだけとって、殺すだけだろうに」

「どうとでも言いなさい」

ジーンと敵の大将であるソルフェリアが昔の親友だと言うことだったが、どうにも因縁はここにも付いて回るらしいとハルドは感じた。

この町に来る前、ハルドは魔術系の学院で研究者をしていた。目の前に立つイレーヌはその頃の同僚であり、また恋人であった。

随分昔に、研究者として対立し、別離し、ともに魔術連合国の学会からは追放されていた。その後のお互いの行方は知らない。

ただ、ハルドはその日暮を続けているうちにこの町にたどり着いたに過ぎないのだった。

「望むべく形は、自由自在の形。幾つもの線形を重ね繊維の如くよりあわせたもの。出でよ」

イレーヌは自分の懐から、銀色のナイフを取り出すと、右の白衣の袖をめくりあげ思い切りぶった切った。

右腕から、血が盛大に流れ落ち、その血がナイフの先端へと収束して行き一つの細長い鞭が形成される。

「その術、いつ見ても気分悪いよな」

「好きに言いなさい。私は私のしたい様にするまでよ。それに、あんたもさっさと術式を組み上げないと刻まれるだけよ」

イレーヌがじっとりとした嫌な笑顔を浮かべながらゆっくりと歩きながら近づいてくる。

「分かっているさ」

マズルフラッシュ。

銃を下げた状態から、一瞬で振り上げ撃つ。

真つ直ぐとイレーヌへと飛来する弾丸。

だが、当たる直前で赤い線が弾丸を切り刻み銃弾は空中で木っ端微塵に切り刻まれ、中に入った術式と共に小爆発した。

「無駄よ。そんな鉛玉如きで私の血の線は破れはしない」

見るに、イレーヌの周りには赤く細かい粒子の様なものが浮かんでいる。

ハルドは試しにもう一度銃弾を放ってみたが、やはり空中で切り刻まれて術式と共に消える。

恐らく、赤い粒子がセンサーとなって、体に直撃する分だけの攻撃をほとんど自動的に木っ端微塵に分解しているのだと判断。

「大人しく刻まれなさい」

もはやハルドに打つ手は無いと見たのか、イレーヌは明らかに勝利を確信したようであった。

「めんどくせえ。あんまり使いたくは無かったんだがな」

ハルドはイレーヌに銃弾を立て続けに切り刻まれたことには動揺せず、手を後ろでに回し新たな銃を取り出す。

それは異様に長い銃身をした黒いリボルバー拳銃だった。

「見たところ、口径の大きさが大きくなっているようだけど、無駄ね」

イレーヌが鞭を振るい、ハルドへと鞭が襲い掛かる。

ハルドは、射程圏外に逃れながら。

右手に持った自動拳銃で弾丸をばら撒きながら、左に持ったリボルバー銃の撃鉄を起こし、初弾を装填。

「望むべくは、貫くべき雷光。鉛の玉と運命を共にし、狙った先に呪い有れ。出でよ」

ハルドが左手に持ったリボルバー銃が雷光を帯びるかの様に瞬き始める。

完全に鞭の射程の外に抜け出すと、ゆっくりとした動作で狙いをつける。

「無駄よ、無駄！ アンタの魔術でもこの障壁は撃ち抜けはしないんだから」

もはや当たるまいと、イレーヌ鞭を振るうことも無ければ接近することも無い。ただハルドが絶望する様を見たがっているだけだ。

刹那。

凄まじい発光現象と共に打ち出される圧倒的な速度の光球。

肉体強化した動体視力でさえ捕らえることの出来ない光球が走る。それは、イレーヌの赤い線を貫通し、イレーヌの長い髪を僅かに

切断し、切れた分が宙に舞った。

「完全に頭を狙ったんだがな。狙ったお前をぶち抜ける絶好の機会だったのに、残念だ」

「……何ですって？」

イレーヌは今だに、何が起こったのかを理解していない様子だった。

慢心するのがコイツの悪い癖なんだと、ハルドは思い出した。

「銘々、雷光銃と言う。俺の個人言語である電撃系魔術と、銃器を組み合わせたものだ。こういつちやあれだが、撃つてもすぐに燃え尽きるわ、照準ぶれるは、無駄に発光するわ良いとこなしのクソツタレ試作品なんだがな。持ってきて正解だったな」

「はっ、あなたがこの私をその不完全な銃で殺すですって？ 笑わせないでよ、何かの悪い冗談？」

「そのための、左の自動拳銃だ。まあ、あれだボクシングと同じ要領でお前を倒せば良いんだよ。お前のその悪趣味な武器にやられるほうがよっぽど悪い冗談だな」

ハルドの切り返しに、神経質そうな顔立ちが歪み歯を食いしばり、ナイフを握る圧力が強くなって見ると見て取れた。

一方のハルドは冷静なもので、手の内で両方の銃を持って遊び、自動拳銃の方の弾倉を投げ飛ばし、新たな弾倉を投げ入れる。

「さて、昔、ぶっ殺し損ねたクソアマを今度こそ確実に棺おけに沈めてやりましょうかね。慈悲を込めて」

「それはこっちのセリフよ」

瞬間。

ハルドが雷光銃をぶっ放し、イレーヌ鞭を振り下ろした。

小次郎とジーンはただ一直線に洞窟の中を走っていた。

洞窟とは行っても、それなりに要塞としての整備は整っており、魔術光蟲による光がぼんやりと薄暗い洞窟の内部を照らす。

二人の後ろからは何人もの魔術師が追いかけてきており、時おり放つ元素変換系の魔術を振りむかずにかわしながらただひたすらに洞窟の奥を目指す。

不意に小次郎が立ち止まった。

「ジーンさん。恐らく敵はもう前には敵は居ません。ここが最深部で、目的の装置があるはずですよ。それと多分アゲハもここに居るでしょう。奪還は任せます」

「小次郎、アンタはどうするんだよ？」

「あたしですか？ あたしはここでやってくる連中を食い止めます」

小次郎はそう言うと、今まで抜いたり差したりしていた異国風の剣を抜き放つ。

加えて、通常使わない小さいほうの剣も抜き放ち両の手に剣を構える。

「因縁はあなたの手で片付けてください。恐らく、キングはそれを待っているようにも思えます」

「死ぬなよ」

小次郎の背中にジーンは言った。小次郎はそれに振り返りもせず

に答える。
「分かってますよ。その代わりに、こっちの期待にもキチンと答えてくださいね」

「わかってら」

駆け出す瞬間は同時。

ジーンは前の方に向かって駆け出し、小次郎は後ろから追ってくる敵の方へと駆け出した。

走り続けること数分、通路の奥に黒く、頑丈そうな扉が現れる。

黒い扉の前にたどり着くなり、ジーンはほんの少しだけ持っていた荷物をあさり、爆弾を数個取りだすと次々に扉に貼り付けた。

タバコに火をつけ、少しばかりくゆらせると口元から外し、少し灰を落す。先端の橙に燃える箇所を導火線に押し付けると、すぐさま火がつき雷管へと近づいていく。

ジーンは火がついたのを見届けると、急いでその場を離れ先ほど曲がった角まで戻ると、そこでようやく紫煙をはきだした。

爆発音が洞窟内に鳴り響き、爆風が吹き荒れ、ジーンは思わず目

を瞑った。

ジーンは、黒い扉を破壊出来たことを確認すると、もう一度だけ紫煙を吸いこみ、吐き出すと同時に地面に落した。

「くっそ、甘く見積もりすぎたな。耳くらいはふさいでおくべきだった」

鼓膜の奥に痺れる感覚があったが、大して気にはせずさっさと先に進んでいく。

先ほどの黒い扉を抜ける。

抜けた先はドーム状の巨大な部屋だった。

暗い部屋の中に祭壇のように液体の入った大きな容器。ただ、その液体が発する光だけが、部屋の中を照らし出す。それに繋がるようにして、天井中、あるいは床中に張り巡らされた黒いコード。それに、付随するいくつかの端末。

小次郎の言ったとおり、やはりここが最深部であり、ここの制圧が目標なのだと思います。

ソルファとアゲハ。

アゲハは部屋の中央にある溶液の中に入り、光は彼女の元から発せられている。

彼女は黒いゴシックなドレスに身を包み、まさに御神体と言った風情がある。

それは、大魔術に代表される荘厳な魔術儀式の形式を踏襲しながらも、新しい形式を導入することによって生まれた儀式形態。部屋全体が新しい怪物を産むための胎内の様であり、また怪物そのもの様でもある。

ソルファは、液体に浮かぶアゲハを眺めながら恍惚となっているようだった。

「ジーンだな」

ソルファは、振り向かずと言った。

「素晴らしいだろう？ この力が有れば何もかもが思いのままだ」
ジーンはさして関心も無さそうにその容器を見上げて、新しい夕

バコに火をつけた。

「そうか。お前はお前がただ強くなりたいたんだな。お前はもう、あの時倒したお前よりも数段も強い。もう俺なんか問題にならないぐらいに強い。それ以上に何を求めるって言うんだ」

それは単純に拳を交えてのジーンの感想だった。

自墮落に日々を浪費していた自分と、目の前の男は別れたあの時から随分違うところになっている。

「何がお前をそこまで駆り立てるって言うんだよ」

ソルファがジーンに振り返る。その顔つきは鬼の形相と形容すべき、憤怒の顔。

「お前に何が分かる。どれだけ力を求めようとも、どれだけ力を得ようとも、どれだけもてはやされようと、どれだけ倒そうとも満たされないのだ！ だからこそ求める。」

完全足りうる力を得ることによって、満たすのだ」

ジーンは紫煙と共に、ためいきをつき何度も頭をかきむしる。

「お前バカだろう」

「何だと！」

「その脳みそ直すために、一発ぶん殴らせてもらっぜ」

タバコを脇へと、吐き捨てる。槍を構え、一気に突進。

「無駄だといっているだろうに」

ソルファは、後ろに一気に跳び引く。

「穿て」

火球が出現。ジーンに襲い掛かる。

ジーンは突進をやめることなく火球をかわし、当たるものだけを弾かずに受け流す。そうすることによって重い攻撃も何とか防御が可能になる。

「穿て」

次々に襲い掛かるソルファの火球。

最低限の動きだけで防ぎきり、ソルファとの距離を詰める。

最初から当たることを前提にしていれば近づけるのだ。

ついに射程圏内に捕らえ、刺突。

だが、その一撃は見事なまでにソルファに受け流されていた。

「そっちの腕も上げたみたいだな」

「穿て」

至近距離に火球が出現。

ジーンはとつさに横に転がり回避する。

今のソルファの一撃一撃は体のどこかに直撃すれば致命的。だからこそ、考える前に動けるセンサーをフル稼働させる。

首に巻いたネックレスが僅かに瞬いたような気がしたが気にはしない。一瞬でも意識をそらせばそれが命取りだ。

再び接近を試みようとして跳躍。

だが、それはソルファも同様だったらしく空中で撃突する。

一合。ジーンが槍を払い、ソルファが受ける。

一合。ソルファがすぐさま切り返し、ジーンが受ける。

一合。ソルファの攻撃が圧力を増し、ジーンに畳み掛ける。

一合。ソルファはジーンを地面に叩きつけた。

背中から落ちるのはまずいと、とつさに受身を取る。しかし、代わりに折れたほうとは反対側の肋骨が逝った。

打ち合った感じ、技の冴えだけでなく、バベルズ・アトラスの能力アップによる身体能力も向上しているようだった。

激痛を堪えながら、それでもすぐさま起き上がり、槍を構える。

「インファイトなら負けないつもりだったんだがな」

「だから、無駄だと分かっているのにどうしてそうまでして立ち上がる。ジーン。お前は どうして負けを認めない」

「生憎な。まだそのガキとの約束を果たしてないんだ。契約はいまだに実行中、だからここで帰るわけにはいかないんだって前にも言っただろう」

苦し紛れに笑顔を作ってみるが、引きつった顔にしかならなかった。「情が移ったか。らしくも無い」

「らしくねえ、らしくねえな。んなことは分かってんだよ」

いらだたしげに言った。自分は自分に似合うことをしていない。

「でもなあ、不思議なことに気分は悪く無いんだ」

「そうか、ならばその不要な愛着だけを抱いて散るが良い。穿て！」

一瞬にして、ソルファの周りに十を越える火球が出現。一斉に襲い掛かる。

飛来する火球を的確に回避し、防御に専念する。

だが、ソルファはそんなことは関係なしに一気に接近。

杖によるなぎ払い。

それを受け止める。ガードの上からも衝撃が襲い掛かる。

「ぐおお！」

ジーンは押し込まれ、ソルファの重く、固い攻撃はひたすらに続く。

ガードの隙間を縫って何発もぶん殴られ、後ろへ下がるが構えは決して解かない。

ソルファの打突を、もぐりこんでかわし、腹に石突の一撃をぶちかます。

僅かに効いていたようだが、連打を諦め打撃の範囲内から抜け出す。

ソルファが指を弾く。

その瞬間、ソルファによってばら撒かれたカードがいくつもジーンの周りに落ちていることに気が付いた。

爆発。

ジーンの周囲にあったカードが次々に爆発。

とつさにガードを固めるものの、軽減しきれない爆風がジーンへと襲い掛かった。

「諦めの悪さには尊敬を通り越して呆れさえ覚える」

「はっ、どうとでも言いやがれ。今の程度なら何発当てようが倒れやしねえーんだよ」

それでもジーンは倒れない。

額から瞳へと落ちる血を拭い、槍を構える。笑みの形は崩さない。

「仕方ない、いい加減分かせてやる」

不意に、ソルファから赤く立ち上る瘴気。

強大な魔力放出による、赤い輝き。ソルファはかなりの魔術師でも到達が不可能な現象を発露させる。

最上級の個人言語の発動。

「させるかよ！」

それを予期し、ジーンはソルファに接近戦を仕掛ける。

「穿て」

あまりにも分かり易すぎる攻撃に、ソルファは正面から火球をぶつけ、ジーンを壁に叩きつけられた。

「汝、鍵を開くならば上等な扉を与えてやろう。汝、契約に即し我に力を見せたまえ！」

ソルファの頭上に黒い歪みが発生する。歪みは時間の経過と共に増大していく。

契約獣の召還。

それは、個人言語系魔術の1つの完成点であり、1つの奥義。自らを魔術の奥に埋め込み、その魔術の化身を呼び出す秘法。

「出でよ。紅蓮乱流！」

黒いひずみが緩やかに開き、赤い竜の頭が飛び出す。

「食い尽くせ」

ソルファの掛け声と共に、紅蓮乱流が咆哮を上げる。そしてジーンへと襲い掛かった。

壁から起き上がり、すぐさま回避を試みる。

しかし、起き上がるうにも意外に効いているのか立ち上がることもままならない。

「ここまでか……」

ジーンは思わず苦笑した。

紅蓮乱流は凄まじい勢いで迫ってくる。転がって避けたところで間にあう訳が無い。

似合ってる、抜群に似合っているバッドエンド。我ながら感心す

る。

ずっとこんなのを望んでいたようなそんな気がする。

町を出て、荒野に来て、クソ野郎だけがいる町で他の奴と同じように野垂れ死ぬ。

それを望んでいた。確かに望んでいたさ。

あの学院を出たときに何もかもを無くした。

それは、この街に来たときも変わることは無かった。

あいつに会うまでは、全部に折り合いをつけたつもりでいた。そんなものだと思っていた。ただ、それは諦めていたということだった

そうして、これが与えられた結末。

だとすれば全くと言って良いほどに納得がいくものじゃなかった。

「ふっざっけんなあああああああああああ！」

願った。

抗うために、アイツを取り戻すために、

この絶望的な状況を一発でひっくり返す力を。その、まぐれを全身全霊で信じた。

そのとき、ジーンのネックレスが強い輝きを放った。

カキリと、何かがずれる音がした。それは、体の使われない場所、閉じていた部屋が開いたと確信した。

紅蓮乱流がジーンを飲み込む。

「ギエエエ！」

だが、紅蓮乱流が悲鳴をあげソルファのところまで退く。

「弾いたって言うのか……」

「ばかな」

槍を貫通し、完全に全身を燃やし尽くされたとジーンは思ってい

た。しかし、体のどこにも損傷は見当たらず、むしろ負っていた傷が癒えていた。

ジーンの全身からは、ぼんやりと白い光が漏れ出している。ジーンの持つ槍にも同様にその光は行き渡る。今までに感じたことも無い生命感。地に足が着かず宙に浮いている、そんな感覚が支配した。「どんな手品を使った？ ジーン？」

「さあな、俺自身も何も分かつちやいねえ。だがなあ」

ジーンが立ち上がり、不敵に笑う。

「今、この時間だけはお前を思う様ぶつたたけるって事だろう」
駆ける。

(軽い！)

冗談抜きで、三倍以上の速度で駆け抜け一瞬にしてソルファとの距離を詰める。

「ちい」

超高速で繰り出されるジーンの攻撃。それをソルファは後退しながら、受け流す。

槍をなぎ払う動作に織り交せてソルファに蹴りを打ち込む。

骨の折れる音を確かに聞いた。

ソルファが、苦し紛れに攻撃を切り返しジーンは後退する。

「これでおあいこだ」

「黙れ！」

憎悪のこもった声でソルファが告げる。

「食らい尽くせ紅蓮乱流」

紅蓮乱流がジーンに襲い掛かる。

ジーンはその突進をかわすと、再びソルファへの接近を試みる。

三倍速で再び至近距離へともぐりこむ。

ジーンにとっての必殺の間合い。だが、ソルファは笑った。

「紅蓮乱流」

掌をつと差し出す。

一瞬にして黒い歪が出現、拡大し、紅蓮乱流がジーンへと襲い掛

かる。

「ち、出し入れ自由か」

回避不可能な一撃。

ジーンはとつさにガードを固めるが、吹き飛ばされ、紅蓮乱流も
るとも壁に叩き付けられる。

紅蓮乱流の灼熱の炎に焼かれる苦痛。

だが、それは槍でガードした上からによる間接的な熱。
まだ動ける。そう確信し、紅蓮乱流の頭を弾き飛ばす。

紅蓮乱流の尻尾が、ソルファの掌の動きに連動してジーンに襲い
掛かる。ジーンはそれを受け止める代わりに払って弾いた。

「ギエエエエエー!!」

紅蓮乱流が苦痛にもたえるように叫び、引き下がる。

「拮抗している……。僕の紅蓮乱流と、ジーンが……」

「そうか、そういうことか！」

ジーンは、叫ぶと同時に理解した。倒せる、と。

ソルファではなく紅蓮乱流そのものへと接近する。

図体に似合わず、どこから出せるとなれば、いくら三倍速で動け
るジーンでも至近距離で出された場合かわしきれない。

ならば、その元凶を叩きつぶせば良い。それがジーン考えた。

倒せると確信に至ったその動きに一切の迷いは無い。

紅蓮乱流がジーンへと襲い掛かる。

ジーンはその牙をかわすと、すれ違い様に槍を薙ぎ目を切り裂く。

(行ける!)

巨体が蠢き、ジーンへと締め付けにかかる。

跳躍。

その締め付けをかわし、投擲。

もう片方の目に突き刺さり、紅蓮乱流が悲鳴を上げる。

(あと一発!)

ジーンはさらに紅蓮乱流の頭に飛び乗ると、槍を抜き取り、
「フィニッシュだ!」

「この魔術はな、かなりの短時間個人内に圧縮した時間を持つことが出来る。だが、その動いた分の揺り戻しが必ずやってくる。体が千切れなかった分マシだと言えるが、もうお前の体は使い物にならないはずだ！」

「それはお前も同じだろう。ソルファ、紅蓮乱流によってお前の魔力も尽きたはずだ」

ソルファは嘲笑を隠そうともせずに哄笑した。

「ジーンお前は魔術師を侮りすぎている。最後に残ったこの体で、叩き潰してやるう。お前のその動かない体でどこまで耐えられるか？」

ソルファは杖を捨てると悠然と歩み寄ってくる。

ジーンは襲来に備えて拳を構える。ただ、今のジーンは精々構えるだけで、中身の無い張りぼてと同じだ。ソルファはそれを明らかに見破っているようだった。知識から、直接目から入る情報、その二つから。

ジーンの前までやってくると、ソルファはジーンと同じ形で構える。体術はかつてジーンが学院時代に自ら授けた技だ。

「心して受けるよ」

ソルファは、腰だめに構えた拳を真っ直ぐとジーンへと突き出す。鳩尾にクリーンヒットする直突き。一瞬呼吸が止まる。

ソルファは、それに畳み掛けるように、掌打、突き、肘打ち、と連打を繰り返す。

最低限の防御だけをし、後は全て体で受け止める。

ほとんど壊れたも同然の体には、その一撃一撃は致命的だった。だが、それでも倒れる訳には行かない。

ただひたすらに繰り返される攻撃にジーンは耐えた。

「少しは反撃したらどうなんだ！」

「くっそ！」

ソルファは罵倒する気持ちを、ジーンを見下す気持ちを隠そうとはしない。

さらに、連打は続く。ジーンはただひたすらに耐える。

意識が飛びかける。それでも、ギリギリのところまでふんばり続けた。

ソルファが連打を繰り返すとジーンはたまらず後ろへとよろけた。

決める。

もはや、ジーンは気力だけで立っている。あとはその気力を断ち切る一撃。それだけで詰み手だった。

ソルファが一步強く踏み込み、ありつたけの剄力を込めて直突きを撃った。

当たったと完全に確信した一撃、その攻撃は空を切る。

ジーンは、ソルファが突き出した手を僅かに残された力で払い、ソルファのわきに回りこんでいた。

そして、ゆっくりとした動作で置くようにソルファの眼前に右の拳を突きつける。

「悪いな、今回は賭けは俺がもらった」

ジーンはこの瞬間を待っていた。

もうボロボロになって何も出来ないと思いつまみせ、決めに来るこの瞬間を待っていた。

「ばかな」

そうつぶやいたときには、何もかもが手遅れだった。

「寸剄」

プロセスを圧縮する。

全身の力を解放する。足から発した力は腰を伝達し、腕を伝わり拳へと届く。

踏みしめた地面は割れ、拳は空気を切り裂く。

ほとんど零距离からの一撃。その一撃を食らってソルファは空中へと吹き飛び、地面を転がるとそのまま大の字に倒れ動かなくなっ

た。

寸剄、それは一瞬にして全身の剄力を拳に集めて発する技。加えて、ジーンの力である《圧縮》を用いたものその一撃は必殺技と言っても過言ではなかった。

「がは！」

揺り戻しで、寸剄に使った筋力が一斉に逝った。だが、それでもジーンは倒れる訳にはいかない。目的は達せられていないのだ。

ソルファが起きているかどうかは確認せずに、そのままアゲハの入っている巨大な容器に向かって足を引きずりながらも歩き出す。

ソルファが地面にばら撒き発動し損ねた魔術弾丸をいくつか拾い上げる。

使い方なんぞ知りはしなかったが、魔術を使えないものでも魔術弾丸は発動できると、以前ハルドが言ったのを聞いた事があった。

キーになる魔術を注ぎ込む以外には強い衝撃を与えることで、本来の効果の何分の一か程度の威力でしか無いが発動することができ

る。ジーンは容器に向かって、カードをいくつも思い切り投げつけた。直線的な軌道で容器に突き刺さると、カードが爆発し容器が砕ける。

決壊し、容器の中から液体があふれ出す。流れる液体と一緒にアゲハが落ちてきてジーンはそれを抱きとめると、そのまま膝をついた。

「ジーン……さん」

腕の中でアゲハは、眠ったままうわごとを呟くように言う。それを見るなり、ジーンは笑った。

「心配させんじゃねーよ、バカ」

ジーンを支えていた気力が折れ、そのままアゲハに覆いかぶさるように気を失った。

狼化したカーリイが、力任せに攻撃を繰り返す。

その一つ一つの動きは、子供の遊びも同然なのだが、そこに加えられている膂力、速度は肉体を強化した能力者や魔術師を圧倒的に凌駕する。

リナはその攻撃を、パリングやスウエーバックで確実にいなしていく。

カーリイの大振り、その動きにあわせてダッキング。

一瞬にして、距離を詰めるとがら空きになったボディに全身全霊のフックを叩き込む。

「ぐうおおおおお」

確かな手ごたえを感じ、リナは顔を上げる。

だが、カーリイは力を振り絞ってリナの首に噛み付きかかっていた。

慌てて左腕をあげ防御。

リナのイドであるエメラルドのシールドの出力を左腕に集中させる。

だが、カーリイの噛み砕く力は強化したリナのイドを上回り、シールドへと食い込んでいく。

「ちっ！」

リナは、さらに数発カーリイのボディに拳を叩き込んでカーリイを引き剥がすと距離をとって拳を構え直した。

なんとか左腕を噛み千切られることは回避したものの、結構な深手を負ってしまった。

しかし、それはカーリイも同様であり先ほどのボディーブローは結構なダメージを与えていたようだ。

（戦況は五分五分、十ラウンド、判定に差は無し。ここからが勝負の分かれ目ね）

リナは相手をかく乱する蝶のようにステップし、蜂のごとく刺すタイミングを窺う。

一方のカーリイは、その蝶のステップの中に一瞬の間を見出し食

い殺さんと身を屈め飛び出すその瞬間を待つ。

不意に、黒いしずくが拳の上に落ちた。

それは一つ、二つと落ち始め、次第に落ちる間隔が減っていく。

一瞬にして雲が空に広がり、雨音は次第に大きくなりそれは黒い豪雨となった。

リナはそれを意に介せず、ステツプインを試みる。すると、カーリイは後ろへと下がり狼男の変身を解き、燃えるような赤色の髪が特徴の男へと変貌した。

「この勝負は預ける」

「どういつつもりよ狼男！　さんざんその気にさせておいて逃げるつもり！」

「こつちの目的が消失したんだ。俺が正義を成す理由もなくなっちまったしな」

カーリイは放っておいたマントを手に取り、リナに背を向けた。

「アバヨ　いつかあったらその暁には俺の正義の礎となってもらうぜ」

「待ちなさい！」

リナは、背を向けたカーリイに追いつがる。だが、カーリイが後ろに爆弾を投げ、爆弾はリナの目の前に転がってくる。

とつさにガードをし、シールドを全身に展開。

爆風があげると、そこには誰もおらず、一枚だけ紙切れが落ちていた。

いつか必ず相手してやるから待っているよ、マイハニー。

リナはそれを拾い上げさつと読むと激昂し、それを地面に投げ捨てると何度と無く繰り返し返して踏み潰した。

「勘違い野郎が！　あいついつかぜってえー死なす！」

リナは雨の中で咆えると、八つ当たり乱戦現場に突撃し、敵味方構わずぶつ飛ばしまくった。

リボルバー式拳銃に雷撃が集まっていき、引き金を引き絞る。
刹那。

イレーヌが血の鞭を振るいハルドへと襲い掛かる。

腕を狙った一撃、とつさに腕を引つ込めるがリボルバーの銃身がぶった切られた。

暴発を予期し、ハルドは雷光銃を空中に投げ捨てると、それは爆散した。

「ふふ、これで貴方の頼みの綱のレールガンは壊れた。貴方の負けは確定したも同然ね」

「それは、どうか。お前の個人言語にしる、あの術式の展開はそれだけで魔力を消費する。始めから長引かせることが目的だったらお前はどつする」

ハルドがそう言うと、イレーヌの周りに展開していた赤い粒子状のものが消失する。

ハルドは、雷光銃の威力をちらつかせることによって、プレッシャーを与えイレーヌの術式の強度を無意識のうちに上げさせて魔力を消耗させることが狙いだった。

元より、いつ壊れてもおかしくない銃。

むしろここまで良く持ったと言っても良いぐらいだった。

ハルドは、片方に持った自動拳銃と同じ型の銃を取り出し、構える。

「さて、これからが本当の戦いだ。覚悟は良いか！ イレーヌ！」
「やるしかないようね」

互いに、あの時から身につけたものは捨て、銃と鞭、あの時と同じように対峙する。

すると、不意に黒い雨が降った。

(黒い……雨？ バカな)

黒い雨。それは、魔術系の国で発生する現象。仮面の外側から、

魔術を引き出すことによつて自然環境に影響が出る。それによつて起こる自然現象である。

フロンティアは、もともと能力者と魔術師との戦いの跡地であり、土地に潜在する力が破壊されつくされているために、魔術による自然現象である黒い雨は滅多なことでは発生しない。

少なくとも、ハルドがこの町に来てから黒い雨が降ったということとは経験に無い。

「止めね、止め。うちのボスがしくじつたみたい」

「どういうことだ？」

「今回のミッションはアゲ八つて女の子が持っている力を完全解放することによつて、1つの大魔術を完成させることにある。黒い雨が降ったことは、まあつまりはそれが暴発してこうなったって言うことよ」

イレー又は、血の鞭の術式を解除し平時のナイフへと戻すと、またも血の入った試験管を白衣から取り出す。

発砲。

ハルドは、術式を解いたイレー又目掛けて二つの銃で銃弾をばら撒いていく。

だが、イレー又はそれを転がりながら回避し試験管の中身を飲み下した。

「望むべくは扉、仮面から仮面へと、受け渡せその力。出でよ」

イレー又の足場に小さな窓のような扉が現れ、底が開くとイレー又はその扉の奥、穴の中へと消えて行く。

待て！ と叫ぶ暇も無く、ハルドは消えてなくなった扉を眺めて軽く歯噛みした。

「おい、出て来いよいるんだらう？」

ハルドは、どことも無く叫ぶと、目の前の何も無い空間からライフルを背負ったアンネが突然現れた。

「追いますか？ 彼女はあの洞窟の中に移ったようですが……」

「別に構わん。どうせ、あとは逃げるだけしか出来ないだらうに。」

それに祭りは終わったようだしな、追う理由も見当たらない」

黒い雨は、とめどなく降り注ぎ乾いた地面を黒く染めながらも、濡らしていく。ハルドは共通言語魔術「鷹の目」で視力を強化すると、崖の下を見下ろすと所々で戦いが終結したようで静まり始めている。

もつとも、エメラルドの光を放ちながら大暴れするリナは当然あのままだろうが、じきに止まるだろうと楽観的に予測した。

「しかしまあ、どうして戻って来ちまったんだか。せっかくお前さんの身を案じて先にやったつてのに」

「たまたまですよ、たまたま。ただちよつと、貴方と戦っているの方が格上に見えましたから戻ってきただけです……」

「役立たないつてのになあ。そういうところは、なかなか可愛いぞ」ハルドは、後ろを振り返り、ぽんとアンネの頭に手を置く。そして、巖のように動じない顔で微笑んだ。

「誰がアンタなんか！」

その日、珍しくアンネは顔を真っ赤にしてハルドにぶち切れたのであった。

小次郎は、二つの剣の元に敵をひたすらに切り伏せていた。

敵の流れに一切とめどなかったのだが、ここに来て敵が攻め込んでくる気配がなくなつてきた次々に敵を蹴散らしていくうちに、一切誰も来なくなつたため、小次郎はジーンたちのもとへと急いだ。

洞窟の中をしばらく走りぬけ、抜けた先はドーム状の部屋だった。床には幾つ物太いくだが通り、部屋の中には大きな水槽のようなものがあつたようだが今はそれは割れてしまっている。

部屋の中は、炎の魔術で部屋のいくつかの箇所が燃えており、それはこの部屋で起こつた戦いの壮絶さを物語っているようだった。

小次郎は更に部屋の中を見渡すと、倒れたジーンとアゲハ。それにソルファを見つけた。

すると、部屋の中に突然轟音が響き渡りドア程度の大きさの魔術の扉が出現し、そこから研究者風の格好をした女、イーレーヌが現れる。

イーレーヌと、小次郎は目を合わせるなり早速お互いの獲物に手をかけた。

「ねえ、取引しない」

「何をですか？」

お互いに、獲物を構えながら言う。

「私はもう、アゲハを回収するためにここに居ない。そこにいるジーンって男にも興味はない。私はただこの男を回収して逃げるだけ」

小次郎はしばらく黙ると、剣の柄から手を離れた。

「いいでしょう。行きなさい」

「感謝します」

イーレーヌは、気絶しているソルファを肩に引っ掛けて持ち上げると自ら現した扉の中へと入っていく。

「そうそう、良い事教えてあげる」

扉に入りながらもイーレーヌは、後ろを振り返る。

「狼牙衆は、私達しかいない。けれども、私達の後ろには私達みたいな存在に喜んで援助をする連中がいるってことを忘れないことね。いわば貴方達の組織を壊滅させたクラスのそしきはいくつもあるのよ？ やり遂げるつもりはあるの？」

「命に代えてもやり遂げてみせる。もし、仮に俺が出来なかったとしてもこの男ならば成し遂げることが出来る。今日その男を倒したようにな」

小次郎は今や気絶しているジーンを見下ろしながら言う。

ソルファと相打つ事が出来たということはつまりは、期待を寄せていた通りに活躍してくれたようだ。

自分ではまぐれを起こせない。だから、起こせる人間になら、託せそうなそんな気がした。その予感当たったのだ。

「ふうん。別に私は知ったことではないのですがね、勝手にしなさ

い

「勝手にするぞ」

イレー又は扉の中へと消えていく。小さな扉が地面の中へと轟音を立てながら消えて行った。

小次郎は完全にその扉がなくなつたと分かると、その場に屈みこんで眠っているアゲハとジーンを見下ろした。

「なんだが、こうしていると兄妹みたいですね。あんた達は」

お互いを守っているように身を寄せ合つて安らかに眠る二人。それはまるで、兄が妹を思いやるようでもあり、妹が兄を思いやるようなところがあつた。

洞窟の外から勝利をつげる雄たけびが響き渡ってくる。多分外にいる連中も、やがてはここにやってくることだろう。

「あーあ、今日の主役二人が何やってんですかね。形無しですよ」と

小次郎は一人ごち呟くと、苦笑した。

エピソード

それから二ヶ月が経過した。

ジーンはぼんやりと生活していた。淡々と仕事をこなしながら、日々の生活をゆったりとつづけていた。ゼクスでゆったりと言うのも気持ちの悪い話だが、こここのところの内情は穏やか極まりなかった。

あの日使った魔術らしき《圧縮》は、実戦では使うことは無くとも地道にものにしつづつあった。

その日もジーンは適当に事件屋で依頼を受けて仕事をした。すべて終わった後でマルロに、

「どうしても相談したいことがあるから酒場に蜂時に集まってくれ」「わかった」

何のことだか検討もつかなかったが、特にすることも無かったので行ってみることにした。

そうして、ジーンはその日の八時に酒場に行ってみると、

「だからさ、どうしてお前らがここにいるんだよ!」

「いやまあ、色々ありますねえ、あたしらの組織も壊滅しまして、ちよいと復旧に時間がかかるんですわ」

「じゃあ、なんでこの町なのさ」

「この町大好き!」

「会話をしろ! 会話を!」

バン! バン! とジーンはテーブルを叩く。

フロントイアゼクス夜の酒場の風景。
そこにいる面々は、二カ月前に《狼牙衆》に殴り込みをかけた三十人近くいる連中。

生き延びたジーンとハルドトリナもここにいるのだが、《狼牙衆

《一緒に襲撃をかけた小次郎と、アンネとアゲハの三人も加わっていた。

発端は、小次郎達一行の突然の来訪にあった。マルロが一応三人の身分を預かり「こいつらどうするよ？」面々を集めて聞いたのだった。

「アタシは別に構いはしないわよ。アゲハと一緒にいられるし、ねー」

リナは笑顔でアゲハに向かって手を振ると、アゲハも手を振った。なんかもう、リナはアゲハにメロメロだ。可愛がっていた愛猫が戻ってきた状況を連想させる。

「俺としてはだな、仕事さえキチンとこなしてくれれば、お前らの身分を隠蔽するし、住むところだって与えてやっても良いと思ってる」

マルロが顎に手を当てて言った。

「それならご心配なく。あたしは、昔は色んなところを渡り歩いていて、ここにいる皆さんと同じような生活をしていたような時期も有りましたから。腕っぷしがものを言う仕事なら全く問題ありません」

件の襲撃の時に、小次郎の実力の一端は皆が見ていた為に誰も何も反論できなかった。

「それに、ですね。この娘も魔術師としては意外と有用なんですよ」

と、小次郎はアンネを皆の前に差し出す。アンネは僅かに困惑したようだが、それでも

前を向き皆を見わたす。そんなアンネを見て、ハルドが鼻で笑った。

「この小娘がか？」

「何か？」

無表情の中に明らかに含まれている嫌悪。

「別に。ただ、一芸だけに秀でた《空間転移バカ》のどこが有用なのかなんてねえ」

「あら、あなたのその銃だって基本的には邪法じゃないですか。才

能が無いのがモロバレです」

「バベルズ・アトラスをまともに使えば、その言葉認めてやっても良いよ」

「もつとマシな個人言語を身につけたならば、共通言語の1つでも覚えてあげましょう」

気温が下がり、何か見えない圧力と圧力が押し合って、ハルドとアンの均衡を保っているような気がした。

ジーンはため息を一つ吐くと、手を上げる。

「俺は、どっちでも良いや。終わったら呼んで」

と、ジーンは椅子から立ち上がるとフラフラと外に赴く。カランと乾いたベルが鳴りドアを開けて外へ。

ジーンは酒場の前の数段の階段に座ると、早速タバコをふかした。カラン、ともう一度音が鳴り後ろの扉が開く。

ドアを開けた主はジーンの隣に立つと、そのまま座ってジーンと並んだ。

「ジーンさんは私が戻ってきたら嬉しいと思いますか？」

「さあな」

眉を寄せて、一度煙を吸い込むと気だるげに吐いた。煙はもやもやと立ち上るが、突然の突風によってタバコの火ごと消えてなくなった。

ジーンは舌打ちをすると、もう一度タバコに火をつけて再び紫煙をくゆらす。

「でも、あれだ」

「なんですか？」

「少しくらいは毎日楽しくなんだろうなって思った」

「そうですか」

「そうだと」

沈黙が二人の間を支配した。

ジーンはぼんやりとニコチンが頭をクラクラさせてくれる感覚に身を任せ、アゲハはとなりで膝を抱いてうつむいている。

「ジーンさん、実はですね」

「なんだ」

「私、お腹すきました」

「俺もだ」

ドア越しに行われている会議はかなり脱線の様相を呈してきた。

話がまとまるには更に時間がかかりそうな気配。

晴れ渡る夜空の月は明るく、暗い街をぼんやりと青白く照らす。

ジーンはタバコの灰を指で弾くと無表情でこう言う。

「なあ、うちでメシ食ってく？ 今日俺が作るよ」

アゲハはそれを聞くと、いつものようににっこりと笑った。

「はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8352j/>

ブラックレイン

2010年10月8日13時52分発行